平成２１年度　文部科学省委託事業
「総合的な放課後対策推進のための調査研究」

放課後子ども教室
全国研究大会

事業報告書

平成 22 年 3 月 20 日

株式会社キャリアリンク

目　次

Ⅰ. 放課後子ども教室全国研究大会　要綱　P. 2
Ⅱ. 全体総括　P. 4
Ⅲ. 平成 21 年度 放課後子ども教室　実施状況　P.10
Ⅳ. 放課後子ども教室全国研究大会　開催意図　P.12
Ⅴ. 基調講演　P.13
Ⅵ. 事例紹介　P.24
Ⅶ. 激励講演　P.31
Ⅷ. 分科会　P.41
アンケート集計　P.51

Ⅰ　放課後子ども教室全国研究大会　要綱

１．主旨

放課後子ども教室の全国的な普及、活動内容の充実、活性化のための情報提供の場として研究大会を実施。参加者は、都道府県・市町村教育委員会等事業関係者、コーディネーター等の事業関係者、地域ボランティア等が想定されるため、“現場での課題解決の糸口が具体的に理解できる”課題解決型のワークショップを取り入れた研究大会形式とする。

２．日時

平成 21 年 11 月 24 日（火）　12:30 開場　13:30－18:00
平成 21 年 11 月 25 日（水）　 9:00 開場　 9:10－12:30

３．研究大会参加予定者（表彰式のみの参加予定者を含む）

	自治体関係者	教室関係者	合計
２４日	１００名	６５名	１６５名
２５日	６３名	３６名	９９名

（H21.11.18 現在）

４．会場　24 日：文部科学省講堂（合同庁舎７号館東館３階）

東京都千代田区霞が関三丁目２番２号

25 日：霞山（かざん）会館（霞ヶ関コモンゲート西館３７階）

東京都千代田区霞が関三丁目２番１号

（参考情報）第２回放課後子ども教室推進表彰教室

[背景]

文部科学省では、平成 19 年度から全国の市町村が実施主体となり、放課後や週末等の子どもたちの安全･安心な活動拠点(居場所)を設け、子どもたちに様々な活動を行う機会を提供する取組を「放課後子ども教室推進事業」として支援。そこで優れた活動を行っており、他の模範と認められる放課後子ども教室に対して、このたび文部科学省生涯学習政策局長より表彰状を授与することといたしました。表彰式は、「第二回放課後子ども教室全国研究大会」の冒頭で実施します。

[表彰要件]

「放課後子ども教室事業」の国庫補助金を受けている放課後子ども教室のうち、優れた取組をおこなっており、他の模範と認められる放課後子ども教室であり、平成 20 年度において 200 日以上実施、平成 21 年度において 200 日以上の実施を予定していること。但し、特段の理由がある場合は、開催日数が 200 日未満の場合でも推薦できる。

[表彰教室]

区分	自治体数	表彰教室数
都道府県(47)	42	48
政令市(17)	6	17
中核市(39)	6	6
合計	54	71

※平均教室開催数(H20･H21平均)　216．6日

5．研究大会プログラム

1日目	13:30-14:40	表彰式	放課後子ども教室推進表彰	文部科学省講堂（3階）
	14:40-15:00	休 憩		
	15:00-15:05	挨 拶	研究大会主旨説明	
	15:05-16:00	基調講演	「放課後子ども教室を支える 人材の研修・育成について考える」 東京学芸大学 芸術・スポーツ科学系 准教授 松田 恵示 氏 （文部科学省生涯学習政策局 生涯学習推進課生涯学習調査官） 	
	16:00-16:20	事業説明		
	16:20-16:30	休 憩		
	16:30-18:00	事例紹介	事例① 広島県 加計小学校取組事例 事例② 宝塚市 仁川小学校取組事例 事例③ 横浜市 NPO 法人 教育支援協会取組事例	
	18:15-19:30	情報交換会		食堂（1階）
2日目	9:10-9:40	激励講演	「公教育に求められるつなげる力 ～社会教育における地域との連携～」 前・杉並区立和田中学校校長 大阪府知事特別顧問 藤原 和博 氏 	霞山会館
	9:40-9:50	休 憩		
	9:50-11:30	分科会	テーマ①『地域資源としての人材の確保について』	
			テーマ②『人材の育成について』	
			テーマ③『活動場所の確保について』	
			テーマ④『プログラム内容の充実について』	
	11:30-11:40	休 憩		
	11:40-12:20	分科会全体会	各分科会アドバイザーによる分科会報告	
	12:20-12:30	閉会式		

Ⅱ　全体総括

■文部科学省委託事業「放課後子ども教室全国研究大会」実施実績

□参加者数　　２日間のべ　２５６名

	自治体関係者	教室関係者	合計
２４日	９６名	６８名	１６４名
２５日	５９名	３３名	９２名

「放課後子ども教室全国研究大会」は、放課後子ども教室の全国的な普及、活動内容の充実、活性化のための情報提供の場として実施した。

本研究大会を実施するにあたっては、全国の実践傾向を理解し、参加者にとってより適切なテーマを選定すると同時に参加者の意識を高めるために、事前アンケートを配布・集計した。その結果、61 の都道府県・政令市・中核市より申込があり、24 日は 146 名、25 日は 99 名、のべ 244 名の参加予定となった。

実際の参加は 24 日が 164 名、25 日が 92 名、のべ 256 名でほぼ前年並み（昨年度は 2 日間のべ 254 名が参加）となったが、今年度は 1 日目から 2 日目の減少率が高かった。昨年度が約 30%だったのに対し、今年度は約 44%となった。その傾向は特に教室関係者に顕著であり、約 51%の減少率となった。

■文部科学省委託事業「放課後子ども教室全国研究大会」実施成果

「放課後子ども教室」関係者が、本事業の意義を再認識することと全国での様々な事例や手法の入手により、日々の活動の充実・発展への一助となることを目標として次のプログラムで研究に取り組んだ。

①現状理解：平成２１年度　放課後子ども教室実施状況により、全国の実践傾向を理解する

②事業理解：基調講演、事業説明により、放課後子ども教室事業の意図と意義を理解する

③事例理解：事例紹介により、放課後子ども教室の展開例や事業運営手法を理解する

④意識向上：激励講演により、本事業での一連の取組を整理・再確認し、課題解決への意識を高める

⑤情報収集：分科会形式のワークショップにより、参加者同士が知恵の交流を図りな
⑥課題解決　がら個々の課題解決のための方策を模索する

二日間の研究大会プログラム構成と内容については、アンケート調査結果から、行政関係者、事業関係者の異なる対象かつ、経験度合いの異なる参加者に対して一定の効果を得たといえる。大会の１日目（松田恵示氏）と２日目（藤原和博氏）にそれぞれ設定した全参加者対象の２つの講演は、目論見通り“事業意義の再確認”と“課題解決への意識向上”の点から高い評価であり、その成果が確認できた。

同様に全体で共有した事例紹介についても、方針や取組内容の異なる 3 つの事例（広島県安芸太田町、兵庫県宝塚市、神奈川県横浜市）はバリエーション豊かで、しかもそれぞれが明確で具体的に紹介されていたため、参加者にとっての参考事例として有効であったと言える。

ワークショップ型の４つの分科会では、昨年度は課題解決のための具体案策定を目標としたが、今年度は各分科会に専門知識を有するアドバイザーが入り、全国での様々な事例や手法を入手することで、参加者が抱える日々の課題解決のための方策を模索することをねらいとした。昨年度は 3 時間であった分科会が今年度は 1 時間 40 分と、約半分になったにもかかわらず参加者の評価は高く、実施方法の見直しが適切であったことが実証された。

ただ、参加者の属性別に分けて見ると、行政関係者の満足度は教育関係者よりも低い傾向があった。現行のワークショップ形式での分科会実施が行政関係者のニーズにマッチしていないということも考えられるため、行政関係者にヒアリングを行うとともに改善策の検討が求められる。

最後に本研究大会の成果は、本研究大会の一連のプログラムを通して、放課後子ども教室事業の本質的な意義理解や事業の充実・発展のためのノウハウを参加者が得たことである。このことは「放課後子ども教室事業」での活用にとどまらず、他の放課後対策事業をはじめとした学校・地域・家庭連携事業に応用されるべきものであり、参加者が主体的かつ、効果的なマネジメント視点を持つことで「放課後子ども教室事業」の発展に寄与するものと思われる。

1 日目から 2 日目の参加者の減少率、および分科会での行政関係者に対する実施方法に課題は残ったものの、基調講演、事例紹介、激励講演といった参加者への情報提供は評価が高く、当初の目的であった“知恵の交流”を図ることができ、今後につながる研究大会となった。

■文部科学省委託事業「放課後子ども教室全国研究大会」プログラム概要

本研究大会は、放課後子ども教室の全国的な普及、活動内容の充実、活性化のために、

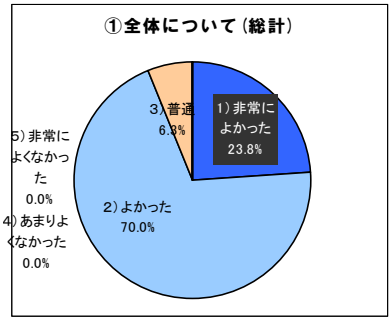
- 「基調講演」「事業説明」による事業意義の確認
- 「事例紹介」「激励講演」による事業運営の理解、意識向上
- 分科会による現場での課題の情報共有、課題解決方策の模索

の柱で構成されており、それらの相乗効果によって効率よく知恵の交流が図られることが、プログラムの企画意図であった。

そして知恵の交流によって得られた情報とともに、課題別の分科会ワークショップにより、参加者が課題解決のための方策のヒントを得て、大会後の取組に活かすことをねらいとした。

研究大会全体のプログラム内容に関しては、肯定意見が 93.8%で、多くの参加者に満足いただけた。自由記述にも「全国の自治体の状況や情報、課題を共有できた」、「今後の自分たちの事業推進のよりどころとなる」などの記述があり、十分な情報共有、情報交換ができ、今後の活動意欲につながったことがうかがえる。

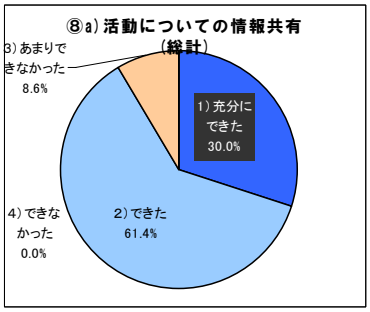
	行政関係者		教室関係者		双方所属		不明		総計	
	人	%	人	%	人	%	人	%	人	%
1)非常によかった	9	20.5%	10	38.5%	0	0.0%	0	0.0%	19	23.8%
2)よかった	31	70.5%	15	57.7%	0	0.0%	10	100.0%	56	70.0%
3)普通	4	9.1%	1	3.8%	0	0.0%	0	0.0%	5	6.3%
4)あまりよくなかった	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
5)非常によくなかった	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
総計	44	100.0%	26	100.0%	0	0.0%	10	100.0%	80	100.0%
無記入、欠席	1		0		1		0		2	



また、研究大会で意図したねらいに対して達成度を測る設問では、情報共有（必要な情報を得られたか）については肯定意見が 91.4%で、「新しい情報を得ることができた」「現在地域で抱えている課題にせまるヒントを得ることができた」という声が多く出ており、事例発表や分科会アドバイザーの具体的な取組事例やアドバイスにより、十分な情報共有ができたと思われる。

a) 放課後子ども教室の活動についての情報共有（事例紹介、分科会）について

	行政関係者		教室関係者		双方所属		不明		総計	
	人	%	人	%	人	%	人	%	人	%
1)充分にできた	10	25.6%	10	47.6%	0	0.0%	1	11.1%	21	30.0%
2)できた	24	61.5%	11	52.4%	1	100.0%	7	77.8%	43	61.4%
3)あまりできなかった	5	12.8%	0	0.0%	0	0.0%	1	11.1%	6	8.6%
4)できなかった	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
総計	39	100.0%	21	100.0%	1	100.0%	9	100.0%	70	100.0%
無記入、欠席	1		3		0		1		5	

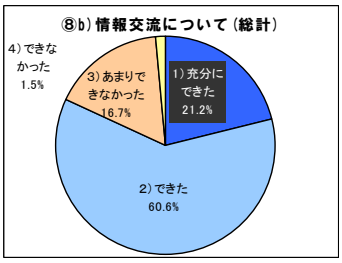


情報交流（参加者同士の情報交換、話し合い）についても肯定意見が 81.8%と満足度は高かったが、情報共有と比較すると約 10 ポイント低い。自由記述に「時間不足」の意見が多く見られたことから、十分に満足のいく情報交流（話し合い）ができなかったと

考えられるが、本事業の目的であった“知恵の交流”への参加者の意欲の顕れといえる。

b) 放課後子ども教室事業の課題解決の方策検討のための情報交流について

	行政関係者		教室関係者		双方所属		不明		総計	
	人	%	人	%	人	%	人	%	人	%
1)充分にできた	5	13.5%	8	40.0%	0	0.0%	1	12.5%	14	21.2%
2)できた	22	59.5%	11	55.0%	1	100.0%	6	75.0%	40	60.6%
3)あまりできなかった	10	27.0%	0	0.0%	0	0.0%	1	12.5%	11	16.7%
4)できなかった	0	0.0%	1	5.0%	0	0.0%	0	0.0%	1	1.5%
総計	37	100.0%	20	100.0%	1	100.0%	8	100.0%	66	100.0%
無記入、欠席	3		4		0		2		9	



今年度は、昨年度の課題である‘もっと話したい’という要望に応えるために、分科会運営を次のように改善した。

・情報交流に重点を置いた構成

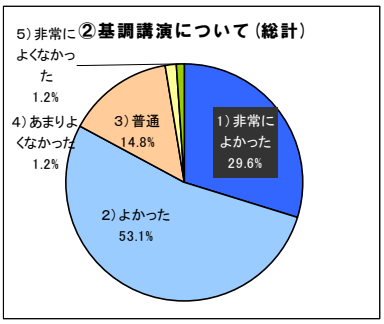
・参加者の特性を考慮した属性別グルーピングによる実施（一部）

これにより、昨年度は低かった満足度が改善し、課題も解消され、一定の効果を得たといえる。

事業理解　　基調講演、事業説明により、放課後子ども教室事業の意図と意義を理解する

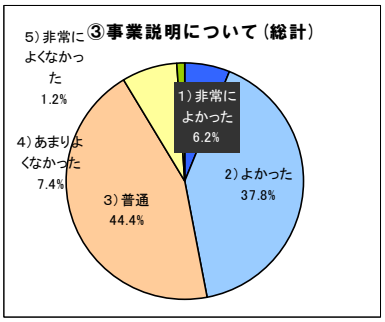
基調講演は、東京学芸大学　芸術・スポーツ科学系　准教授の松田恵示氏に、「放課後子ども教室を支える人材の研修・育成について考える」と題してご講演いただいた。子どもたちに関わる大人に求められる他者との関係を中心に、放課後子ども教室を支える人材を育成・研修するときのスピリッツを示す内容であった。アンケート結果は肯定意見が 82.7%と高く、「放課後子ども教室の役割を改めて認識できた」、「地域の方へ話をするときにも役立つ話だった」（P.54～参照）との声から、本事業の意義を理解し、取組意識を高めるという実施主旨に合っていたと判断できる。

	行政関係者		教室関係者		双方所属		不明		総計	
	人	%	人	%	人	%	人	%	人	%
1)非常によかった	12	27.3%	11	42.3%	0	0.0%	1	10.0%	24	29.6%
2)よかった	23	52.3%	12	46.2%	0	0.0%	8	80.0%	43	53.1%
3)普通	8	18.2%	2	7.7%	1	100.0%	1	10.0%	12	14.8%
4)あまりよくなかった	0	0.0%	1	3.8%	0	0.0%	0	0.0%	1	1.2%
5)非常によくなかった	1	2.3%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	1	1.2%
総計	44	100.0%	26	100.0%	1	100.0%	10	100.0%	81	100.0%
無記入、欠席	1		0		0		0		1	



また事業説明では、文部科学省　生涯学習政策局　生涯学習推進課　放課後子どもプラン連携推進室　専門官の竹田和彦氏より放課後子ども教室の自治体別実施率や事業の効果について、データを示しながら、本事業主旨、現状をご説明いただいた。「既に知っている情報ばかりだった」「今後の取組、国の方針、補助の動向等に関する説明がなかった」など、参加者からのアンケートにもあるように、事業主旨説明に加え、参加者は今後の取組検討につながる事業方針の提示を求めていたことがうかがえる。

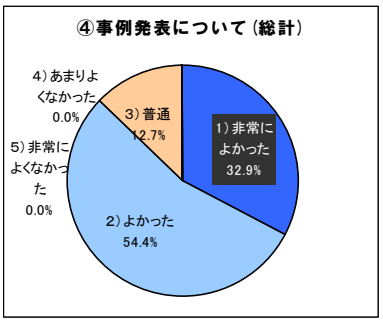
	行政関係者		教室関係者		双方所属		不明		総計	
	人	%	人	%	人	%	人	%	人	%
1）非常によかった	0	0.0%	5	19.2%	0	0.0%	0	0.0%	5	6.2%
2）よかった	14	31.8%	11	42.3%	1	100.0%	7	70.0%	33	40.7%
3）普通	23	52.3%	10	38.5%	0	0.0%	3	30.0%	36	44.4%
4）あまりよくなかった	6	13.6%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	6	7.4%
5）非常によくなかった	1	2.3%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	1	1.2%
総計	44	100.0%	26	100.0%	1	100.0%	10	100.0%	81	100.0%
無記入、欠席	1		0		0		0		1	



事例理解　事例紹介により、放課後子ども教室の展開例や事業運営手法を理解する

事例紹介では、広島県安芸太田町の加計小学校、兵庫県宝塚市・放課後遊ぼう会の取組、横浜市 NPO 法人教育支援協会（モデル事業）の取組をそれぞれ紹介した。加計小学校、宝塚市の取組は、活動の詳細と具体的なプログラムを写真を提示しながら説明いただき、参加者にとってイメージしやすく、参考になったと思われる。また、NPO 法人教育支援協会は、「小学校高学年の参加率向上に向けた方策」をテーマに、調査研究組織やプログラム開発内容などについて紹介された。少し切り口の異なる内容に、参加者の関心が寄せられていた。
アンケート結果は、肯定意見が 87.3%（昨年度 79.5%）で、高い満足度が得られた。「参考になった」という意見が多く、満足を得た理由としては、紹介事例をひとつ増やしたこと、およびその事例が参加者のニーズにあっていたと考えられる（P.58～参照）。

	行政関係者		教室関係者		双方所属		不明		総計	
	人	%	人	%	人	%	人	%	人	%
1）非常によかった	13	29.5%	8	32.0%	1	100.0%	4	44.4%	26	32.9%
2）よかった	24	54.5%	14	56.0%	0	0.0%	5	55.6%	43	54.4%
3）普通	7	15.9%	3	12.0%	0	0.0%	0	0.0%	10	12.7%
4）あまりよくなかった	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
5）非常によくなかった	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
総計	44	100.0%	25	100.0%	1	100.0%	9	100.0%	79	100.0%
無記入、欠席	1		1		0		1		3	



意識向上　激励講演により、本事業での一連の取組を整理・再確認し、課題解決への意識を高める

激励講演は、前・杉並区立和田中学校校長で大阪府知事特別顧問の藤原和博氏に、「公教育に求められるつなげる力～社会教育における地域との連携～」と題してご講演いただいた。和田中学校での自らの経験をもとに、現在の立場での情報も示しながら、地域と教員の協働運営の方法を説明された。参加者ができることを具体的に提示され、意欲を喚起する文字通り‘激励’の講演となった。
アンケート結果は、肯定意見が 91.7%で、「もっと聞きたかった」「元気をもらった」という声が多数あり（P.60～参照）、参加者がそれぞれに本事業の意義や自ら

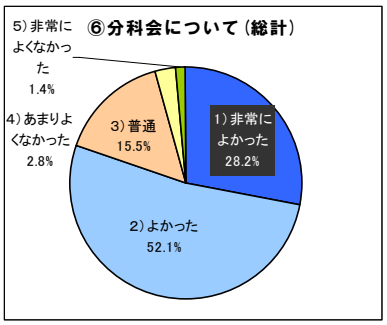
の経験を再確認し、課題解決への意識を高めるねらいが達成できた。

情報収集 **課題解決**	分科会形式のワークショップにより、知恵の交流を図りながら個々の課題解決のための方策を模索する

分科会のテーマは、①「地域資源としての人材の確保について」、②「人材の育成について」、③「活動場所の確保について」④「プログラム内容の充実について」。今年度はそれぞれの分科会にアドバイザーが入り、参加者の課題に応じて情報が提供される形で、参加者は課題解決に臨んだ。

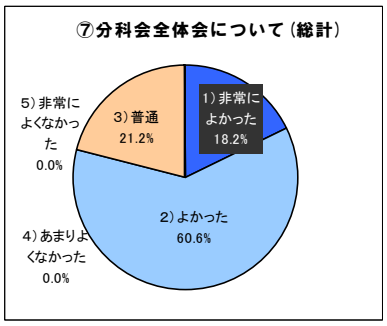
肯定意見は昨年の 53.6%に比べ 80.3%と飛躍的に上昇した。昨年度の参加者の声を反映し、参加者同士の情報交流を主としてプログラムを変更したことが、参加者満足につながったといえる。

	行政関係者		教室関係者		双方所属		不明		総計	
	人	%	人	%	人	%	人	%	人	%
1)非常によかった	8	20.5%	11	52.4%	0	0.0%	1	10.0%	20	28.2%
2)よかった	23	59.0%	8	38.1%	1	100.0%	5	50.0%	37	52.1%
3)普通	5	12.8%	2	9.5%	0	0.0%	4	40.0%	11	15.5%
4)あまりよくなかった	2	5.1%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	2	2.8%
5)非常によくなかった	1	2.6%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	1	1.4%
総計	39	100.0%	21	100.0%	1	100.0%	10	100.0%	71	100.0%
無記入、欠席	1		3		0		0		4	



分科会全体会は、各分科会アドバイザーが参加した分科会で出た課題とその解決のヒントについて発表を行った。分科会同様、肯定意見は昨年の 48.4%に比べ、78.8%と上昇した。「他の分科会の内容もよく理解できた」との声が多く、テーマ内容に通じた各分科会のアドバイザーからの簡潔な発表により、参加者が参加していない分科会の内容も知ることができたことが、満足につながったと思われる。

	行政関係者		教室関係者		双方所属		不明		総計	
	人	%	人	%	人	%	人	%	人	%
1)非常によかった	5	13.9%	7	35.0%	0	0.0%	0	0.0%	12	18.2%
2)よかった	20	55.6%	12	60.0%	0	0.0%	8	88.9%	40	60.6%
3)普通	11	30.6%	1	5.0%	1	100.0%	1	11.1%	14	21.2%
4)あまりよくなかった	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
5)非常によくなかった	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
総計	36	100.0%	20	100.0%	1	100.0%	9	100.0%	66	100.0%
無記入、欠席	4		4		0		1		9	



■まとめ

アンケート結果には概ね参加者の満足度が高かったことが顕れた。

この効果をより高めるためには、今後も、以下の点から継続的な研究大会の開催が求められる。

・参加者は研究大会の開催参加に意義を感じており、参加者からの要望が高い

・情報共有、情報交流を行う場として有用である

・単発的な開催では、“知の交流”による課題解決手法のノウハウが定着しない

Ⅲ　平成２１年度　放課後子ども教室　実施状況

「文部科学省事業説明資料」より

放課後子どもプランの推進（放課後子ども教室推進事業）

（20年度予算額　7,765百万円）
21年度予算額（委託事業分）　127百万円
21年度予算額（補助事業分）　14,261百万円の内数

○学校の余裕教室や校庭等を活用し、地域の大人の協力を得て、子どもたちの安全で安心な活動拠点(居場所)を整備
○放課後や週末等に、子どもたちに学習活動やスポーツ・文化芸術活動、地域住民との交流活動等を実施

都道府県
＜推進委員会＞

○域内の総合的な放課後対策事業の在り方検討
○研修の実施

市町村
＜運営委員会＞

コーディネーター（総合調整）

安全管理員

学習アドバイザー

○教室の実施
○活動内容、運営方法検討

■活動メニュー例
体験：野球、茶道、書道、伝統芸能　など
交流：地域住民との異世代交流、異学年交流　など
学び：宿題、補習、英会話、科学実験　など
その他：昔遊び、地域行事への参加　など

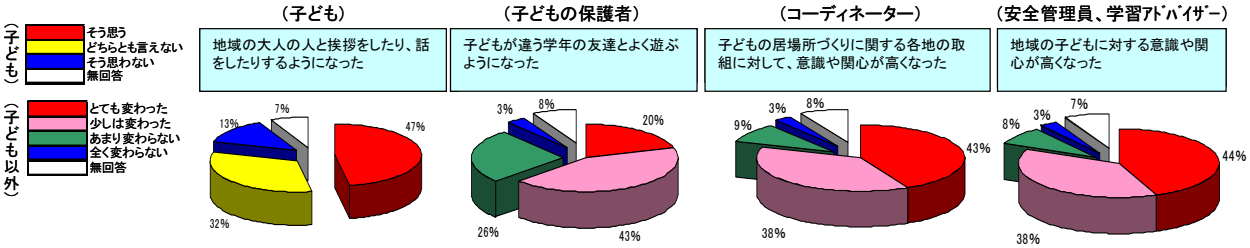
■実施場所
学校の余裕教室や図書室・体育館、公民館　など

■箇所数：15，000箇所（21年度）

補助率

国　1/3	都道府県　1/3	市町村　1/3

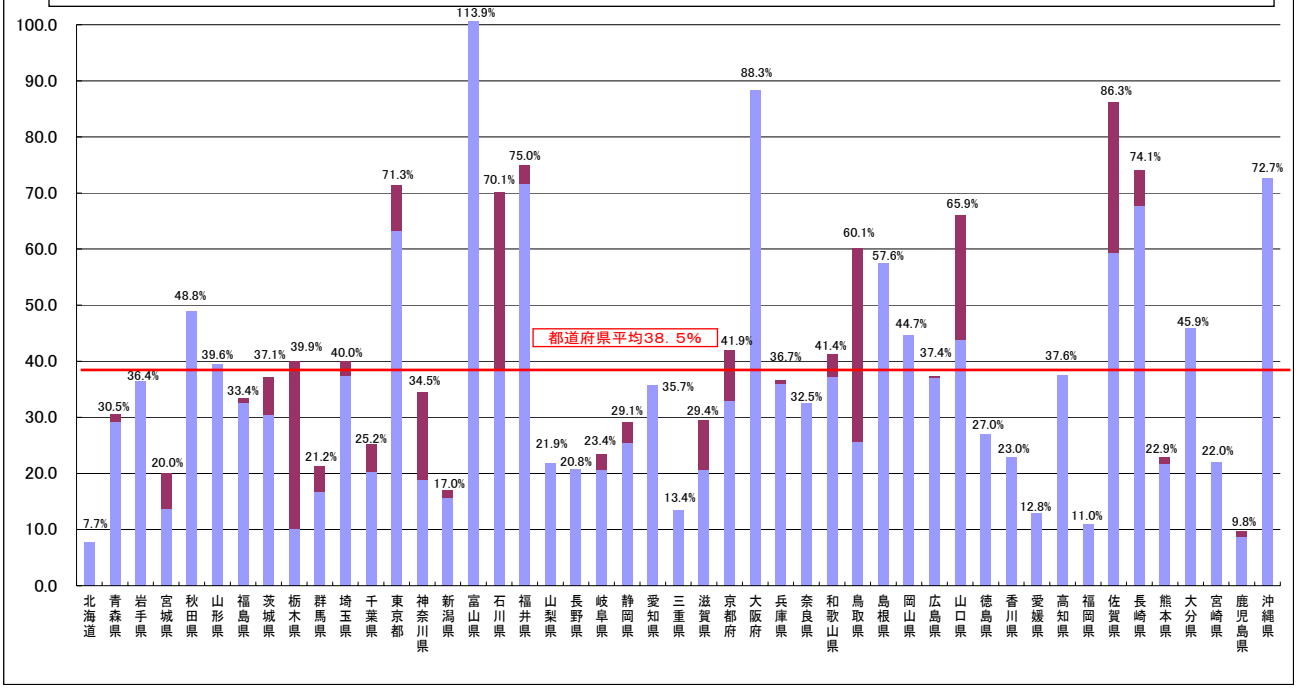
本事業の効果



「放課後子ども教室」 実施状況

	平成19年度	平成20年度	平成21年度
総事業費	7，077百万円 （国庫補助額2，359 百万円）	11，321百万円 （国庫補助額　3，774百万円）	13，392百万円 （国庫補助額　4，464百万円）
実施箇所数	6，201箇所 （地方単独含む　7,429箇所）	7，919箇所 （地方単独含む　8,928箇所）	8，719箇所 （地方単独含む　9,716箇所）
うち小学校で実施	4，299箇所（69．3%）	5，554箇所（70．1%）	6，240箇所（71．6%）
1教室あたりの年間平均開催日数	117．7日／年	121．6日／年	121．6日／年
実施市町村数	851市町村 （地方単独含む979市町村）	1，015市町村 （地方単独含む1,112市町村）	1，065市町村 （地方単独含む1,154市町村）
「学習」実施教室数	－	3，500箇所（44．2%）	4，685箇所（53．7%）

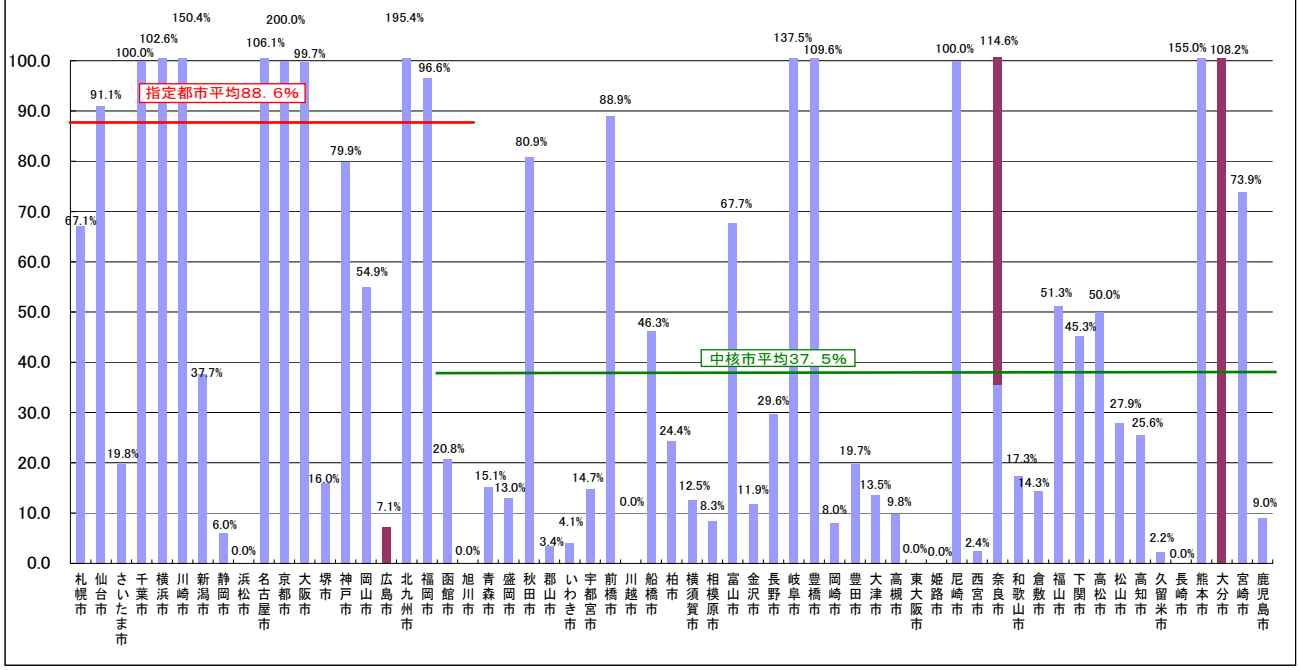
平成21年度　小学校区数に対する「放課後子ども教室」の実施率（都道府県）



…　平成21年度「放課後子ども教室」実施率
…　補助金を受けずに市町村の単独事業として実施している事業の実施率

※ 本データは、平成21年度の「放課後子ども教室」実施予定箇所数、及び補助金を受けずに市町村の単独事業として実施している事業の実施箇所数を、平成20年度学校基本調査における公立小学校数（分校、0学級の学校を除く。）で除したものである。
※ 一つの小学校区で複数の教室を実施する等により、数値が100%を超える場合もある。

平成21年度　小学校区数に対する「放課後子ども教室」の実施率（指定都市・中核市）



…　平成21年度「放課後子ども教室」実施率
…　補助金を受けずに市町村の単独事業として実施している事業の実施率

※ 本データは、平成21年度の「放課後子ども教室」実施予定箇所数、及び補助金を受けずに市町村の単独事業として実施している事業の実施箇所数を、平成20年度学校基本調査における公立小学校数（分校、0学級の学校を除く。）で除したものである。
※ 一つの小学校区で複数の教室を実施する等により、数値が100%を超える場合もある。

Ⅳ　放課後子ども教室全国研究大会　開催意図

本研究大会は、放課後子ども教室の全国的な普及、活動内容の充実、活性化のための情報提供を目的として「基調講演」「事例紹介」「激励講演」と、「分科会」形式の“課題解決型のワークショップ”で構成されています。

全国の放課後子ども教室関係者の経験と知恵の交流を図ることを最大の目標に、本ワークブックをガイドツールとして、下記のプロセスでプログラムを展開します。

①現状理解
平成２１年度放課後子ども教室の実施状況より、全国の実践傾向を理解する（P.４－５）

▼

②事業理解
基調講演、事業説明により、放課後子ども教室事業の意図と意義を理解する（P.７）

▼

③事例理解
事例紹介により、放課後子ども教室の展開例や事業運営手法を理解する（P.８－１４）

▼

④意識向上
激励講演により、本事業での一連の取組を整理・再確認し、課題解決への意識を高める（P.１５－１６）

▼

⑤情報収集

▼

⑥課題解決

分科会形式のワークショップにより、参加者同士が知恵の交流を図りながら個々の課題解決のための方策を模索する（P.１７－23）

V　基調講演

放課後子ども教室を支える人材の研修・育成について考える

東京学芸大学 芸術・スポーツ科学系 准教授　　松田 恵示　氏

（文部科学省 生涯学習政策局 生涯学習推進課 生涯学習調査官）

1962 年、和歌山県生まれ。専攻は、教育社会学・スポーツ社会学。様々な遊び文化や身体文化について社会意識論の立場から研究している。また、学校と社会をつなぐための教育人材の育成や、スポーツ教育の開発を通じて、教育現場との実践的な共同作業を行っている。現在、文部科学省生涯学習調査官を併任。

略　　歴（抜粋）

・大手前女子大学文学部(教育社会学等担当)、岡山大学教育学部
　助教授(学校社会学、スポーツ教育論等担当)を経て 2004 年９月より現職
・2008 年９月より文部科学省生涯学習調査官を兼務
・2009 年４月より福生市社会教育委員
・2009 年８月より文部科学省放課後子どもプラン推進アドバイザー

著　　書（抜粋）

『交叉する身体と遊び-あいまいさの文化社会学-』（世界思想社）、
『おもちゃと遊びのリアル-おもちゃ王国の現象学-』（世界思想社）など。

基調講演(60 分間)の全記録

【講演要約】
具体的な事例を通して解決策を定義するというような趣旨ではなく、「放課後子ども教室」を支える人材を育成したり、研修したりするときのスピリッツ、心について。

放課後子ども教室は、子どものために一生懸命になって活動に携わっている地域の方々にとっても非常に重要な活動になっている。また、子どもたちの居場所であったり、地域の中でのつながりを感じたりする場所であり、人と人とのつながりを生み出すことを通して自分の生きがいにつながっている側面が大きく、だからこそ生涯学習の１つの場面といえる。

自分だけでは自分のことが分からないのが人間の基本的な性質で、人を介在させて自分というものを分かっていくから、つながりがあると充実感があり、つながりがなくなると不安になってしまう。孤立してしまった子どもというのは自分勝手だから孤立するのではなく、他との関係がなくなって不安になった結果である。

自分の世界を居場所としてしっかり守って世話をしてくれる「付き添い人」、一方では半分近くて半分遠いという「ガイド」、全く自分とは接点がないが世の中の怖さをしっかりと教えてくれるような「大人」、こういう三層の大人に取り囲まれて子どもは育っていく。無限に広がる未知の世界を吸収していくことで子どもは成長していくが、このときに重要な役割を果たすのが地域の方々である。親しさと距離の両面が地域の方々に求められる一番重要な性質ではないか。

私たちの生活には、知らないからかかわらないという「他人」、知っているからかかわるという「他己」、知らないけどかかわるという「他者」の、３種類の人間がいる。「他者」は、知らないからこそ自分の世界を広げてくれる可能性があるから、「他者」に出会えないと自分の世界が広がらないことになる。それは、内閉的な非常に小さななかよし集団をつくり、一方ではクラスであっても全く関係なければ他人感覚で過ごしてしまう、こういう子どもたちの人間関係の二極化にも非常につながっている。だからこそ「他者」との出会いというものを放課後子ども教室において作っていかなければいけない。

他人との関係はルールで秩序が成り立つ。非常に親しい人との関係は親密さで成り立つ。他者というのはその両方が必要。両方を持って初めて社会性という場につながっていくことになる。他者との出会いとか、分からないものに対してワクワクするコツは、違う意見と出会ったときに、逆に自分の特徴や、自分の見方ではない、他のものの見方があることを知ること。「基本的には分かり合えないけれども一緒にかかわってやっていきましょう」という他者関係を構成していく場所、これが公という場所で、社会と呼んだりする。だからそういうことをベースとしてもっておくことが、継続的に地域で大人が子どもたちにかかわる活動を進める際のポイントとなる。

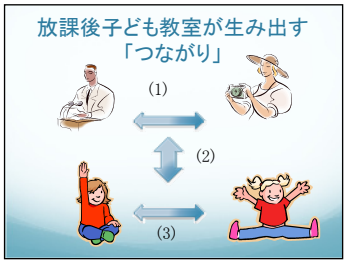
【講演全文】

本日は研究大会のスタートのプログラムということで、皆様方と非常に短い時間ではございますが「放課後子ども教室を支える人材の研修・育成について考える」ということにつきましてご一緒に考えてみたいと思います。本日お話させていただく内容は、もちろん現場にいらっしゃいますと、具体的なさまざまな課題をお抱えになられていると思うのですが、そういう具体的な事例を通しまして解決策を定義するというような趣旨ではございませんで、むしろこういう形で「放課後子ども教室」は随分広がってまいりましたので、その人を支える人材というものを、とりわけそういう人材を育成したり、研修したりするというときのスピリッツといいますか、心、そういうものについて少しお話させていただくことで役割を果たさせていただければと思っております。どうぞよろしくお願いします。出身が関西でございまして、関西文化といいますのは、ついボケとツッコミを自分でやってしまいます。こういう場合におきましても、おそらくそういうことになろうかと思いますので、どうぞそのあたりはご理解いただければと思いますのでよろしくお願いします。

それではスライドを使って説明させていただければと思います。これは後ほど文部科学省の皆様方からご説明があろうかと思いますが、19 年度から順調に推移しております放課後子ども教室の数の拡大の表でございます。8,700 箇所ほどで日々子どもたちがこういう活動を通して地域の皆様方とともに育っているということ、これは本当にすばらしいことだと思います。またさまざまなご意見を伺いましても、子どもたち、あるいはご両親、さらには保護者や活動に携わってくださっていますコーディネーターの方々から、こういうことで非常に充実した活動になっている、非常にポジティブなご意見を多々いただいております。そういう意味では非常に積み重ねが出てきたといいますか、そういうところに今差し掛かっているところかと思います。これはもちろん、数々の現場での課題もございまして、これは幾つかインタビューからお聞き取りになられた内容でございますから、予算処置の問題、あるいは人材、事業の継続性、放課後児童プラン等の関係等さまざまな問題が出てきているところかと思います。そこで人材の確保といいますか、あるいは人材という問題につきまして、本日は視点を絞ってお話をさせていただきたいと思います。今日はその人材ということにかかわりまして4つくらいの話をさせていただけるかなと思います。1つ目はこういう活動に携わっている皆さん、地域の方々、とりわけ大人の方々が子どものために本当に自己犠牲を払って一生懸命になってやっているんだというご努力は非常に重要なものだと思うのですが、同時に携わっている皆様方にとっても非常に重要な活動になっている。つまり生涯学習の一場面になっているという側面、まずこの側面を少し確認してみたいと思います。その上で地域の方々が子どもたちにかかわってくださることで、子どもたちがよりよく育っていく、こういう部分がもちろんございます。そのことを合わせて考えました上で、今後の研修のポイント、あるいは人材というものの研修をしたり育成を図ろうとしたときの、ちょっとした視点というものについてご一緒に考えていくことができればということでございます。

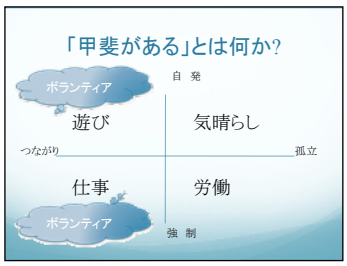
それではさっそく本題に入りたいと思いますが、のっけから恐縮ですが、ご来場の皆様方に少しお手伝いいただきたいことがございます。よろしいでしょうか。そうしましたら、今お手持ちの資料とかボールペンなどをひざの上においていただきまして、恐縮ですがお隣ないし前後の方でお2人組みを作っていただきまして、左手で握手をしていただいてよろしいでしょうか。初めてという方もいらっしゃるでしょうが、今だけのことでございますので、お隣がいらっしゃらない方はちょっとお席を移動していただきまして、お2人組みになっていただければと思います。日ごろこういう活動をしてくださっている皆様ですので、お力添えいただけるものと思いますけれども。そうしましたら、左手で握手をしまして右手でジャンケンをします。ちょっと待ってください。話は最後まで聞きましょう。冗談ですけれども、ジャンケンをしまして、勝ったらつないでいる相手の左手をパチンと叩いてください。負けたら、叩かれたらかないませんから、ジャンケンをしたこの右手でカバーしてください。カバーされるまでに相手を叩ければ1点で、それを2点取ったら勝ちというゲームでございます。ではすみません、お願いいたします。

熱戦が続いておりまして、なかなか勝負が決まらないような方もいらっしゃるようですけれども、ひとまず時間等がございますので、このへんで止めてみたいのですが、これはなかなか面白いゲームですね。見ていますと負けているのにまず叩きに行かれたり。ちょっとお見受けしていますと、ジャンケンをして結果が出ているのですがお2人とも固まったままという方もいらっしゃる。非常に面白いゲームだと思います。今のはちょっと簡単な遊びですけれども、こういう遊びというものを用意しますと、いろいろ和やかな雰囲気になります。それとともに、先ほどまでと打って変わって非常に厳粛な雰囲気からつながり感じられるように、とても温かい空気が生じているかと思います。放課後子ども教室というのは、まずもって子どもたちの居場所であったり、あるいはそういう意味で地域の中でのつながりを感じる場所、こういうところがあればというのがすごくあると思うのです。そういう意味では結局人材を育成するといいましても、ここで問題になるのはつながりという言葉でないかと思っています。このつながりということをキーワードに今日は少しお話をしてみたいということでございます。



スライドのほうを少し見ていただきたいのですが、放課後子ども教室、どんなつながりがあるのだろうということで、ちょっと考えてみたものです。どうしてあの人は帽子をかぶっているんだとか、そういうことはご質問されないでください。たまたまあれしかなかったということなんです。上に大人、下に子どもがいらっしゃるわけですが、こちらは大人と子どもという(2)番のつながりというのが地域の中で新たに生まれますね。そういうものを通して、子どもたち同士の(3)番のつながりも結構広がります。さらにいいますと、地域の方々同士、つまり(1)番のつながりもこの誕生によって非常に広がっていきます。つまり3重の意味で地域のつながりというものを生み出している。こういうものが放課後子ども教室のある側面ではないかと思います。ところで、このつながるということは我々にとって非常に重要な側面を持っているところがありまして、そこで生きがいというような言葉の中で、そのことをちょっと考えてみたいと思います。

おそらく放課後子ども教室に一生懸命取り組まれている方には、子ども教室自体が自分の生きがいになっている、そういう方も多いのではないかと思うのです。そもそも甲斐があるという言葉、これは非常に面白い言葉だと思うのですが、私たちがどんなときに甲斐があるということを感じるかというと、例えば料理を作って甲斐があるときというのはどんなときでしょうか。逆にいいますと甲斐がないときというのはどんなときでしょうか。例えば「おいしいよ」とか「ちょっと辛いかな」とか、その料理に対する評価が良いものであれ、悪いものであれ、何かしら料理に対して評価をしてくれるといいますか、そういう声が掛かるときには少し甲斐というものは感じやすいものでございます。ところが一番甲斐がないときというのはどういうときかと言いますと、やはり無視されるときなのですね。例えばテレビばかり見ていて、全然「いただきます」も言わないで食べて「ごちそうさま」も言わないで終わったりしますと「おい、ちょっと待てよ」と言いたくなります。つまり料理のし甲斐があるというのは、作ったということに対して「ありがとう」でも「ちょっとおいしくないよ」なんていうことも含めて反応を与えてくれる、そういう自分がやったことに対して相手が答えてくれたという、この関係ができたときに非常に甲斐があると感じるのではないかと思うわけです。そうしますと、例えば日曜大工などですね、ギイコギイコという扉のちょうつがいを新しい物にしてもう直っているんですけれども、ところが家族が誰もそのことについて何も言ってくれなければ、これはちょっと困りますね。そういうときはわざとこういうふうに開けたりして、ほら、みたいな気持ちで見せようとしたりもします。つまり気分的にそういうつながりというものが甲斐というものにつながっている。こういう側面を少し皆様方にお考えいただけたらなと思います。



一方で生きがいという言葉は、気分的には充実感というところにつながる言葉ですから、私が自分の好きなことを主体的に思うことをやっていく、そのときに一番充実しているというふうにも思われます。確かにこれは間違いではないと思うのですが、ただ自分の好きなことをやっていても、つながりのない中で自分の好きなことをやっていますと、これは楽しいのですがちょっと心に残らないという、そういう雰囲気が出ているのです。そこでスライドをちょっと見ていただきたいのですが、上下には自分で行うということと、やらされてしまうということが上と下にございます。自発と強制という意味です。それに対して左右に

はつながりを感じる中で行うことと1人でやるという、そういうことが軸になっています。そうしますと今お話したような好きなことをやっているんだけれどつながりを感じられないという場所には、気晴らしという言葉があります。これも非常に大事な感覚なのですが、生きがいというところまでは、あと一歩届かないところがあります。それに対して同じ好きなことをやっていてもつながりの中でやっている好きなこと、一般に趣味だとか遊びだとかと言われると思いますが、これこそが非常に生きがいということに接続する問題です。ですので、そういうように考えると、つながりなくしては生きがいが生まれないということですね。ですので、例えば仕事というものも非常につながりを生み出しやすいものです。課長さん、あるいは部長さんというような組織の中で、やることがさまざまな反応を受けて組織として営業活動なりいろいろなものにつながっていきます。ですので仕事をしている間は、これは強制なんですけれども、やはりつながりの中にありますから生きがいはありますね。この図でいいます左の下の部分です。でも定年されまして急に関係がなくなったときに、ここでハタと困ってしまうわけです。

そういうふうに聞いていただいていますと、皆様はお分かりになられていると思いますが、放課後子ども教室に地域の方がかかわられるとしたら、かかわる大人の側から見ても、非常にこのつながりを生み出すことを通して、自分の生きがいにつながるものになっていく。こういう側面が非常に大きいのではないかということです。まさに、だからこそ生涯学習の1つの場面なのです。一方で例えば放課後子ども教室をやる場合に、コーディネーターの方などになられますと非常に自発的にやるということだけではなくて、さまざまな大変なお仕事のやらなければならないという形でなされると思うのですが、これもこの表の左の下、この左の下と左の上が非常にリンクしている中で話たちが充実感を得ていく、こういうものなのです。放課後子ども教室の大人側から見た意味の1つではないかと思われます。ですから人材の研修とか育成ということを考えても、このことをぜひ伝えていただくということが必要なのでないかなと、ちょっと思います。こういう活動に参加しているということが、自分にとっても非常に意味のあることなんだ、こういう部分が表に出てきませんと、なかなか主体的な活動には地域の活動がつながっていかないのではないかと思います。こうしないといけないとか、そういうかかわるという気持ちは非常に大事だとは思うのですが、それとともに自分たちで好きに一生懸命になって、こんなふうにもやっていこう、あんなふうにもやっていこうというような、非常にポジティブな向き合い方、そういうものが本人にとってもやはり意味があるということが、よくよく皆様方の中で合意形成されませんと、なかなか生まれてこないところだと思いますので、こういうお話はどこかの場所で皆様方でご確認いただくというようなことがいいのではないかなと思うわけです。

そこで、せっかくの機会ですので、どうしてつながりがあれば、私たちはそんなに生きがいというものを感じるのかということについて、少しだけ補足させていただきたいのですが。そもそも地域の方が教育活動にかかわられるというのは多くの場合はボランティアの精神でもってかかわっていかれます。このボランティアという言葉は元を正すと、どうやら十字軍というのは、中世の宗教戦争の中で行われた戦争における志願兵のことを言っていたそうです。ですので、この志願兵の意味は奉仕というよりも主体的に自発的にというような意味合いが非常に大きいわけです。主体的にとか自発的にという部分が大きいからこそ、非常に創造的な活動につながりやすいのです。行政というのは皆さんの合意形成の上で根っ子の部分をしっかりと基盤を作っていくような仕事ですので、その点、当然総合的に小回りをもって動くというのは若干苦手な面がございます。そういう意味で地域の方々が主体的になって動いていくということ。ですからこのボランティア精神というのは、今教育の場面で非常に重要になっていると思うのです。こういうことを通してつながりの中で地域の中で、自分の居場所を見つけて楽しく生きていく、これこそがまさに生涯学習の一場面でもあるわけです。で、問題になるこのつながりなんですけれども、どうしてつながりがあると充実感があるのか、この答えは非常に簡単です。自分だけでは自分のことが分からない、これが人間の基本的な属性だからです。

そこでまた少し皆様方にお手伝いいただきたいことがあるのですが、恐縮ですがちょっと立ち上がりいただいてよろしいでしょうか。申し訳ございません。本当に立ったり座ったり、叩いたり、いろんなことをさせてしまいますが。少し自分の体を見渡していただいて、ご自身の体の表面積、このように動いて見ていただいて、何パーセントくらい見ることができると思いますか。ご自身がご自身をです。例えば顔の面は絶対に見えないですね、ご自身では。そのような意

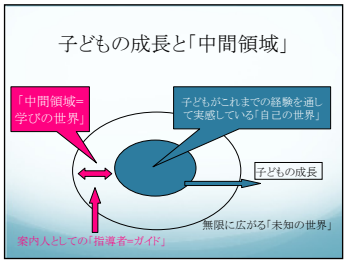
味合いで一生懸命ご覧になって、体全体の何パーセントを実際に見ることができるでしょうか。ちょっとやってみていただけますか。はい、ありがとうございます。ではどうぞ、お掛けください。

ちょっと伺いますが 80 パーセント以上は見えると思う方手を挙げてください。そんなにいらっしゃいませんね。では70パーセントはどうでしょうか。かなり手が挙がりました。60パーセントは。これは多いですね。50パーセント以上。それ以下だと思われる方。はい、ありがとうございます。これは随分ご自身の体の硬さに比例するかもしれませんね。(笑)そんなことはございませんけれども。おおよその平均でいきますと6割弱ぐらいが数字として上がってくるようです。肩の上からこちらは本当に見えませんし、背中なども全く見えません。意外と自分の体を自分で見るというのは難しいものです。

だからこそ、例えばカットをしてきたり、散髪をしたり、あるいは新しい服を買ったり、体の表面を加工したりすると決まって言われることは「どう？」と人に聞いたりします。服を買って新しい服を着ると、こうして見れば自分で見えているはずなのです。だから似合っているかどうかなんていうのは自分で判断すればいいと思うのですが、ところがそれでは満足できませんね。必ず「どう？」って聞きます。あるいはスライドにありますように姿見、鏡に映します。鏡に映しますと自分の体を自分で見ていると一瞬思うのですが、ちょっと考えていただきたいのですが、ここに鏡があります。ここに私がいます。こうしていますと鏡に私が映っています。常に私はこのようなのだと見ているように思うのですが、鏡というのは光の反射ですから、ここに移っている像というのは、実はここから私を見た像が映っています。ここにいてここを見た私ではないのですね。お分かりいただけますでしょうか。つまり人から見た自分の像なのです。鏡に映っているのは。となりますと、徹頭徹尾私たちは人を通して自分を理解していることになります。実際病院などに行きましても、ちょっと具合が悪くて検査などを受けると「どうだったでしょうか」ということをお医者さんに聞きます。でもあれは普通に考えてみるとおかしな話で自分の体なので自分に最も近い、まさに自分そのものなんですけれども、だからこそ分からないんですね。人に一生懸命な自分はどうですか、と聞いているわけです。つまり人間というのはそういう意味で、自分で自分のことを理解することができないという性質があるのです。人間というのは人を介在させて自分というものを分かっていく、その意味で自分と他人というのは同時にいつもある。そういう状態でなければ自分というものが安定しません。ですので、つながりがあると充実感を感じますが、つながりがなくなると不安になってしまう、こんなことがあるのです。これはもちろん大人だけの話ではなくて子どももそうです。ですから孤立してしまった子どもというのは非常にその意味で自分も不安定になります。自分勝手だから孤立するのではないのです。他との関係がなくなるから不安になるわけです。そういうような部分がつながりを生むということです。充実感というものの関係になっているということでございます。

こんな例を言うと分かりやすいかなと思うのですが、これはおじいさんが非常に風景が美しいので感動されてこの風景を全部描き止めたいとキャンパスに一生懸命描かれているところです。ところがよくよく見ると、この風景を全部描きたいといっているのにもかかわらず、キャンパスには1つ描き忘れているものがあったのです。それは何でしょうか。お分かりになりますか。一生懸命外側の写真とキャンパスを見比べてくださっている皆様方の目線が見えましたけれども。実はご自身を描かれてないのです。つまり風景の中にいらっしゃるのはご自身もいらっしゃるわけですから、キャンパスの中にご自身が入っていないわけです。ところがキャンパスの中には絵を描かれているご自身を描いたとすると、それでOKになるでしょうか。実はなりませんね。なぜかというとキャンパスの中にご自身を描いているご自身が描かれていないからです。そうしますとそのご自身を描いているご自身を描いて、ご自身を描いてとなりますと、こんなことになりますね。そうしますと最後まで終わらないわけです。つまり自分が自分を知るということは人間には基本的に難しいということです。蛇が自分のしっぽを飲み込もうとしているような状態だということなのです。だからこそ私たちはつながりの中で生きますし、つながりが充実感につながります。こういうことが放課後子ども教室に参加される大人のある部分と言ってもいいのではないかなと思います。これは少し冗談が過ぎたかなと思いますが、自分で自分の体を見れる人というのがいるのかなと思ってちょっと考えてみましたけど、ろくろっ首だったら見れるんじゃないかと思ったのです。これからは自分のお顔は見えないですね。これは小学校のときに担任の先生に言われたのですが、だからこそ人というの

はつながりを作って間ができたときに初めて人間になるのだと。そのようなことも言葉の中に託されているのかなと思います。今までのお話で参加される人材というものが、ご自身から見られたときの意味をどういうふうに取り上げられるのかということについて少しお話してみました。



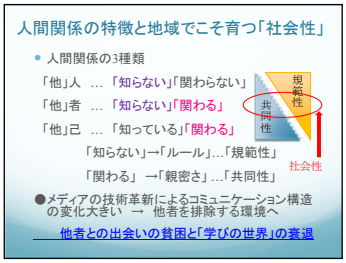
そこで時間もございませんので、次は子どもの側からそういう地域の方がこういう活動にかかわってくださったときに意味するものについて少し話を進めていきたいと思います。ちょっとスライドを見ていただきます。スライドの青い丸は、今、子どもが経験をして小学校3年生なら3年生、6年生なら6年生がそれなりに知っている自分の世界を表しています。一方、こちらの子どもはどんどんそれだけではなくて、知らないところを吸収して大きくなっていきますから、その外側には無限に広がる未知の世界だったわけです。そういう未知の世界を子どもは吸収していくことでどんどん成長していくのですけれども、このときに円が広がる際に非常に重要な役割を果たされる方がいらっしゃいます。それがピンクにありますガイドさんです。これはどういうことかといいますと、例えば皆様方が初めて言語も分からない国に観光旅行をされたとします。そうしますと、もちろんホテルのチェックインから買い物まで言葉が分からないと困るわけです。ですから外にすごく知らない世界が広がっているのは分かるのですが、なかなかそこへ踏み出せない、そういう状態が生まれてしまいます。このときにガイドさんがいてくれると助かるのですね、自分の言葉も現地の言葉も分かるので間をつないでくれます。こういう方がいらっしゃるので、ちょっとこわごわ足を踏み出せる、そういう自分の世界と外側のちょうど間のような領域、ここでは中間領域と書いてありますけれども。そういうものが生まれるわけです。

勘のいい方は気付かれていると思いますが、地域というのはまさにこういう相手方の領域なわけです。つまり自分が住んでいるということでなじみがあり、若干知り合いも多い、そういうような意味合いでは全く外の世界ではないわけです。でも家庭とは違って全くうちにある世界でもないわけです。ですから、そういう場所に半分近くて半分遠い方がいっぱいいらっしゃって、この方がガイドさんとして自分に働き掛けてくれるからこそ、子どもたちは世界を大きくしていきます。基本的にはこういう構造が子どもたちを取り巻くお母さん関係の中にあったと思います。そういうふうに考えますと、地域の方々はやはりこのガイドさんとしての意味合いというのが非常に子どもにとっては大きなものなのです。それに対して自分の世界もしっかりと守ってくれる大人も必要だと思います。といいますのは、子どもですから例えば簡単にご飯を食べるといっても世話をしてくれる人がいないと、それこそ子どもだけだと生活ができません。そこで、内側の自分の世界を居場所としてしっかり守って世話をしてくれる付き添い人になる方、一方では半分近くて半分遠いというガイドさん、さらには全然自分とは接点がないんだけれども、世の中の怖さをしっかりと教えてくれるような大人、おそらく子どもはこういう三層の大人に取り囲まれてこそ初めて育っていくものだと思います。一番外側の大人は監視員などと表れますね。プールなどに遊びに行くと監視員がいます。そこは危険だから危ないよ、こういう人がいてくれないと、子どもはやはり困るわけです。でも家では付き添いしてくれる優しい人、外ではそういう監視をしてくれる人、この2つの大人だけでは子どもは世界が広がらない。そこに半分近くて半分遠いというガイドさんとしての大人が出て行く必要がある。これが多くは学校の先生がそういう立場だと思うのですが、ところが近年、皆様方もご存じのように、一方では家庭が非常に変化しています。一方では社会も変化しています。そういう意味で学校の先生が基本的にこの三層の大人を一手に引き受けられるというような状況も出てきつつあります。そういう中で地域の方が育成する大人としてかかわっていかれるということは、今の社会だからこそ非常に重要な問題になっています。分担の連携ということがよく言われますけれども、地域総掛かりで子どもを育てるということの理由がこのところにも1つあるのではないかということです。

このお話をどうして聞いていただいたかといいますと、今日のテーマであります人材の研修と育成という、この部分が非常に重要ではないかいう感じがございます。つまり放課後子ども教室に携われる大人として活動されますときに、一方ではベターっと世話をしてしまう。一方では非常に遠くて監視だけをしてしまう。この2つのタイプがどちらかというと、もう少し、なにがしかのかかわり方を工夫していただけないかなと思うタイプにつながります。むしろ、育成する大人、こういうことを1つのイメージとして我々が研修なり育成ということをかんがみる必要があるのではないか、そういうことを少

し聞いていただきたかったわけです。この育成する大人というのはどういう大人なのか、ということをいま一度考えてみたわけですが、例えてみると、子どもというのは変な人が好きなのですね。例えば親せきの集まりの中で、大人間ではちょっと鼻つまみもの的な存在のおじさん、おばさんがいらっしゃっても、そういうおばさんが子どもにすごく人気があるということなのです。あるいは私などもよく学校にも伺いますが、教室に入ると先生がとがめないので「安全な人なんだ」というのは子どもに伝わります。でも普段はいない人ですから何かじろじろ見たり友達同士でこっちを見てちょちょとっしゃべったりしますね。そのうち、優しそうな顔をしていますとツンツンとかとついてきて、ついてくるのも何かニターっと笑って、それをしていますと、みんながあっちこっちついてくるみたいな感じで。つまり興味とか関心というのが好奇心という形で旺盛なんですけれども、それは自分の知らない世界というものがあって、そういうものをひょっとしたらそういう知らない人がもたらせてくれるのではないか、こういう子どもの気持ちだと思うのです。一方でそれだけでは全く遠い、分からない人だと怖いわけです。ですから安心できるとか、近いということが同時に兼ね備えられている必要があると思います。つまり親しさと距離の両面というもの、これが地域の方々に求められる一番重要な性質じゃないかと思います。この面を少し地域の役割ないしは放課後子ども教室における人材の育成の鍵にとらえていけばどうか、そのように思っているわけです。

少し話が重たくなりましたので、残り 20 分、後半もさらに進んでいきますが、今のお話、なかなか子どもたちにとってということだけではとどまらない部分もありまして、これは私たちも含めた今の社会の特徴としてそういう育成するというような、半分親しくて半分遠いというような人が少なくなっているという環境の問題につながるというところがあるわけです。スライドをちょっと見ていただきたいのですが、私たちの生活の中では基本的に3種類の大人がいると言われます。大人というか人間ですね。どんな3種類かということですが、1人はまず、知らないからかかわらないという「他人」です。他人というのは冷たい語感があるのですね。ですから「今日から赤の他人よ」と言われると、これはもう「ええー？」という話になります。こういう他人という言葉に対して正反対に非常に親しい、つまり知っているからかかわるという「他己」という人がいます。己のような他という意味で「他己」と書いてあります。タコなので反対側がイカだったらすごくよかったのですが、そこはうまくいかないところですが、そうすると、よく知っている人と、だからかかわらない人と、あまり知らないからかかわらないという、2種類以外はないのではないかと思うのですが、実はそうではないのですね。知らないけどかかわるという人がいます。そんな人がいるのかなと思いますが、例えば今日の皆様方と私の関係がそうです。講演の講師というか、こちらで聞いていただいているという感じです。こちらは役割に基づいて講演していますのでその部分でかかわっているわけですね。ところが基本的には存じ上げない。知らないけどかかわる人というのは例えば店員さんや自動車教習所の先生、英会話スクールの先生、考えてみるとたくさんいますね。知らないけどかかわる人が持っているメリットというのがあって、それは知らないからこそ、私の世界を広げてくれる可能性があるということ、そういう存在なのです。ただ知らない人というのは全く知らないわけですから、あの人は誰なのか、という不安もあります。だからこそ、ある役割に基づいてのみかかわるということが基本になる人なのです。ところが近年さまざまなメディアで環境が変化する中で、知らないけどかかわる、ここでいう他者との出会いというのが非常に生活の中で少なくなっています。



例えば子どもの生活で考えてみても、今は携帯電話を持っていますね。昔は家に1個しか電話がありませんから「今日の宿題なんだったっけ」などと聞こうと思っても電話をしますと、友達のお父さんやお母さんが出てきたわけです。まさにこの方々は知らないわけです。でもかかわらないといけない。そこで「何々小学校の何々ですけど、何々ちゃんいますか」という礼儀やマナーを取らざるを得ないわけです。ところが今は携帯電話がありますから小学校の高学年くらいになりますと、かなりの方が持っていますので、夜になっても「今日の宿題なんだったっけ」とすぐに電話ができます。そのときに「何々小学校の何々ですけど何々ちゃんですか」などと言ったら、何他人行儀なことやってるの、と言われちゃうわけです。つまり電話1つを見ても、さまざまな社会環境の変化で他者との出会いというのが生活の中で非常に少なくなっているわけです。でもこれは困ったことです。基本的に自分の世界を広げてくれる人と出会えないということになります。このあたりは子どもたちが内閉的な非常に小さな集団でのなかよし作りと、一方ではクラスであっても全く

関係のない人は他人感覚で過ごしてしまう。こういう子どもたちの人間関係の二極化にも非常につながっているところだと思います。だからこそこういう他者との出会いというものを放課後子ども教室において作っていかなければいけない。そうなってきますと、ますますここで携わってくださる皆様方には子どもにとってまさに他者としての大人でなければならない。

つまり親しさと遠さの半分半分で、ここがポイントになるのではないかと思うわけです。他人との関係はルールで秩序が成り立ちます。非常に親しい人との関係は親密さで成り立ちます。他者というのはその両方が必要です。両方を持って初めて社会性という場におそらくつながっていくことになるのだと思います。人間関係といいますと、とかくつくか離れるかしかないのですけれども、そういう面だけでは語りきれないということがあることも考えられるかなと思います。放課後子ども教室における皆様方あるいは地域の方々との出会いというのは、子どもにとってまさに他者との出会いなわけです。だからこそ子どもは自分の世界を広げていくことができる。こういう点を少し考えていただきたいなと思います。そうしますと他者として私が成長していくにはどうすればいいのか、あるいは他者としての地域の方を育成するにはどうすればいいのか、こういう形で人材育成、あるいは研修の1つの原理原則のようなものが出てくるのではないかなということでございます。こういう他者との出会いに基づいて子どもたちに大きく目いっぱいな体験をさまざまな場面でさせたい。こういうことが今の社会の中で非常に重要になっていると思います。この目いっぱいだとか知らない人との出会いというものがワクワクドキドキというか面白さにつながるわけです。このワクワクドキドキという面白さをもたらしてあげられるような大人、こういうことがやはり子どもの周りには近年本当に少なくなっています。こういうことが放課後子ども教室により、大人と子どものかかわりの中で、つながりの中で導入されていくと私たちにとっても楽しい、子どもたちにとっても非常に意味がある。こんなことになっていくのかなと思うわけでございます。

最後にそういうことで考えますと、実は先ほどの他者との出会いというのは、大人の場合にちょっと話を持っていきたいのですが、これは決して子どもから見てという話だけではないのです。つまり我々大人にとっての子どもは他者でもあります。駅などに子どもと一緒に歩いていますと、私にとっては駅までの道のりは、ただもう急ぐだけの道でしかありませんが、子どもたちと行ってみると、ここにこんなのが落ちているとか、こんなのが咲いているとか、びっくりするくらいの情報を集めてくれるわけです。こういう子どもの世界に対する天真爛漫なかかわり方、こういうのが確かに子ども心として昔は持っていたのに忘れているな、などと思ったりします。こういう私たちにとっても、実は1つの世界を開いてくれるという存在での子どもがあります。ですからこの他者との出会いというのは大人・子ども両方からの問題なのだなということです。

それでは最後にこういう他者との出会いとか、分からないものに対してワクワクするというようなこと、こういうことをさらによく子どもに伝えるための、そういう大人の在り方を考えるときに、1つ、2つ、コツになるような部分をお話してみたいと思います。ちょっとスライドを見ていただきたいのですが、これは何に見えますでしょうか。先ほどから出てますね。こちらは鳥、一方ではウサギ、両方に見えますね。ちょっと伺いますが、最初にぱっと見たときに「鳥だ」と見えた方は手を挙げてください。ありがとうございます。「ウサギだ」と見えた方、ありがとうございます。2対8くらいですかね。ここは鳥の方が多いようでございます。結構これは分かれるところかもしれません。まあ、だまし絵というような絵でして、見方を変えれば違うように見えてしまう、そういう絵ですね。これはどうでしょうか。そうですね、ちょっとお声が出ていましたけれども、ここをあごというように見ますと、若い女の方が後ろを向かれているような絵になります。ところがここを目に見ていただきまして、これを鼻、これを口というように見ていただいて、ここをあごというように見ていただくと、大きな横顔のおばあさんですね。これは付け加えてここに書いてあるのですけれども。若い女の子に見えた方、手を挙げていただけますか。おばあさんが先に見えた方は、だいぶおばあさんのほうが多かったですね。このだまし絵というのは、同じものを見ているのに最初に見えるのが違うというような意味合いですごく面白いと思います。最後にこれはどうでしょうか。これは分からないですね。何か昔はやりましたインベーダーゲームの出来損ないのような感じですけれども、時間がありませんので、ヒントを言ってしまいますが、これが「LIFE」と書かれています。ここがLです。ここがIです、F、E。「LIFE」ですね。1回見えてしまうと、つまりグレーの部分を「何か絵だ

な」と見てしまうんですが、青の部分が実は絵なんだということですね。

今、こういうだまし絵をどうして見ていただいたかということですが、だまし絵というのは本当に面白いなと思うのですが、同じ絵を見ているのに、ここにいらっしゃる皆様方がお1人はウサギ、お1人は鳥という形で同じ絵を見ているのに見えたものが違うというところ、そういうことがどうして起こるのかということですね。それはおそらくここにいらっしゃる皆様方の頭の中に、皆様方自身も気付かれていない見えない変換装置があるとしか考えられないわけです。同じ絵を見たんだけどウサギというふうに見てしまう変換装置をお持ちの方と、同じ絵を見てアヒルというふうに見えてしまう変換装置をお持ちの方がいらっしゃるということです。でもご自身はどんな変換装置をお持ちかというのはなかなか普段は気付かれないですし、そういうものがそもそもあるということについて、あまり気持ちが行かないですね。ところが同じ絵を見ているときに、隣の方は私はアヒルだと思って見ているのに、ウサギだと言われると「ええー？」と思うわけです。こういう他者との出会いによって初めて自分が分かるという1つの例だと思うのですが。ただ、この話は子どもとかかわるときに非常に重要な話にもつながります。といいますのは例えば子どもが泣いていたとします。泣いているという同じ子どもを見ているのに、ある方は「あ、また泣いている」と思われています。別な方は同じ泣いている子どもを見ていて「どうして泣いているんだろう」と思われている。つまりその時点でその受け止め方が全然違うということがあるのだということです。これはご自身がそれぞれ持たれている見えない変換装置ですから、これはなかなかお互いに擦り合わせるということが難しい部分です。ただ違う方の意見と出会わしたときに、逆に自分の特徴を知ったり、あるいは自分の見方ではない、ほかのものの見方があるということを知る、そういう意味で非常にいい場面ですね。こういうときに人間はワクワクしたり成長したりするということだと思います。

時間のほうが予定していたよりも話が長くなってしまいまして、もう少ししか時間がありませんので、スライドの順番を飛ばしましてお話をしてしまいたいのですが、このようにそれぞれが見えない変換装置をお持ちでいらっしゃる。そういう方々がつながればまた、放課後子ども教室の皆様方の＝集団＝でもあるのです。ですから基本的に子どもに対する考え方とか活動に対する考え方というのは、ものの見方が違いますのでぴったり一致するということは本当はないというふうに、そこからスタートして考えたほうがいいと思います。人材の研修や育成というときに、もう1つのポイントとしてよく出ますのが、逆に大人同士のコミュニケーションをどのようにうまく取っていくか、そういうことに、いかに皆さんが協力的になってくださるか、この部分に研修ということをお挙げになるところも結構たくさんございます。それはやはり協力してやっていかないと、ということだと思うのです。ところが協力するといったときに、基本的にはみんな違うんだということが前提になること。これが非常に重要な部分ではないかと思います。つまり放課後子ども教室というのは、自分の子どもではなくて人の子どもにかかわっています。かつさまざまに集団を作ってかかわっていますから、いわば公の活動になります。この公の活動というのはどういうのかといいますと、これは行政がやっているとか、無償でやっているとかそういうのではなくて、基本的には分かり合えない者同士が集まって、でも一緒にやっていこうとしている場なのです。分かり合える者同士が集まった場は公とはいいません。先ほどの言葉で他己集団です。ところが「分かり合えないから、かかわらないや」というのは広い意味での世間一般です。でも「分かり合えないけれども一緒にかかわってやっていきましょう」という、つまり他者関係を構成していく場所、これが公という場所ですし、あるいはそれを社会というふうに呼んだりします。ですので、そういうことが一人ひとりの1つの基本的な考えといいますか、マナーで育っていかないと継続的に地域で大人がかかわりを作って子どもたちにかかわっていく、こういうことが進まないわけです。ですから、この公ということをどのように考えているのか、こういうことも非常に人材の研修・育成するといったときにポイントであるというように考えます。

ここでのコツはふりかえるということです。ボランティアをやっているからこそ、やったこと、自分がこうだと思ってやったこと、さまざまな思いがあるわけですけれども、だからこそ、あえてそれを1回立ち止まって、あるいは達観視してふりかえってみるということを習慣付けるということです。こういうことを少し皆さんが共有されていきますと、非常に公とか他者との出会いの中で行われる活動ということの意味が皆さんに理解していただけるということにつながっていく、そんなこ

とがあるのかなと思っております。実は本日もう1つ、真ん中のところで今の話をさらに具体的に遊びというような問題の中で、子どもの活動とのかかわりの中でのお話をする予定をしてきたのですが、つい私のほうが関西人の悪い癖が出まして、いろんなことに講じてしまいましたのでそこまで触れることができないという形で終わらざるを得なくなりました。

また本日のお話のポイントだけをまとめさせていただきますと、基本的には、まずこういう人材、こういう活動にかかわれる人材というのは、大人の側から見てもつながりというものを通して真の生きがいにつながっていくものがまずあるのだということ。一方では、そういうつながりの中に子どもたちは他者との出会いというものを、この共通の中で感じているのだということ。そういう2つの側面がやはり核になって「よし、やってやろう」というような、そういう人を地域で育てていく必要があるということ。さらにはこの地域の方々は基本的にはさまざまなものの見方を持たれた方が集まっているわけですから、こういう中で＝理解＝作りのようなことを1つのキーワードにしながら、ご自身たちがものの見方や考え方が違う中でお互いにどのようにやっていくかということ、そういうことをまず構えとして持ち合わなければなかなか活動は進まないということ、そういうことを皆さんに啓発したり促していくという試み、人材の研修や育成の1つのポイントがあるのではないかというように、そのあたりのお話をさせていただいたというところでございます。さまざまな形で、また現場も含めまして、こういう活動に携わることも多いので、もし何か機会がございましたら、お気軽にお声を掛けていただければと思います。それでは長らくご清聴ありがとうございました。

Ⅵ　事例紹介

①広島県　安芸太田町　　加計小学校放課後子ども教室

１．町の概要

・町の面積　３４２．２５Ｋ㎡　（山林　９３．０％）
・人　　口　７，８３８人（H21.11.1 現在）
・学 校 数　小学校　７校（加計・修道・津浪・戸河内・筒賀・殿賀・上殿小学校）
　　全町児童数　２９０名（H21．4．1 現在）
　　中学校 3 校（加計・筒賀・戸河内中学校）
　　全町生徒数　１９７名（H21．4．1 現在）

２．放課後子ども教室について

放課後等における子どもの安全・安心な居場所づくりのため、19 年度から放課後子ども教室を実施。19 年度、加計・修道小をモデル校としてスタートした。
21 年度は、４小学校で実施（加計・修道・津浪・戸河内小学校）、他の３校は筒賀児童センター（放課後児童クラブ）で対応。

・実施方法

加計小学校 戸河内小学校	月～金	放課後～午後６時まで
	土曜日	午前８時３０分～午後６時まで
	長期休み	午前８時３０分～午後６時まで
修道小学校 津浪小学校	長期休み	午前８時３０分～午後６時まで

・運営委員会　年１～２回開催

３．加計小学校放課後子ども教室について

①経緯

平成１８年度までは、子育て支援の一環で加計保育所に在籍している園児の小学生低学年の兄姉が放課後から保育所で過ごし、保護者の迎えを待っていたが、保育士の労務も増える中で保育現場からも新たな子育て支援事業の立ち上げや加計小学校の保護者から放課後児童クラブの設置を望む声があった。その中で平成１９年度から放課後子ども教室推進事業が実施されるに当たりモデル校として加計小学校で実施することとなった。

②子ども教室登録児童数　26 人
　小学校全児童数　１０２名（H21.4.1 現在）

子ども教室登録児童数内訳

１年生	６人	４年生	５人
２年生	９人	５年生	２人
３年生	４人	計	２６人

③スタッフ体制

安全管理員　　１０人
学習アドバイザー　　３人
コーディネーター　　１人

スタッフ会議を毎月１回開催し、翌月の担当や行事、教室の課題や成果等を協議している。

メンバー：安全管理員、学習アドバイザー、コーディネーター・教委職員
（必要に応じて、学校長・教頭等も出席）

④子ども教室開催日数　２８８日（Ｈ２０年度）

⑤活動内容

・安全管理員については、常時２名の安全管理員を配置している
・学習アドバイザー（元教員）による指導は毎週２日実施
・学習時間：平日　１時間学習時間を設け、宿題や自主勉強を行っている
・夏休みは、シニアクラブ・ゲートボール協会・女性会・ヘルスメイトの４団体の協力を得て、体験交流事業を８回実施
・図書館まつりやゲームハイキング・植樹活動等の地域行事・イベント等へ積極的な参加をしている
・外国語指導助手（ＡＬＴ）による英語教室を実施
・けがや事故発生時のマニュアルを作成し、緊急時に備えている
・スタッフ確保のため、広島市の大学に出向いたり、教員を目指している地元加計高校生徒の体験の場として受け入れも行った

⑥課 題

・スタッフの確保
・児童のスタッフに対する態度や言動
・長期休みに参加者が増え、安全対策が手薄になる

体験交流事業
女性会とのグラウンドゴルフ交流

体験交流事業
シニアクラブと昔遊び

事例紹介②：兵庫県　宝塚市「放課後子ども教室推進事業」

本市では、子どもたちが地域社会の中で心豊かで健やかに育まれる地域環境づくりとして放課後子ども教室の開設に取り組んでいます。現在、市内２４小学校区中２０小学校区で開設し、放課後の小学校の校庭などを利用し、すべての子どもたちを対象に遊びや学びの場をつくりだしています。

ここでは主役の子どもたちが自分の責任で自由に活動しています。そして小学校区ごとに保護者や地域住民で構成する実行委員会が主体となって放課後子ども教室を運営することで、地域に応じた子どもの居場所をつくりだし、失われつつある子どもを育む地域の教育力の再生を図ります。

１．事業主体と実施組織

・事業主体である宝塚市より、地域住民や保護者で構成する小学校区ごとの実行委員会に運営業務を委託し実施しています。実施にあたっては、ボランティア団体や児童館の児童厚生員の協力を得ながら、地域主体で運営しています。

・子ども施策を統括する市長部局の子ども未来部子育て支援課を事務局とし、放課後子どもプラン運営委員会を設置。事業計画の策定、安全管理、広報活動、人材確保、事業の検証等を行っています。

＜運営委員会構成＞　市民団体代表、まちづくり協議会代表、社会教育委員、PTA 協議会代表、児童館長、小学校長会代表、社会福祉協議会、教育委員会等

２．実施場所

市内 24 小学校区中 20 小学校区において小学校校庭や空き教室、またコミニティ室など校区内の施設にて実施。

３．参加対象となる児童

校区内に居住する小学生（1 年～６年）で参加を希望する児童（幼児は保護者同伴で参加可）。

４．活動回数・時間（実行委員会により異なります。）

・活動回数　月 1 回～週 6 日

・活動時間　授業終了後～5 時頃

（終了時間は季節により変更）

※長期休業中の実施校も有り

５．実行委員の役割

実行委員会を構成し、放課後子ども教室実施の企画・運営・スタッフの確保・広報活動などすべての業務を担っています。

①コーディネーター

各実行委員会において学校、保護者、地域住民や地域児童育成会（放課後児童クラブ）などとの連携や調整を行っています。

②安全管理員・学習アドバイザー

子どもたちの遊びや学びの触発及びサポート、安全管理などを行っています。

６．主な活動内容

○校庭などでの自由遊び　：　ボール遊び、おにごっこ、なわ跳び、木工、シャボン玉など
○室内での自由遊び　：　伝承遊び（こま、折り紙、将棋など）、お絵かき、科学遊びなど
○公園遊び　：　宝探し、段ボール転がしなど

７．各小学校区別の実施状況

子ども教室名称	H21年度 開催頻度	平成20年度実績		
		開催回数	平均 参加者数	実行委員数
良元小 放課後遊ぼう会	週1回	40 回	60 人	6 人
仁川小 放課後遊ぼう会	週 5 回	216 回	65 人	19 人
末成小 放課後遊ぼう会	週1回	40 回	55 人	5 人
光明小 放課後遊ぼう会	月1回	15 回	117 人	11 人
一小っ子遊ぼう会	週1回	60 回	123 人	17 人
西山小 放課後遊ぼう会	週1回	40 回	127 人	8 人
逆瀬台小 放課後遊ぼう会	週1回	40 回	80 人	24 人
すえひろば	月1回	（H21 年度新規開設）		
にっこりひろば	月2回	20 回	96 人	6 人
売布小ひろば	月2回	20 回※	34 人	8 人
すみれっ子広場	月1回	6 回※	134 人	9 人
小浜小学校区まちづくり協議会	週1回	55 回	56 人	20 人
安倉小 放課後遊ぼう会	月1回	8 回※	161 人	9 人
みざっ子広場	月1回	（H21 年度新規開設）		
北小 すきっぷ	月 1 回	12 回	132 人	9 人
長尾南小 放課後遊ぼう会	週1回	48 回	97 人	4 人
中山台子ども広場	週5回	210 回	23 人	20 人
坂っこひろば	月3回	26 回	44 人	29 人
さつきっ子広場	月1回	（H21 年度新規開設）		
やまやまひろば	月2回	20 回	69 人	19 人

※印は平成 20 年度途中にて新規に開設

８．事業全体の現状

・実施箇所数：20 箇所
・宝塚市児童数：13,098 人（平成 21 年 5 月現在）
・平成 20 年度放課後子ども教室延べ利用人数：　58,560 人

宝塚市　仁川小 放課後遊ぼう会

1．事業の概要と目的

保護者を中心とした地域住民と、子どもの遊び全般をサポートする専門職のプレイリーダーが協力して、小学校において放課後に常設の遊び場を開催しています。異年齢間の自由な遊びをとおして、子どもたちの心豊かでたくましく生きる力を育みます。

2．運営について

主な活動場所	宝塚市立仁川小学校の運動場とコミュニティ室	**平均参加人数**	約70人
開設時間等	毎週　月～金曜日　授業終了時刻～午後5時（冬季は午後4時30分まで）　および第4土曜日　9時～12時 年約220回	**対象学年**	小学1年生～6年生 （幼児（保護者同伴）、中高生も参加可）
コーディネーター	活動内容　学校、地域児童育成会（放課後児童クラブ）、PTA、地域団体等との連絡調整 （　登録　1　）人		
安全管理員	活動内容　開催中の見守り　（　登録　46　）人		
学習アドバイザー	活動内容　宿題指導　（　登録　46　）人		

3．活動紹介（特色等）

子どもたちは、運動場と校舎内のコミュニティ室において、自分の責任で自由に遊んでいます。スタッフは、学習ができる環境と遊び道具などを準備し、サポートしながら見守っています。特にプレイリーダーは安全管理、遊具の整備、遊びの提供や、ケガや事故への対応を担当しています。

遊びの内容：運動場・・土山での泥んこ遊び、水遊び、野球、ドッヂボール、長なわ、なわ跳び
おにごっこ、コマ、中国ゴマ、大工遊び、シャボン玉等。
室　内・・卓球、カプラ（積み木）、レゴ、ドミノ、お絵かき、クラフト、読書等。

4．参加者・保護者の感想・意見等

・遊ぼう会が楽しくて、学校生活そのものも楽しくなった。・家ではできない遊びができる。・宿題を自分でする習慣がついた。・学年、クラス、性別に関係なく遊べる。・いろんな学年に顔見知りがたくさんいることが自信になった。・顔見知りになった上級生と校外で会っても親しくしてもらえる。
・プレイリーダーがいて目配りしてくれるのが嬉しい。・仕事、懇談会や用事があるときも助かる。

5．事業全体の成果と課題

成果：放課後に異年齢集団で遊べるようになったことが、学校生活や学校外でもいかされ、また幼児の参加で、日頃、幼児と接することのない児童に思いやりの心などが育まれています。そしてボランティアとして参加してくださる地域の方とのつながりが、子どもにも、大人にもでき始めています。

課題：プレイリーダーの人件費の確保が難しくなりつつあります。また開設回数が多いため多くのボランティアが必要になりますが、その確保が難しい状況です。

室内でオセロ、宿題、カプラ、卓球などをして遊んでいる様子

校庭の土山で泥んこ遊びをしている様子

事例紹介③：横浜市　NPO 法人 教育支援協会（モデル事業）

２００８年度　文部科学省委託事業　総合的な放課後対策推進のための調査研究事業

『小学校高学年の参加率向上に向けた放課後活動プログラムの開発と社会参画意識育成に向けた展開』

「放課後子どもプラン」は文部科学省の放課後子ども教室推進事業と、厚生労働省の放課後児童健全育成事業を一体的あるいは連携して行う事業である。しかし「放課後子ども教室」に主に低学年の子どもたちばかりが参加している現実を考えると、従来の「放課後児童クラブ」が担ってきた役割を果たしていて、競合的対立構造を生み出しているところに課題がある。これからも進んでいく男女共同参画化と少子化対策として「放課後児童クラブ」の機能は必要とされていて、“留守家庭児童対策”としての放課後児童クラブと“全児童対策”としての放課後子ども教室がそれぞれの役割を相互に補完し合うことができるかということが問題である。そのためには社会の変化に対応して従来の“留守家庭児童対策”を基本とした放課後児童クラブの機能を維持しながら、一方で社会が必要とする“全児童対策”としての放課後子ども教室の機能を付加していくかという課題と、どのように小学校高学年の子どもたちが参加する体制を作り上げるのかという課題の２つを克服する必要がある。

そこで本事業では、第１段階として、工夫した活動を行うことで小学校高学年の参加率の向上に取り組んだ。その上で学習塾機能を放課後に持たせただけだということにならないように、現在の社会的な課題となっている子どもたちの社会参画意識育成プログラムも実施、放課後活動の意味を社会的に理解してもらう事を目的にした。

１．小学校高学年の参加率向上に向けたプログラム開発

・高学年の参加を意識した場合、①教科的な要素を持ち、②子どもたちが何人かで参加できるプログラムであることを意識した。

➜科学実験活動／児童英語活動／国語補習活動／算数補習活動の４種類を実施

児　童　英　語　活　動

科　学　実　験　活　動

算　数　補　習　活　動

国　語　補　習　活　動

・実施期間…２００８年９月～２００９年２月の２０週で実施。
・実施会場…横浜市南区　地域教育施設「フリースペースみなみ」
➜高学年の参加人数とその変化と全体での割合の変化を調査・分析

２．社会参画意識育成に向けた展開

・社会参画活動を放課後の活動の一部に組み込み、活動後の意識を調査する。
➜活動に参加した子どもたちの意識調査からプログラムとしての社会参画活動の意義を考える

・社会参画活動スケジュール

活　動　内　容		参加数
2008／10／25（土）	蒔田公園でのみなみ祭り駄菓子屋出店体験	４６
2008／10／26（日）	パシフィコ横浜での横浜国際フェスタ　イベント支援活動	５０
2008／11／ 8（土）	弘明寺商店街での商店街活性化事業の協力と清掃活動	４５
2009／ 1／24（土）	「ボランティア活動の自主企画」のプレゼンテーション	３５
2009／ 2／ 7（土）	蒔田公園クリーン大作戦（蒔田公園清掃活動）	４１

・実際の活動の様子＜自主企画とプレゼンとイベントの支援活動＞

・放課後子どもプラン推進委員会名簿

氏　名	職　名	当事業における担当内容
吉田　博彦	教育支援協会代表理事	事業統括責任・推進委員会委員長
寺脇　研	京都造形芸術大学教授	事業研究員・推進委員会委員
阿部　進	教育評論家	事業研究員・推進委員会委員
笠原　賢次郎	財団法人日本英語教育協会理事長	推進委員会委員
立山　由生	教育支援協会九州代表理事	推進委員会委員
鰺坂　聡	株式会社旺文社取締役	推進委員会委員
安江　こずゑ	教育支援協会北海道代表理事	推進委員会委員
井熊　ひとみ	教育支援協会北関東支部支部長	推進委員会委員
畑　康裕	教育支援協会連合会代表理事	推進委員会委員
池田　正則	教育支援協会神奈川支部スタッフ	事業会計責任者・推進委員会委員

公教育に求められるつなげる力
～社会教育における地域との連携～

前・杉並区立和田中学校校長　　大阪府知事特別顧問　　藤原 和博　氏

1955年生まれ。78年東京大学経済学部卒業後リクルート入社。東京営業統括部長、新規事業担当部長などを歴任。93年からヨーロッパ駐在、96年から同社フェロー。

03年4月から杉並区立和田中学校校長に、都内では義務教育初の民間人校長として就任。キャリア教育の本質を問う[よのなか]科が『ベネッセ賞』、新しい地域活性化手段として「和田中地域本部」が『博報賞』、給食や農業体験を核とした和田中の「食育」と「読書活動」が『文部科学大臣賞』をダブル受賞し一挙に四冠に。

「私立を超えた公立校」を標榜して「45分週32コマ授業」を実践。「地域本部」という保護者と地域ボランティアによる学校支援組織を学内に立ち上げ、英検協会と提携した「英語アドベンチャーコース」や進学塾と連携した夜間塾「夜スペ」に取り組み話題に。

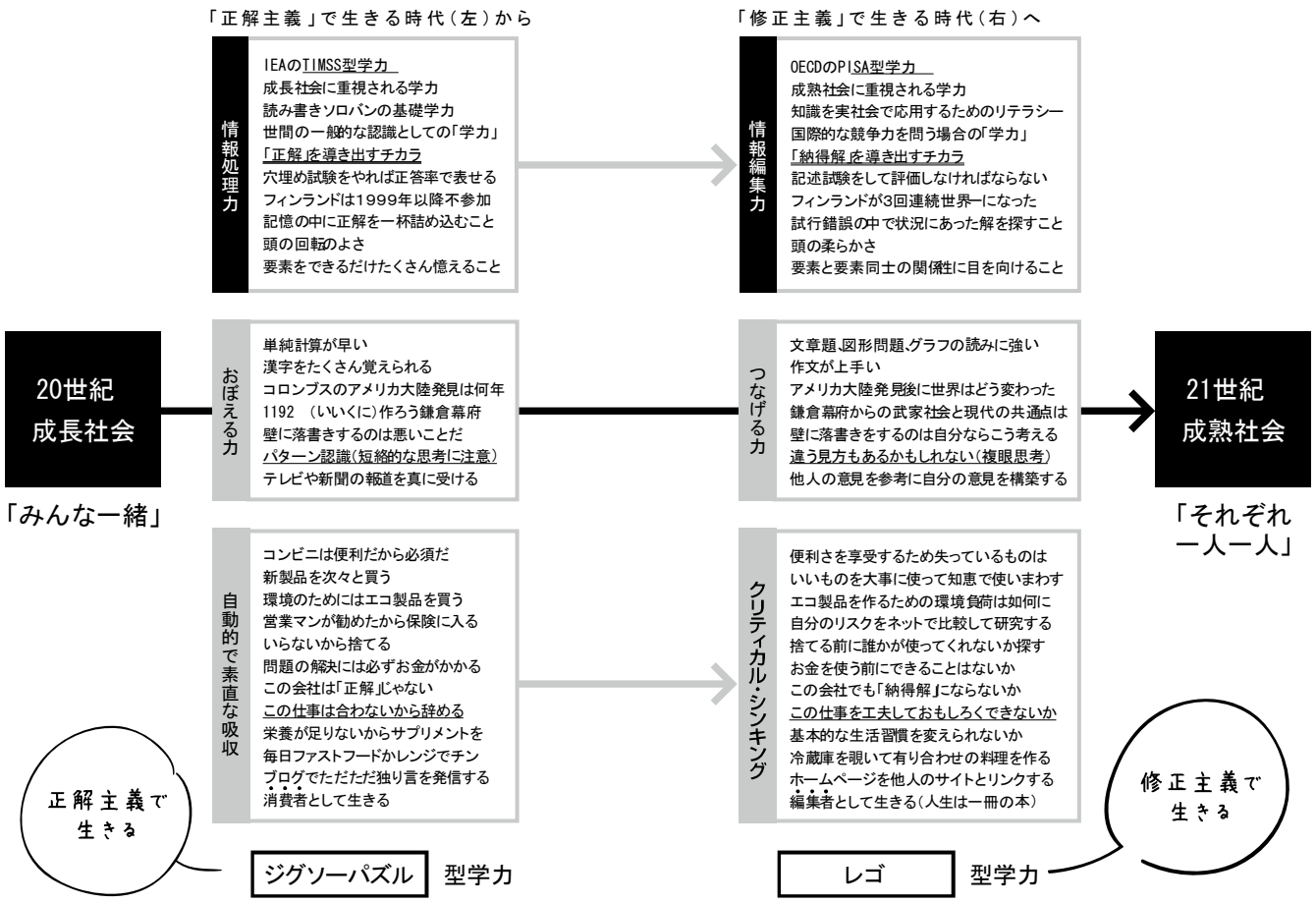
和田中をモデルとした「学校支援地域本部」の全国展開に文部科学省が50億円の予算をとったため、08年4月からは校長を退職して全国行脚へ。橋下大阪府知事から教育分野の特別顧問を委託され、大阪の小中高の活性化と学力Upに力を貸す。

全著作並びに活動の紹介は「よのなかnet」http://www.yononaka.netに。

【おもな著書】

◇『「ビミョーな未来」をどう生きるか』『新しい道徳』（ちくまプリマー新書）
◇ 民間校長への応募を呼びかける『校長先生になろう！』（日経BP社）
◇『人生の教科書[よのなかのルール]』『公立校の逆襲』『誰が学校を変えるのか』（ちくま文庫）
◇『つなげる力』（文芸春秋）

35歳の「学力マップ」



３５歳の教科書（藤原和博著　幻冬舎）２３４～２３５頁より

激励講演(30 分間)の全記録

【講演要約】
和田中学校での経営実践を元に、国の事業仕分けメンバーをされた現在の立場での情報も織り交ぜながら、教員と地域が協働で学校を運営する方法について。

現在は成熟社会に入り、多様化、複雑化した社会であるため、子どもたちを指導する教員の負担が大きく、教員だけで学校を運営するのは不可能である。その対処策として地域社会を再生し、学校を運営することが非常に重要であり、それを実現するための方法を３点挙げる。

まず「授業で学校を開く」こと。学校を開く授業とは、身近な社会のテーマや素材を題材に大人と子どもが一緒に議論し、学ぶ「[よのなか]科」である。地域のあらゆる大人が授業に入る、この授業実践は、地域教育支援人材の層の厚さにもつながる。

次に「運営を開く」こと。[よのなか]科のような授業の実施や、学校支援地域本部（学校の中で地域が学校をサポートする組織）を通して学校運営協議会のようなものを作って、校長と教員だけで経営を独占せず、地域が運営する仕組みを作る。

そして「経営を開く」こと。大阪府では人事制度を変えて、公募の校長を増やす計画を進めている。様々な職業に就いた後に教育への志を持った人や、若手教員も募る。このように開かれたシステムの上に開かれた校長が就くと、地域の力を学校に入れやすくなる。

まず始めることは、放課後子ども教室でも実施されている‘地域と学校の融合’である。和田中学校の地域本部を例としてＤＶＤ映像で紹介しながら、図書室、コンピュータ、芝生（緑）という、教員がその活用を持て余している場所に地域の力を注ぐのがいい。地域と学校が組んでプロジェクトを実施するのが特に効果的で、学校と地域の関係が格段に深まる。

学校に入る人材としては、退職して活動の余裕を得た団塊の世代、ＰＴＡのＯＢ、子どもが受け入れやすい年齢の近い大学生・高校生が活用できる。子どもたちの学習サポートにはこれまでと同じ地域の人だけではなく新しいスタッフを入れ、新陳代謝を起こすことが活動の継続につながる。

【講演全文】

前半戦の仕分け作業で第1日目に放課後インターンシップ、この予算が審議されました。実は第1日目は第1、第2、第3グループでだいたい 50～60 件の案件を仕分けしていったのですが、そのうち唯一この予算が残ったのです。それ以外は全部廃止か削減だったのです。それは私が子どもの居場所というのが今どれくらい大事か、つまり家庭に居場所がない、学校にも居場所がない、地域社会がない、そういう子が増えているということを最初に議員に説明しまして、ある意味では弁護が非常に珍しいことだったので、テレビ局も驚いていましたが、1つだけが生き残り、あとは全部廃止か削減、こういうような感じ。私が強調したからというよりも、それくらい議員も仕分け人も評価するくらい、この事業は非常に大事なものです。なぜ大事かというのは、もう1度強調しておきますが、もはや、学校を学校の先生だけに任せておいても無理なのです。これは「地域の方々が絡めればいいな」という話は昔の話だったと思うのです。できたら地域と学校とがうまくやれるといいな、みたいな感じですね。20 世紀の考え方だったと思うのですが、成熟社会に入って子どもがめちゃくちゃ多様化していって、家庭の事情もめちゃくちゃ、複雑化している。かつ変化がこれだけ激しいと、もう学校の先生だけではとても対応できません。昔のように各学校が例えば 900 人規模くらいあって、50 人くらいの先生がいて、そうすると先生も役割分担ができますから結構いろいろなことができるのですが、今はどんどん減っていまして、例えば杉並区などは単学級がいっぱいあるわけです。学年が2学級ということになりますと先生の数がぐっと減ってきます。だいたい十数人～20 人の間に減ってしまいます。ところが学校の行事は減りません。あるいはやらなければならないこと、やるべきことはどんどん増えていきます。なぜなら学校の問題よりは、子どもたちが多様化し、家庭の事情が複雑化し、軽度発達障害の子は増え、離婚も増え、虐待も増えているからです。だから、もう残念ながらどんなに先生が頑張っても、学校を先生だけで運営することは不可能になっているのです。この現実に実は文部科学省の官僚さえも気付いていない。だから初中局の局長と生涯学習の局長が異なることをやっていても平気な顔をしているのですが、私はこれはもう無理だと思っています。もう無理、つまり職員室という組織と地域のボランティア組織、これを地域本部と呼んでも何と呼んでもいいのですが、その組織が両輪で学校を動かさないと、もう持たないのです。そういうことをやっていかないと学校の機能低下が止まらない。地域の地盤沈下が止まらない。だからその対処策として学校を核に地域社会を再生するという、このことがものすごく大事になってくるわけです。今、この事業が 8,000 カ所くらい行われていると思います。やがて、おそらく文部科学省だけでなく厚生労働省も予算を全部、多分、合体されるような形で、そうでなければおかしいじゃないですか。初中局も生涯学習局もない、子どもたちにとっては、そんな縦割り行政は関係ない。ここから先は厚労省で、ここから先は文科省なんて子どもたちは関係ないのです。お母さんたちでも関係ないですね。だからそういうばかな縦割りが終わって、もっと統合されて、私が仕分けでも強調したのは、こんな予算では済まないはずだと言ったのです。「こんなのじゃないでしょう」と。要するにこれが日本の安全保障の核となる問題で、新しいコンクリートや鉄に変わる公共事業なのだということを、実はもう3年ぐらい前から国会にもずっと言っていて、今回も言っているわけです。

というわけで、ここにいらっしゃる方々は残らず新しい公共事業を支える、新しい日本の安全保障を支える一番根幹の仕事をされるという、そういう自覚でやっていただければうれしいと思います。学校を開いてもっとコミュニティーで学校を運営するといっても「じゃあ、どこから始めればいいのよ」という話だと思いますが、3つくらい方法がありまして、1つ目がまず事業を開いてしまって、地域の大人たちと子どもが一緒に授業を受ける、これがあります。多分この中に私の地方での講演を聞かれた方がいらっしゃると思いますが、私は「よのなか科」というのをずっとこの8年間やっていまして、この特徴は大人と子どもが一緒に学ぶ授業なのです。今日は時間がありませんのでこのことについては詳しく述べませんが、ぜひこれは勉強しておいていただきたいと思います。各学校で週に 28～32 コマくらい時間割があるのですが、せめてそのうちの1コマか2コマくらいは。和田中では水曜日の2～3校時を道徳と総合の時間としてやっていたのですが、5年間、年に 30 回ですから 150 回、すべて公開授業です。地域の方々、大人、おじいちゃん、おばあちゃん、大学生で教師になりたい人、団塊世代の人、PTAのOB・OG、そして保護者。そんな感じで 100 人の生徒に 30

人～50 人が混じって、一緒になって自殺の是非とか安楽死の是非とか、赤ちゃんポストの是非とか、そういうすごくまじめな問題を議論する。

ここにいらっしゃる皆さん、もしかしたら小学校の5～6年生や中学生は、そんなこと議論できないのではないかと思うかもしれませんが、それは子どもをなめすぎています。絶対できます。30 回くらい年間繰り返しますと、例えば和田中の普通の生徒が人間にとって宗教とは何かとか、あなたが裁判員で、もし少年が殺人を犯したときに、あなただったら何を聞くか、というようなことにも3行くらい自分の考えを答えられる子に育ちます。そういう子を育てるためには皆さんが混じって授業を受ける。一緒に議論する、こういうのが大事なのです。こういう授業を開いていきますと、地域の人たちの層が厚くなりますから。皆さんのやっていらっしゃる事業を転がすのにも、スタッフがいつも足りないと思うし、それをどうやって新陳代謝させればいいのか、悩んでいらっしゃる方は多いと思うのですが、まず学校は授業を開くということで、そういう地域のファン層を作るという、こういうことが非常に強力になるわけです。

これについて詳しく知りたい人は、ぜひ本を読んでくれればいいかなと思います。ここに置いてある『つなげる力』という本は文芸春秋社の本ですが、この「よのなか科」についてもある程度詳しく書いてあります。授業で学校を開く、そこに地域の方々が入っていく手法です。次に運営を開く、こういう授業を通じてもいいですし、地域本部というところを通じてもいいのですが、多分、民主党政権になりますと、すべての学校をコミュニティースクール化していくという流れになっていくのではないかと思います。学校運営協議会のようなものを作って、つまり校長と教員だけで経営を独占しない。あるいは昔だと組合というのが非常に強くて、校長をのけ者にして職員会議が学校の経営をしていたような、ばかげた学校もあったのですが、そういうのはだんだん減っています。都市部ではほとんどなくなりました。大阪などでまだ残っているところがあります。大分などでは大いにそれが残っていたから、ああいう事件も起こったのだと思いますけれども、組合学閥が人事を支配するのはおかしな話なので、それを開くためにも地域の方々が経営に参画して学校運営協議会方式、さらにそこに予算を渡してしまうという、そういう進んだやり方もありまして、それが今民主党の急先ぽうの人たちが言っている理事会方式といいます。地域の理事会に学校への予算を渡してしまうという話です。だから、もしかしたらそれに加えて社会教育の予算も渡してしまうみたいなことが将来的には起こってくる可能性があります。それほど早い未来ではないかもしれませんが。運営を開く。それから最後経営を開く、これが大事なことなのですが、これは私が相当これから進めようと思っていることです。

特に中学校なのですが、公募の校長を増やしたいということで、大阪では橋本府知事の要請を受けまして、私が特別顧問をやっているのですが、今回人事制度を変えてしまいまして、公募の校長を増やしていくということで、もう来年度からは今までゼロだったものを4人に、そういう人数で公募していきます。その中には退職した校長も認めてもいいのではないかと。教員から行って退職した校長、それが 60 歳以上だって元気ならいいじゃないか。ビジネスマンはもちろん、大学の教授や寺の坊さんだって、塾の塾頭だっていいんじゃないかと。ここにいらっしゃる皆さんだって、本当にそう思うなら、志と情熱とパワーがあればいいんじゃないかと。校長職には教員資格はいりません。教職資格がいらないので免許を持っている必要はありません。何と驚くことに運転免許さえも持っている必要はないので、何の国家免許もいらないという非常に不思議な職業なのですね。というわけで、そこに志と自分の 50 年間、60 年間、養ってきたネットワークを死ぬ前にきちんと、子どもたちにつなぎ替えて死のうみたいな、そういう人が僕は本来やるべきだと思うし、明治、大正には本当にそういう人がやっていたのです。要するに起業して会社を大きくして、最後は校舎も寄贈して、それで校長で死んでいくみたいな。そういう美しい、明治の人たちのそういう姿、もう1回見たいなという感じがあるわけです。というわけで公募校長を増やすということをぜひやりたいなと思っています。大阪ではさらに公募校長には教員が直応募することもできるようにしています。つまり 30 代、40 代の若手の教員がそのまま校長になってしまうという、こういう道も開いています。多分来年の4月にはその第1号が誕生するのではないかと思いますけれども。そうやって開かれた頭の校長が学校をやりますと、特に中学校区をまとめますと、多分皆さんの仕事もすごくやりやすくなるのではないかと思います。このへんのことについては、今日はとにかく時間が正味 30 分しかありませんので、あとは「よのな

かnet」という私のホームページを見ていただき、そこから「全国[よのなか]科ネットワーク」という今日の事務局をやっている若江さんが事務局長をやっていますけれども、この「全国[よのなか]科ネットワーク」のほうにここから飛べます。飛んだらここに、今日ちょっとだけお見せするビデオとかそういうものが全部収まっていますので、ID、パスワードなしに、それを見ることができますのでぜひ参考にしてください。

今日の私の話の骨格は、まず何から始めるか。地域との融合ですね、もちろん、もう皆さんは居場所の活動をやっていらっしゃると思うのですが、こういうこともやりますとすごく効果的で、学校との距離がぐっと近くなりますよ、という話を少しして、ちょっとビデオでその例を見ていただき、最後に誰が＝強いのか＝ということが、多分皆さんの主たる関心事だと思うので、違いますか、そうでしょう？　それをもう少し詳しく語って終わりたいと思います。私は 40 分にここを出ないといけないので、あと 15 分ですね。これから全農というところへ講演に行って、午後一から文科省系の仕分けの一番大事なやつ、義務教育費国庫負担とかそういうのがありますので、そこに駆け付けるということになっています。では何から始めるかということで、皆さんは何から始めていますか。

○○：地域の人との話し合い。

藤原：話し合い、保護者との話し合いですね、何から始めているのですか。

○○：場所を探したり人を探したり。

藤原：場所を探したり人を探したり、要するにコーディネーターとしての働きをされていると思いますが、地域と学校とががっぷり四つに組むようなプロジェクトというのを1個やっていただくと、非常にその関係が深まります。この中でちょっとお聞きしたいのですが、図書室の改造というのをやったことがある、あるいは触れたことがあるという方がいらっしゃったら、ちょっと手を挙げてください。はい、図書室の改造というのはすごく学校と地域との関係が密になりますよね、違います？

○○：そうですね。

そうですよね。これは私、非常にお薦めする手法なのです。もちろん、放課後の子どもを預かる場所としても、それから中学生の居場所としてもすごく図書室は大事です。中学校の場合、全国で1万個ありますけれども、まず僕の感覚では 7,000 個～8,000 個の図書室は死んでいます。かび臭い、誰も行かない図書室です。だいたい 15～35 年前ぐらいの百科事典がドーンと置いてあったり、誰も読まない文学全集がザーッと並んで、多分何十年前かに寄贈を受けたものを捨てられないでいるのです。子どもたちが絶対読みたくない本ばかりが並んでいるわけです。こういう図書室は改造しなければ駄目なのよと、これは何遍文科省に言っても、つまり捨てる予算は認めてくれないのですが、すごく大事なのです。とにかく、まず 9,000 冊くらい蔵書があるのですが、このうち 5,000 冊～6,000 冊を捨てないと駄目なのです。

なぜ捨てられないかというと、歴代の校長とか司書教諭とか、図書室を担保する人が自分の代で捨ててしまうと、次に来た人が困ったときに私の責任と言われたら困る、こういうことで捨てられないのです。例えば皆さんが「改造をやりましょう」と言ったときに、校長がどういうことを言うかというと「これは市の資産だから捨てられない」とかいろいろなことを言うのです。そんなのはうそで実際には資産台帳には載りません。なぜならそれぞれの市区町村から学校に行っている図書費というのは、ほとんど雑費と同じ消耗品費の扱いでやっていますので関係ないのです。要するに市の資産台帳にいちいち書籍などは載ってないのです。ということは校長の権限で捨てられるのです。しかも、廃棄した本をいちいち線で消していくなんて大変でしょう。そんなことをやっていたらその人手だけでも大変です。そんなことはいらないです。一括廃棄でかまわない。要するに校長の責任でできるのです。というわけで、ぜひ、まず図書を捨てる、捨てるとスカスカになります。だいたい 9,000 冊あったところが 3,000 冊になるとスカスカになる。スカスカになると何がいいかというと、本をこういうふうに展示できる面出しといいます。皆さん分かりますよね。こうやってしまわれているより、こうやって置かれていたほうが子どもたちも読む気になるじゃないですか。しかもいらないやつをドーンと捨てるわけです

から。百科事典なんて取っておいたら絶対駄目です。なぜなら国の名前も全部変わってしまっているのだから、子どもたちにうそを教えることになる。あんなものがあるほうが害になるのです。分かりますか。

それからマンガは絶対に必要です。マンガは絶対必要。この中で『スラムダンク』というマンガを読んだことある人？　はい、この人たちが教育を語る資格のある人です。（笑）『スラムダンク』も読んだことなくて今の子どもの現状を分かるわけがないじゃないですか。あのマンガはもうマンガではありません、文芸ですね。言っておきますが、今バスケットボールを描いた小説であれ以上のものはありません、多分出ないです。つまり文芸の世界でバスケットボールを書かせたらたらあれ以上のものはまず出ない。野球だったらあさのあつこの『バッテリー』がありますとか、そういうふうになるわけです。だから子どもたちにとっての文芸というのをきちんとまじめに考えれば、マンガでもスラムダンクとかリアルというのが入ってなければいけないのですね。ところが大人はみんな手塚治虫を読ませたいから『ブッダ』と『ブラック・ジャック』しか置いてなかったり、宮崎駿ぐらいしか置いてないのです。あるいはマンガ歴史人物辞典とか。いいのですが、それ以外の文芸もそろえてね、マンガの。そうするとだいたい 1,000 冊～1,500 冊ぐらいそろえることになりますが、新品で買う必要などありません。子どもたちが持っていますから、寄贈させればいいわけです。争って寄贈させるようなゲームに仕立てれば。和田中でもそれで 300 冊、500 冊、すぐに集まりました。つまり小学生では夢中で読んでいたけれども「もういいや」という子はいるのです。ブックオフに売る、それよりは学校でその子の名前を残してあげればいいのです。本当はお金を払ってあげたいけれど。というような感じでやれば幾らでも無料でできるじゃないですか。

というようなことで図書であったり、コンピューター室であったり、緑だったり、そういうところは先生たちが持て余してしまっているわけです。コンピュータールームなんて、数学の先生とか技術の先生がちょっと片手間でやるのですが、サーバーでネットワークを動かすようになってしまうと、ちょっとダウンしたらまず無理、復活できません。だからもうお手上げなのです。それからコンピューターで学ぶというのは個別に学ぶことになりますから、一斉授業というのは意味がありません。個別にウェブで当たったりしますね。ということは人が必要なのです。言ってしまえばコンピューターの授業では、1人の先生が集中コントロールで学ばせることが不可能になります。だから地域の人たちが入っていたほうがいいわけです。私が最初にF小学校でやったのはそういうようなことで、そこだけはすごく感謝されました。コンピューターが何とか分かる。ちょっとなら分かるお父さんやお母さんで、さっと行ける人が4～5人いて、3人に1人ぐらい付いていると、子どもがちょっと困ったときに手を挙げてさっと歩み寄ってやれる。それでどうしたらいいか分からなかったとしても「分かんないね、どうしようか」というような感じでいろいろやってみる。これでいいんです。

大人というのは学校の場に行くと、正解をしゃべらないといけないとか、正解しないといけないとか、一発で解決しないといけない、こう思うでしょう。それは日本人が正解主義というのに呪縛されてしまっているからそうなるのです。そうじゃないのです。子どもというのは大人がいて相談したんだけど、大人も分からなかった、でも一緒に考えてくれたとか、一緒にいろいろいじってくれた、それでいいのです、その斜めの関係がものすごく大事なわけなので、いること、相談に乗って一緒に考えること、一緒に悩むこと、一緒に間違うこと、一緒に失敗することに意義があるのです。皆さんは学校へ行ったときに正解を言わなきゃいけないなどと絶対思わないほうがいいですよ。正解ばかり言う大人ははっきり言って嫌われます。それはそうでしょう、言っておきますけれど、小学校の高学年から中学生になったら、大人が来たときに、その人の全人生を見ていきます。例えば本をほとんど読まない人が「読書しなさい」と言ってもばれてしまいますからそれは無理です。

ということで、学校にどんどん顔を出して学校にネットワークを張るということは、同時にものすごく強固な自分研修、自分自身の人生のすべてが試されるのです。なぜなら子どもは名刺を受け取りませんよね。皆さんも名刺を出すわけにいかないでしょう。元大手の銀行の支店長だったとか、そんなことは全然関係ありませんから。例えば、僕は林真理子さん、櫻井よしこさん、養老孟司さん、谷川俊太郎さんなどを和田中に連れていきました。谷川俊太郎さんは教科書に載っていますから教科書のおじさんなんですね。それ以外はただのおばさんですよ。櫻井よしこと言っても、林真理子と言ってもただのおばさんです。名刺を出しても分かりません。本当に彼女たちの全人生が出てしまうわけです。そ

れでも見事な関係を作っておられました。そういう学校に顔を出すということは大人にとっても素晴らしい自分研修になるのです。ただでできる研修です。ということで、ぜひ図書室、コンピューター室、緑、のように先生たちが持て余しているところに、ぜひぐいぐいとはびこっていただければ非常にうれしいなと思います。先ほど言いましたように、最後か最初か本当は分からないのですが、皆さんが力強く本当にやってほしいのは校長と組んで、よのなか科のような授業、つまり生涯学習と学校教育が融合するような、大人と子どもが一緒に学べるような授業をやっていただけるとうれしいなと思います。

ではあと7分くらいなので4分ほどビデオを見ていただきましょう。和田中の地域本部の主にドテラを中心としたビデオを見たことがある人はちょっと手を挙げて。はい、では見ていない人が多いのでさっと行きましょう。

DVD：組織が東京都杉並区立和田中学校の中に誕生しました。中庭の芝生や花壇の手入れ、図書室の管理やサポート……

藤原：ここで映ることは大阪では「放課後学び屋」と言って、ここは主に「土曜寺子屋」（ドテラ）の様子を映していますから、大阪では放課後学び屋ということで、放課後にこういうことが起こっています。関西の方いらっしゃる？　大阪では池田市の池田中学校というところからものすごく、和田中をコピーして徹底的にやっていますから、池田市立池田中学校に一度見学に行ってください。

DVD：地域本部のスタッフ、都木さんは和田中の卒業生で、初代の土曜寺子屋の……

藤原：京都府では下京中学校というところが地域運営協議会に図書室の運営まで任せています。和田中にも何度も見学に来ました。

DVD：地域本部のスタッフは卒業生の親たち、学校との調整、経理事務、各事業の運営など、月曜から土曜、交代で活動しています。元PTA会長だった伊藤さんは藤原校長との強い協力体制の下、土曜寺子屋の開校を機に地域本部を立ち上げ、その運営に当たってきました。今年は土曜寺子屋の責任者です。地域本部の活動の核は何と言っても土曜寺子屋、通称ドテラです。受付は 30 名ほどの保護者のボランティアが交代で担当。ドテラの利用生徒数 100 名、そのうち 70 名が1年生です……

藤原：これは午前中勉強してその日に出た宿題などは全部やってしまっておいて、お弁当を食べてから午後部活に参加するので、部活の格好で来ているのです。

DVD：生徒さんからの1学期 1,000 円の会費で活動資金を賄っています。……

藤原：では誰を集めるか、この中に出て来るので。

DVD：1年が被服室、2年が美術室、3年が図書室、そのほか特活室や……

藤原：この正面に見えるおじさん、平井さん、この人は塾の塾頭です。地域社会の塾の塾頭だって教育資源なのですね。さらに右側に映っていたのは団塊の世代。

DVD：学ボラさん、その多くは塾のアルバイトを経験しています。……

藤原：と、大学生です。

DVD：ここでは基礎学力の向上に力を注ぎます。1人で学習する習慣が付いていない生徒にどのように勉強方法を教えるか、そういう課題に挑戦しています。地域本部の部屋は図書室の隣、学生の出入りが多いので活気にあふれています。……

藤原：準備室という部屋があるのですが、これはだいたい倉庫になってしまっているので、これをどかして部屋をもらうといいと思います。

DVD：学習時間は朝9時半から 45 分の3コマ、生徒はその日勉強したいものを持ってきます。学校の宿題や塾の宿題、予習・復習、テストや受験勉強、その内容はさまざま……

藤原：和田中では放課後、図書室を3時～5時までいつも開いていて、地域の本好きおばちゃんに来てもらって、そこが居場所になっています。部活もやれない、ちょっと体力的に弱い子で、家に帰っても居場所がないんですね。すごく大事です。図書室をそういう弱い子にために放課後開放してあげる。この奥がマンガのコーナーです。

DVD：和田中で指導する学ボラスタッフは教師を目指す人が多く、やんちゃな生徒さんを前に飽きさせない学習ゲームから細かな受験指導まであらゆる学習手段を準備し、生徒さんに望みます。……

藤原：こういうふうに本を面出ししているでしょう。和田中でも 6,000 冊くらい捨てました。もし価値のある本を捨てたら嫌だなと思うのだったら、ブックオフに全部持ち込めば価値のある本だけ売ってくれますから。

DVD：分からなかった課題が分かった瞬間、学ボラの味わう感動です。この感動が彼らを本物の教師へと導きます・・・。

藤原：教師になりたい大学生にとっては、これ以上の修業の場はないですね。さて、緑です。

DVD：ドテラの始まる前に芝刈り講習会に参加した生徒さん、……

藤原：芝生などは手間が掛かるので、とても学校の先生ではできません。だから地域の人たちを大胆に取り込むきっかけになります。

DVD：生徒さんは水曜朝の朝ボランティアでも活躍します。……

藤原：水曜の朝はおじいちゃん、おばあちゃんたちが毎週こうやってラジオ体操をしているのです。ラジオ体操も8時からやってもらう、そうすると生徒の登校と鉢合わせて自然なあいさつ運動が起こりますね。緑、これは僕、頼みもしないのに水車小屋を作ってしまったという、これはライフワークというようなものですね。

DVD：放課後の図書室、本の貸出のIT化をサポートする地域本部のスタッフ、もし……

藤原：司書の資格などはいらないのです。本が好きであれば。

DVD：もし、地域本部がなかったら先生の仕事が倍増します。理想の図書室を目指す司書ボランティア、先生方への指導も請け負います。……

藤原：逆に先生方に指導してしまうということですね。はい、ビデオはここまでいいです。今も見えていたと思います。まず、とにかく団塊世代、PTAのOB・OGが非常に大事で、ここにいらっしゃる方も多いと思います。団塊世代の方々がこれから5年間で約 1,000 万人くらいです。中核世代は3世代で 600 万人ですが。その前後配偶者を合わせますと 1,000 万人ぐらいが第2の人生を始めますから、もう始められた方もいらっしゃると思うけれども、後から来る方で、地元で何か社会貢献をしたいという人は少なくないと思います。1割としても約 100 万人、ここから5年か 10 年で。100 万人いれば全国1万校区の中学校に1校 100 人くらい出て来るはずなのです。これを使わないでどうするのという話です。だって知識・技術・経験のすべてを持っていて、かつ、住宅ローンの払いが終わっていて、ここがすごく大事なのです。それから息子、娘の子育てを終わっている。自分か配偶者のどちらかの親に介護が発生するような場合、そちらにも戻って、そこに家もあるし、そこで暮らそうかという方も多いと思います。そういう方のうち、例えば商社で働いていた方が

海外で 16 年いましたみたいな、そういう方が絶対にいるのです。これからは全国に帰っていきますので、これを握るというようなことがすごく大事になると思います。

実は和田中学校の地域本部については、1代目・2代目は元PTA会長がPTA会長を辞めてから、末っ子が中学校を卒業したタイミングでつかまえてやっていただきました。2年、2年と。3代目の今の地域本部の本部長は、伊藤忠を 50 何歳で辞めて地元に戻ってきたのです。学区内に住んでもいないです。PTAのOG・OBでもない、自分が和田中のOBでもない、そういう男性が和田中に行き始めて2年間、さっきも映っていたのですが、数学は教えられないけれど算数ぐらいならできるかなと。算数おじさんをやっていたら、2年間してお母さんたちがすごく頼りにし始めてしまって。何といっても伊藤忠で 16 年ぐらい、海外での内戦のさなかのカンボジアにもいたから、あまり動じないのです。そういうことで選ばれて今本部長をやっています。そういう人が出て来るということです。要するに息子・娘が学校にいる人よりも、そういう人がやったほうが収まるということがあるわけです。ということでこれが大事です。それからPTAにも「おやじの会」というのができているところはその会をうまく利用する、これも大事ですね。小学校などは特に、その「おやじの会」を組織してしまって、そっちと一緒にやるみたいなことが大事だと思います。

最後に大学生が少ないところ、例えば秋田県では、ここに担当の方も来ていますが、私が聞く限り高校生が小中学校の補習に出向いているのです。中学校と高校とのブリッジになるために教育長のすごい強力な方針で高校生を動員しているのです。これはいいと思いますね。とにかく子どもにとっては年齢の近い人からちょっと分からないことを教わる、ということが大事で、例えば学校で数学の先生に、数学の不得意な子のうち半分ぐらいは算数があまり履修できていなくて算数が不得意なのです。中学生が数学の先生に授業が終わってから「今日習った方程式の5分の3と2分の1って、どう足すんですか」と聞けないのです。恥ずかしくて、プライドがありますから。そういうときにも土曜日だったり放課後に、大学生や高校生のお兄ちゃん・お姉ちゃんが来ていると、その人なら聞けるじゃない。学校の先生に質問するのはなかなか難しいですからね。難しいことしか聞けないみたいな常識がありますから。そういう意味でもぜひ大学生とか高校生とかそういう人。

それからお母さんの中でも昔公文のあれをやっていたとか、ベネッセの赤ペン先生をやっていたとか、それから団塊世代の人たちの中には昔予備校の講師をやっていたとか、これからいっぱい出て来ると思うので、ぜひそれをつかまえてほしいと思います。教師になりたい大学生を研修扱いでずぶずぶに使ってもただで働いてくれると思います。つまり研修なんだから。そういう取引が必要です。というわけでいつもの人々、つまり町会長、商店会長、青少年委員、そういう人だけに頼っていたら駄目ということです。この中にもいらっしゃるかもしれませんが、そういう方々は防犯・防災には本当に素晴らしい力を発揮していただいているのですから、学習サポートだったり居場所で子どもたちと斜めの関係を作るのは新しいスタッフを入れていただき、図書室やコンピューター室、あるいは世の中の事業と、新しいコミュニケーションを起こしていただくというようなことで使わないとスタッフの新陳代謝が起こりません。新陳代謝がものすごく大事です。そうでないと、ここにいらっしゃる方々が頑張ってたまたま1年できても、それが5年・10 年と続きません。和田中では私が離れても、もう全然OKです。学力も6年連続上がっていますし、部活の活性度もものすごく上がっていて、今年は全国大会に卓球部などが行っています。というわけで、ここにいらっしゃる方がこれからの日本の安全保障と日本の地域社会の再興の鍵を握っていますので、ぜひよろしくお願いしたいと思います。どうもありがとうございました。

Ⅷ 分科会（課題解決型ワークショップ）

分科会では、事前アンケートで得られた参加予定者の課題解決の一助として、参加者の“情報交流”と“ネットワークづくり”とをねらいとしたワークショップをおこないます。アドバイザーからの経験談や情報提供を参考に個々の課題解決のヒントを見つけます。

事前アンケートによる課題テーマ調査

	行政関係者		現場関係者		全体	
	テーマ内容	人	テーマ内容	人	人	割合（%）
1	人材確保・育成方策について	27	人材確保・育成方策について	10	37	37.0%
2	場所の確保について	9	場所の確保について	3	12	12.0%
3	学校との連携・協力について	5	学校との連携・協力について	2	7	7.0%
4	地域資源の活用方策について	1	地域資源の活用方策について	4	5	5.0%
5	学力向上方策としての活用について	2	学力向上方策としての活用について	1	3	3.0%
6	学校・地域・家庭が望む実施内容について	6	学校・地域・家庭が望む実施内容について	1	7	7.0%
7	プログラムについて	7	プログラムについて	5	12	12.0%
8	子どもへの対応について	1	子どもへの対応について	1	2	2.0%
9	保護者への対応について	3	保護者への対応について	5	8	8.0%
10	その他	7	その他	0	7	7.0%
合計		68		32	100	

「人材確保・育成について」は、今年度の自由記述と昨年度の分科会実施結果を参考に検討し、『人材確保』と『人材育成』の2つの分科会に分けました。次に、「学校との連携・協力について」は、主に場所の確保に関する自由記述が多かったことから『活動場所の確保』に絞りました。本事業の充実の要ともいえる『プログラムの充実』を加えて、4 つのテーマで分科会を設定いたしました。

4つの分科会

①『地域資源としての人材の確保について』

（アドバイザー：NPO 法人 スクール・アドバイス・ネットワーク　理事長　生重 幸恵　氏）

人材も地域資源のひとつであることから、地域の特性を活かした連携による人材確保の事例から方策を考えます。

②『人材の育成について』

（アドバイザー：NPO 法人 スクール・アドバイス・ネットワーク　副理事　井上 尚子　氏）

教室独自での取組みや都道府県・市区町村で開催される研修との連携など人材育成のポイントと手法を考えます。

③『活動場所の確保について～学校や公民館などとの連携・協力から～』

（アドバイザー：島根県教育庁 生涯学習課 社会教育グループ　サブリーダー　横田 康　氏）

活動場所の確保のための関係各所との連携のあり方や効果的なアプローチの仕方などさまざまな具体例から考えます。

④『プログラム内容の充実について～量と質の両面から～』

（アドバイザー：山形県教育委員会 教育やまがた振興課　社会教育専門員　白林 和夫　氏）

量的な拡大から質的な充実へ、プログラム充実の方向性と具体的なプログラム事例や運営方法について考えます。

分科会①「地域資源としての人材の確保について」

アドバイザー：ＮＰＯ法人　スクールアドバイス・ネットワーク　生重　幸恵　氏

【分科会の目的・目標】

人材も地域資源の一つであることから、地域の特性を活かした連携による人材確保の事例から方策を考える

【挙げられた課題】

課題をあげていく中で、「人材確保」について、どこでどんな課題があるのかを全体的に把握する必要があることがあげられたため、各参加者の課題を分類し、次ページのように整理した。

＜都道府県教育委員会グループ＞

人材確保における“発掘手法の情報収集と管理、市町村に対する支援策の情報提供”が、主な役割。

・市町村ごとの状況が違う中で、各市町村の課題にあった支援策の情

＜市町村教育委員会グループ＞

人材確保における“人材発掘のしくみづくり”が、主な役割

・子どものニーズにあった人材発掘のしくみが課題

＜教室関係者グループ＞

人材確保においては“具体的人材確保と運営”が役割

・子どものニーズにあった人材確保が課題

【分科会のまとめ】　※ワーク２－③「アドバイザーによる整理」

①　子どものニーズにあった人材像の整理

まず子どものニーズ（遊び、学力、体力、管理、体験活動、その他）ごとに、具体的な人材の確保の目標を持ち、確保機会をつくることが大切

②　確保の手法

どうやって多様な人をまきこむのかは、何よりも地道な広報活動、現場の人間の声かけが重要

→それにより安心な方々を確保し、育成をしていくしかない。

③行政は「常にあきらめずに広報周知」

当事者意識を育て、まきこんでいくために、子どものニーズを整理した上での人材確保の仕組みづくりが必要

●分科会の展開

【ワーク１】自己の課題を整理し、全体で共有する

①自己の課題整理　②グループでの課題共有　③グループでの検討　④全体共有

⑤アドバイザーからの情報収集

↓

【ワーク２】課題解決のヒントを整理する

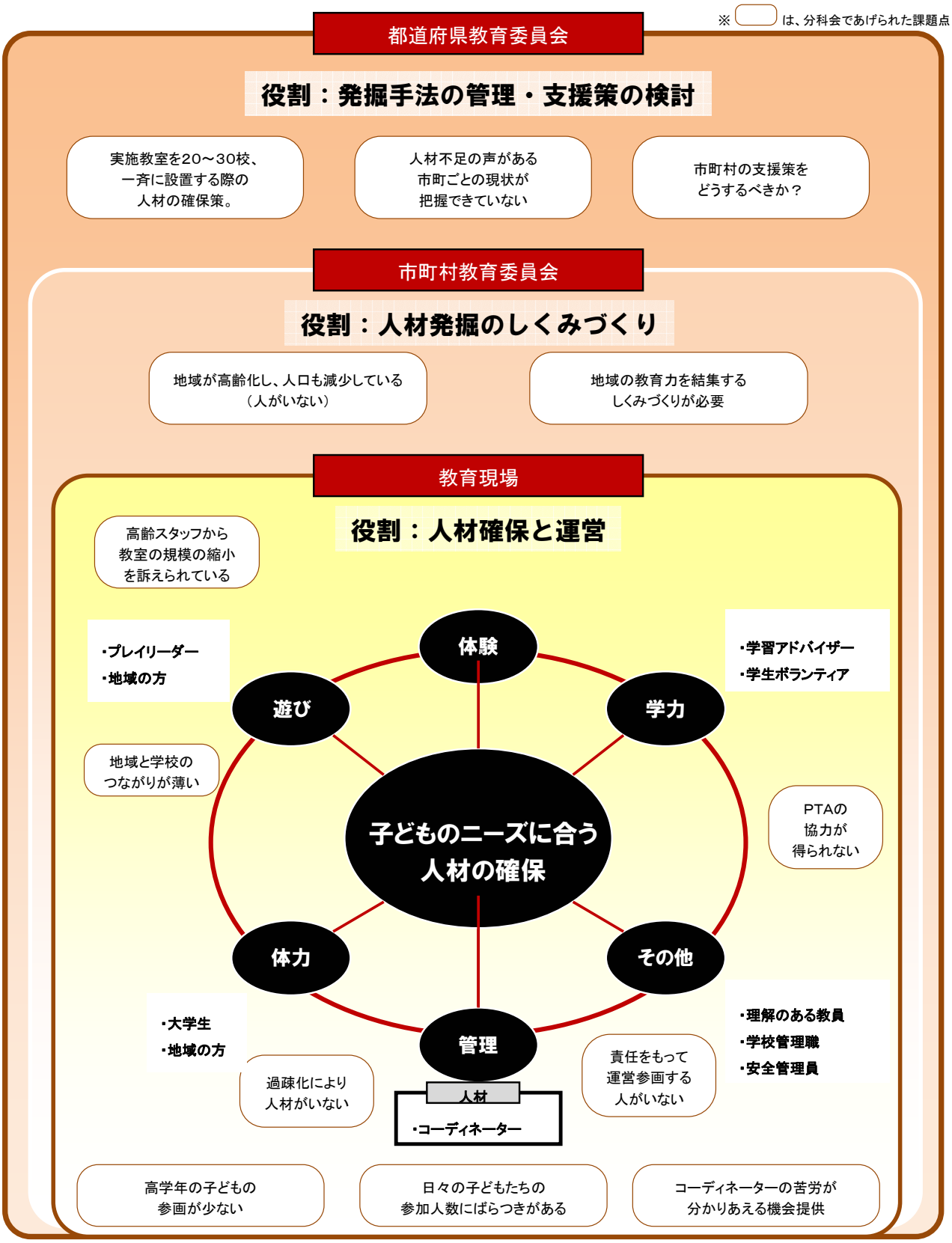
①グループで検討する課題を選択し、テーマを絞って話し合う　②全体共有　③アドバイザー整理

↓

【ワーク３】アクションプランを考える

下記は、ワーク1で抽出されたコーディネーター、市町村教育委員会、都道府県教育委員会の持つ役割とそれぞれの立場で考えられる課題をまとめたものである。人材確保においては、どのような人材が必要かを明確にするために、子どものニーズを整理し、ニーズごとに必要な人材を明確にした。

分科会①　各役割における人材確保の課題



分科会②「人材の育成について」

アドバイザー：NPO 法人 スクール・アドバイス・ネットワーク　副理事　井上 尚子　氏

【分科会の目的・目標】

独自実施の取組みから、都道府県・市区町村で開催される研修会との連携まで、人材育成のポイントを検討する

【挙げられた課題】　※グループA～D:主に行政所属の方、 グループE:主に現場所属の方

＜A＞・現場指導者の研修内容のあり方

・行政主導からどう脱却して、いかに地域にまかせていけるか

＜B＞・地域人材の確保 - 退職校長をコーディネーターに、学校が開かれた上での地域のネットワーク作り

・人材を次につなげるための施策 - 行政中心で考えると次につなげる点が弱い

＜C＞・コーディネーターの育成／養成の研修会、現場の核となる人間をどう育てるか、子どもに接する現場の人間をどう育てるか？

・既存の組織（婦人会、子供会）の活用など

＜D＞・子どもプランをどう考えて、そこへ向かうためにどういう人材育成が必要か（目的が設定されれば、成果もふまえた上で）

・行政主導だと使命感でやってしまっているところがあり、継続性が弱い。行政主導であっても意識改革を

＜E＞・現代の子どもにどう接するか、現場の研修を多くしてほしい

・地域の方々とのネットワークの作り方

【分科会のまとめ】　※アドバイザーによるまとめと整理

①やりがい、楽しさを周知することで、元気のある活動が広がっていく＝OJT が必要

⇒地域の方々が参加しやすいしかけづくり

②今の子どもたちの状況やニーズの把握、保護者のニーズの理解

⇒項目別の具体的な研修「今の子どもとの接し方」「発達障がいの子どもとの接し方」・・・などを小さな単位で実施し、個別の現場の生の声を活かす

③学校の状況の把握の必要性

子どもたちが日頃どのような学習活動をしているのか、家庭ではどのような状況なのかを理解して接するために

⇒地域活動は、学校と連動、教員とも連携、行政とも連携した研修が必要

④様々な既存組織との連携の必要性

学童クラブとの連携＝子どもからしてみれば‘選択肢が広がる’

⑤行政の方々が現場を知ることの必要性

集まる場所を整備することで、地域の方々が自然に情報交換ができる。そういったところで行政の方々が生の声を知る

●分科会の展開

【ワーク１】自己の課題を整理し、全体で共有する

①自己の課題整理　②グループでの課題共有（ＫＪ法）④全体共有　⑤アドバイザーからの情報収集

【ワーク２】課題解決のヒントを整理する

①グループで検討する課題を選択し、テーマを絞って具体的解決策を話し合う　②全体共有
③アドバイザー整理

本分科会では、参加者を 5 つのグループ（A～D：主に行政所属、E：主に現場所属）に分けた。これにより、立場の近い参加者同士が話し合える環境となった。

【課題に対する具体的な解決策】

グループ	課題	具体的解決策
A	研修のあり方	①現場中心の研修が大切 ②課題をよく現場に聞き、それにあった研修を実施 例：特別支援の子どもたち対象の先進事例 ③行政とボランティアの関係は、学校とPTAの関係に類似。行政とボランティアが目標を共有し、いっしょに高めていけるような研修が必要（研修のための研修にならないように）
B	地域人材の発掘	①地域の人にいかに学校に足を運んでもらうか 足を運んでもらうための企画を実施。地域の人と何ができるかなど、実践にチャレンジしてもらい良さを知ってもらう ⇒次は自分のしたいことを企画してもらう ②退職校長については、学校を知っているという意味では効果的に動いていただける。そのノウハウを地域の人につなげていく
C	研修のあり方	①現場のスタッフのスキルアップ 1）各地域で実施。県の主催でキャラバン方式が必要 2）学校と連携して研修を実施する 3）成功事例の紹介 4）県外からの情報の共有 5）児童クラブとの連携 6）現場の環境を整える（スタッフルームを用意することで日常的に情報交換ができるようにする・・など） 7）県の職員は現場を視察し、現場を良く知ること ②核となる人材育成 現場のスタッフが育ってから核となる人材が出てくる
D	子ども教室（再）活性化に向けた人材育成のあり方　～元気の出る研修～	①子どものニーズに応じた研修 事業に携わっている人たちが、疲れてきているのではないか 謝金の発生有無にかかわらず、直接子どもに関わる人が最も大切。子どもを中心にすえた「子ども放課後教室」のあり方そのものを考えるべき ●運営委員会（各立場の方々）の意識改革研修（県の行政もそこに関わっていく） ●児童クラブ（学童）との連携についての研修

E	**子どものテーマに応じた対応と研修**	①様々なテーマに応じた具体的な研修 行政の方々は「子ども」を一括で見ているのではないか？ 子どもたちに携わっている人たちの生の声を聞き、細かいテーマに応じた研修を地区から全国へ発信 ＜例＞ -発達障害にあわせての研修 -小学校低学年の子どものための研修 -学習が遅れている子どものための研修

グループでの課題共有では「自分たちの取組みについて知ってほしい」という熱意を持って、真剣に話をされている様子だった。一方で、課題だとはわかっていても、なかなか具体的な解決策が見出せずに、話し合いが滞っているグループも見うけられたが、やはり最後はすべてのグループが「子ども」「現場」「連携」という言葉をキーワードとして人材育成の解決策を見出されていた。行政の方と現場の方が一緒になった今回の分科会をきっかけに、各教室や地域での効果的な人材育成が実施されることを期待したい。

分科会③「活動場所の確保について」

アドバイザー：島根県教育庁　生涯学習課　社会教育グループ　サブリーダー　横田 康　氏

【分科会の目的・目標】

活動場所の確保のための関係各所との連携のあり方や効果的なアプローチの仕方などを、さまざまな具体例から考える

【挙げられた課題】

＜市町村教育委員会グループ＞

・学校主体の場合　→余裕教室がないため、候補として公民館なども考えられるが…

・公民館主体の場合　→他に移したくても「新規」の場所の検討が必要

＜都道府県教育委員会グループ＞

・予算の確保

・学校の理解不足　→事業そのものの理解促進、認知が必要である

事業について総論では賛成だが、各論になると反対の立場になる

＜教室関係者グループ＞

・行政や学校への働きかけ　→具体的な方法がわからない

・縦割り行政への不満　→部署横断的な展開が必要となる

【分科会のまとめ】　※ワーク２－③「アドバイザーによる整理」

課題解決策検討の結果、分科会テーマ③における共通のキーワードとして「理解」「公民館」「安全確保」の３つが挙げられた。

１．「理解」の促進…校長先生の理解促進、情報発信、そして課題や成果を地域レベルで検討する場を設ける必要がある。

２．地域課題を解決する場としての「公民館」…放課後の子ども対策が「地域の課題」だということを明確にすればいい。学校の余裕教室がない場合、公民館は理解を得やすい場所である。

３．「安全確保」…場所の確保だけでなく、活動には安全が伴う必要があり、そのためには予算確保も必要になってくる。

最後に、本事業が‘学校教育ではなく社会教育の場で実施されている’ことの意義を理解した上でのアプローチが求められると再確認された。

●分科会の展開

【ワーク１】自己の課題を整理し、全体で共有する

①自己の課題整理　②グループでの課題共有　③グループでの検討　④全体共有

⑤アドバイザーからの情報収集

↓

【ワーク２】課題解決のヒントを整理する

①グループで検討する課題を選択し、テーマを絞って話し合う　②全体共有　③アドバイザー整理

↓

【ワーク３】アクションプランを考える

本分科会では、開始前から参加者を3つのグループ（市町村教育委員会、都道府県教育委員会、教室関係者）に分けた。これにより、立場の近い参加者同士が話し合える環境となった。
下記は、ワーク1からワーク2－②までを表にまとめたものである。

	市町村教育委員会グループ	都道府県教育委員会グループ	教室関係者グループ
挙げられた課題	・学校主体の場合 →余裕教室がないため、候補として公民館なども考えられるが… ・公民館主体の場合 →他に移したくても「新規」の場所の検討が必要	・予算の確保 ・学校の理解不足 →事業そのものの理解促進、認知が必要である →事業について総論では賛成だが、各論になると反対の立場になる	・行政や学校への働きかけ →具体的な方法がわからない ・縦割り行政への不満 →部署横断的な展開が必要となる
アドバイザーからの情報提供	・地域力醸成プログラムにより、公民館の活性化を図る ・公民館は地域の問題を解決する場所であるから、‘放課後を地域課題の解決’として取り組む ・公民館が中心となって、「放課後子ども対策」が地域の課題という認識を広める	・安全管理に対する不安が、学校の不理解につながっていることがある ・校長が元社会教育主事など、トップ主導なら進めやすい ・結果が出れば、まわりの学校へも広がっていく ・まずは、校長先生の意識改革	・学校のトップ、校長の認識を理解する（校長が難しい場合、公民館などへアプローチ先を変える必要も） ・学校と地域が、お互いの理解を促進できるような検討の「場」があるか ・他事業と協議の場所を一緒にしてもいい ・子どもにとって学校内・外の線引きはない ・「子どものため」が「地域のため」となり、結局は「地域の活性化」につながる
課題解決策	・居場所づくり（待機児童などへの対応も含む） ・場所は実は、どこでもできる →ただし安全確保のためには予算確保がどうしても必要 **場所はもちろんだが、地域の理解があればできるのでは**	・学校の理解協力 →学校の負担も考えながら、理解を迫る ・地域力→地域団体との協力 ・放課後プランとの両立 **ビジョン、構想、見通しをもって広げていきたい**	・現場スタッフや子ども教室の活動を効果的に発信 →効果的な広報活動（広報の予算の確保も必要） ・良い例を具体的に見せ、校長先生に対して理解をせまる

最後にワーク3「アクションプランを考える」にて、各自が分科会で得た情報をふりかえり、次の自分の行動につなげる項目を整理した。それまでの時間で課題解決のための手法やヒントを得ていくつものアクションプランを記述する参加者、さらに話し合いを続ける参加者、交流を広げようとする参加者など、時間の過ごし方は参加者によってまちまちであったが、最後まで真剣に取り組む参加者の姿が見られた。

分科会④「プログラムの内容の充実について～量と質の両面から～」

アドバイザー：山形県教育委員会　教育やまがた振興課　社会教育専門員　白林 和夫　氏

【分科会の目的・目標】

量的な拡大から質的な拡大へ、プログラムの充実の方向性と具体的なプログラム事例や運営方法について考える

【挙げられた主な課題】

・プログラムにおいて、学習をどう位置づけるべきか？
・活動のマンネリ化にはどのように対応すべきか？
・子どもが自主的に参加し、楽しめるプログラムは
　どのような内容であるべきか？

【分科会のまとめ】

上記の課題に対する解決策検討の結果、主に下記のような意見が出された。

１．プログラムにおける「学習の位置づけ」…地方では特に保護者の学習支援へのニーズが高い。家庭学習を補うという意味で、学習への意欲や自主性を育む環境づくりに取り組むことが重要である。

２．活動の「マンネリ化解消」…他団体との連携、地域人材の活用、児童クラブ同士での情報、アイディア交換をより積極的に進めていく必要がある。同時にコーディネーターの負担軽減という観点から、行政からの情報、アイディアの提供が望まれる。

３．子どもが主体的に参加できる機会づくり…個々の子どもへの理解を深め、実態を把握するためにコーディネーター研修の期間を設ける必要性がある。様々な事情があるとどうしても大人視点に陥りやすいが、子どもの「こころ」に向き合い子ども視点で考えるという原点に立ち返ることも重要である。

●分科会の展開

【ワーク１】自己の課題を整理し、全体で共有する

①自己の課題整理　②グループでの課題共有　③グループでの検討　④全体共有
⑤アドバイザーからの情報収集

↓

【ワーク２】課題解決のヒントを整理する

①グループで検討する課題を選択し、テーマを絞って話し合う　②全体共有　③アドバイザー整理

↓

【ワーク３】アクションプランを考える

本分科会では、開始前から参加者を6つのグループに分けディスカッションを実施した。
下記はそれぞれの6つのグループから出た課題とその解決策を表にまとめたものである。

	Aグループ	Bグループ	Cグループ
主な議題	プログラムにおける学習の位置づけ	子どもが自主的に参加できるプログラム	活動のマンネリ化の解消
挙げられた主な課題	子どもたちは単純に「遊びの場」を求めていることも多い中、保護者からは「学習支援へのニーズ」が高い。どのようにバランスをとっていくべきか	「子どもの居場所づくり」という本来の目的に立ち返り、自由形のプログラムを訴求したい	限られた資源（ヒト・モノ・カネ）の中で、どうしても活動がマンネリ化してしまう
課題解決策	学習を強制するのではなく、子どもの自主性を最大限引き出すような「自由参加型」の学習プログラムをきっちりと提供することで、自然発生的に学習に取り組む子どもが多くなっていくのではないか	子どもの居場所が「地域」であることから、やはり地域のニーズや実態を考慮し、地域を巻き込んでいくことが必要である。それにより安全管理面の強化もしていくことができる	コーディネーターを含め、地域人材発掘が必要である。現場の人員配置、人材活用などを効果的に進めるためのマニュアルづくり、体制構築に取り組む必要がある
	Dグループ	Eグループ	Fグループ
主な議題	子どものこころ	活動のマンネリ化の解消	子ども教室に学習の場、学習プログラムは必要か
挙げられた主な課題	参加への経緯などそれぞれの子どもによって実態が異なる。個々の子どもにしっかりと向き合っていく必要がある	プログラムが大人視点になっていないか？充実したプログラムの基準をどこに置くべきか？マンネリ化を解消するためにプログラムの量を増やしたところで、子どもはあまりそれを望んでいないこともある	「学習」を表に出してしまうと子どもの自主性を奪ってしまうことがある。学習を習慣づける場としての環境づくりのために何をすべきか
課題解決策	子どもへの理解を深めるためのコーディネーター研修を設ける必要性がある。同時に研修をきっかけに地域とのつながり、話し合いの場を持つことも重要である	各教室運営の指針となるような行政からの情報提供、各教室の指導者へのアドバイスを行うような研修事業などを期待する。教室内では、あらたにプログラムを作るという視点ではなく、プログラムを見直すという視点からマンネリが解消できるのではないか	コーディネーターの負担軽減のために、行政からの活動メニュー、教材アイディアなどの提供が望まれる

参加者は皆時間ぎりぎりまで意見交換をし、それぞれの課題解決への糸口をつかもうと真剣な様子であった。一つひとつの課題に対する全ての解決策は、時間内では議論できなかったが、プログラムの「量」を得るためには「効果的な連携」、プログラムの「質」を得るためには「子ども視点で原点に立ち返り内容を見直す」という共通のキーワードが挙がったことにより、各教室での課題解決策への具体的な検討がさらに深まることが期待される。

アンケート集計

●実施日時　2009年11月24日（火）、11月25日（木）

●会場　文部科学省講堂/霞山会館

●参加者　24日（火）・・・164名 /25日（水）・・・92名

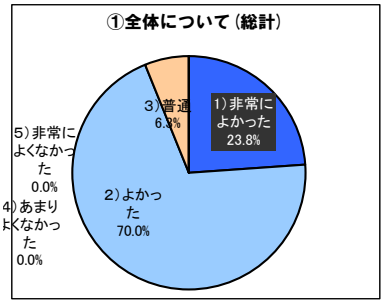
・回答者プロフィール

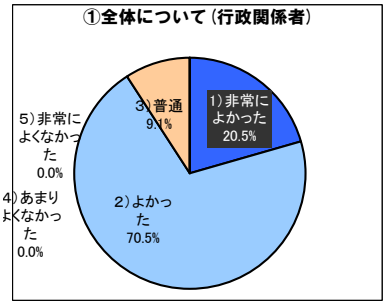
	人数	%
行政関係者	45	54.9%
教室関係者	26	31.7%
双方所属	1	1.2%
不明	10	12.2%
合計	82	100.0%

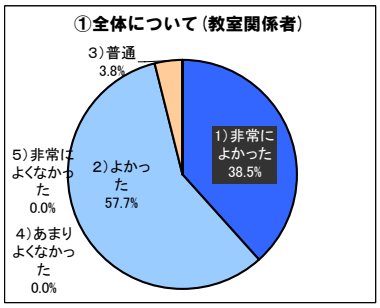
1．放課後子ども教室全国研究大会のプログラム内容はいかがでしたか？

①全国研究大会全体について

	行政関係者		教室関係者		双方所属		不明		総計	
	人	%	人	%	人	%	人	%	人	%
1）非常によかった	9	20.5%	10	38.5%	0	0.0%	0	0.0%	19	23.8%
2）よかった	31	70.5%	15	57.7%	0	0.0%	10	100.0%	56	70.0%
3）普通	4	9.1%	1	3.8%	0	0.0%	0	0.0%	5	6.3%
4）あまりよくなかった	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
5）非常によくなかった	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
総計	44	100.0%	26	100.0%	0	0.0%	10	100.0%	80	100.0%
無記入、欠席	1		0		1		0		2	







［自由記述件数］　（単位：人）

※複数回答あり	行政関係者	教室関係者	双方/行政教室以外	総計
事例や情報を聞けた	10	7	2	19
交流ができた	4	1	1	6
内容が充実	1	4	1	6
時間に関すること	2	1	0	3
よい機会だった	0	2	0	2
参考になった	1	1	0	2
講義や講演	0	1	0	1
その他	1	0	0	1

★上記①の設問に1）非常によかった、2）よかった　と回答された方の自由記述より

【行政関係者】

事例や情報を聞けた（10人　合計19件）

全国の自治体の状況、情報、課題を共有できた。
全国的ないろいろな情報を得ることができた。
放課後子ども教室の必要性、重要性が再認識できた。
それぞれの課題がわかった。
新しい情報が得られた。
全国の取り組みが聞けて大変良かった。
他の教室の内容がよくわかった。
他の自治体の活動を聞くことができた。
普段の事業推進のよりどころとなる話が聞けた。
様々な活動方法を他市ではやっているという実態がわかった。

交流ができた（4人　合計6件）

担当になって初年度のため、他県の方と「つながり」ができてよかった。
国、県、市の情報交換の場として利用できた。
今回の関係者と情報共有できた。
年1回はこうした情報の生の授受が必要。

時間に関すること（2人　合計3件）

各内容はよかったが内容が盛りだくさんで時間不足だった。
藤原さんの講演にもっと時間が欲しかった。

内容が充実（1人　合計6件）

都道府県単位での同様の研修会は、ほとんどがクラブとの併合で行われると思うが、その分内容も二極化・拡散しがち。教室単体の企画は良い。

参考になった（1人　合計2件）

この事業を多角的に見るためのヒントを頂きました。

その他（1人　合計1件）

全体的な進行にメリハリがあった。

【教室関係者】

事例や情報を聞けた（7人　合計19件）

いろいろな現場の声が聞けたこと。
いろんな問題点、その他のこともいろいろ共感できた。
子どもたちとの関わり方にはいろんな見方、考え方がある。
私の中で「こんな考え方があるんだ」「こんな工夫があるんだ」と、自分の思いの狭さを感じました。それに気づかせてくれた全国の大きさを知ることができました。
自分が行ってきた方法に納得する部分と、人と違っていて当たり前という基調講演の内容にも納得させられました。
他の校区の取り組みが見えてきた。
普段会えない方や貴重なお話が聞けた。

内容が充実（4人　合計6件）

ハイレベルな研修、分科会だった。
全体にすばらしかったです。 短時間で充実していた。
基調講演、事業説明、事例紹介、勉強したい所がプログラムに入っていた。

よい機会だった（2人　合計2件）

今後の自分たちの活動への意欲が湧いた。
全国大会にふさわしい取り組みがなされた。

交流ができた（1人　合計6件）

課題はそれぞれに異なるが、お互いに意見交換することで違いや共通のことがわかるのがよい。

時間に関すること（1人　合計3件）

少し長く感じた。

参考になった（1人　合計2件）

全国レベルの研修に参加させて頂き大変よい勉強になりました。

講義や講演（1人　合計1件）

講演会で参考になった話が聞けた。

【双方所属・その他の所属】

事例や情報を聞けた（2人　合計19件）

他県、他市の現状を聞くことができた。
他自治体での取り組み状況を知ることができて参考になった。

交流ができた（1人　合計6件）

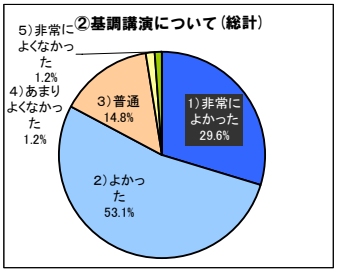
全国のいろいろな方と情報交換ができた。

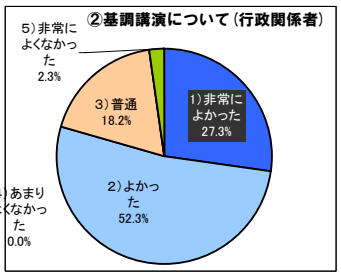
内容が充実（1人　合計6件）

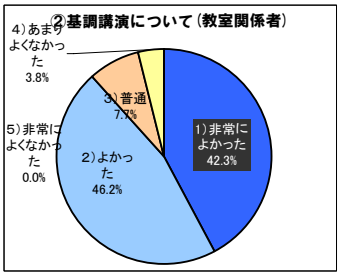
もりだくさんの内容で刺激になった。

②基調講演について

	行政関係者		教室関係者		双方所属		不明		総計	
	人	%	人	%	人	%	人	%	人	%
1）非常によかった	12	27.3%	11	42.3%	0	0.0%	1	10.0%	24	29.6%
2）よかった	23	52.3%	12	46.2%	0	0.0%	8	80.0%	43	53.1%
3）普通	8	18.2%	2	7.7%	1	100.0%	1	10.0%	12	14.8%
4）あまりよくなかった	0	0.0%	1	3.8%	0	0.0%	0	0.0%	1	1.2%
5）非常によくなかった	1	2.3%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	1	1.2%
総計	44	100.0%	26	100.0%	1	100.0%	10	100.0%	81	100.0%
無記入、欠席	1		0		0		0		1	







［自由記述件数］　（単位：人）

	行政関係者	教室関係者	双方/行政教室以外	総計
事業の役割がわかった・つながり	6	2	4	12
わかりやすい	4	3	1	8
具体的	1	2	0	3
講義スタイルについて	2	0	1	3
参考になった	1	2	0	3
要望	2	1	0	3
時間が短い	2	0	0	2
その他	1	0	0	1

★上記②の設問に1）非常によかった、2）よかった　と回答された方の自由記述より

【行政関係者】

事業の役割がわかった・つながり（6人　合計12件）

地域人材に対して放課後子ども教室がどう生き甲斐につながるのか、日頃から意味づけを考えていたので大変考えが深まった。
非常にやりがいのある事業だと思った。
放課後こども教室の役割を改めて認識できた。
つながることの重要性を感じることができた。
基本に立ちかえることができました。
社会教育という視点について非常に大切だと感じた。

わかりやすい（4人　合計8件）

とてもわかりやすく、地域の方へ話をするときにも役立つ話だった。
人材の育成、研修等、全ての面で参考になる内容をわかりやすく説明頂いた。
わかりやすい内容だった。
話が途中までしかできなかったような印象だったが、とてもわかりやすい話だった。

具体的（1人　合計3件）

具体的な話だった。

参考になった（1人　合計3件）

身近なテーマで放課後子ども教室に関わるボランティアの育成のヒントになった。

要望（1人　合計2件）

放課後子どもプラン推進アドバイザーとしてお願いできればと考えている。

【教室関係者】

わかりやすい（3人　合計8件）

大変わかりやすく楽しい講演でした。
わかりやすく自分自身を見つめ直すことができた。
話も面白くして頂けてわかりやすかった。

事業の役割がわかった・つながり（2人　合計12件）

「つなぎ」の意味感じました。
放課後子ども教室の人材育成はつながりがキーポイントである。

具体的（2人　合計3件）

具体的で体系的
いろいろな現場の声が聞けたこと。

参考になった（2人　合計3件）

自分たちの子ども教室を盛り上げるためのヒントを得た。
地方では聞くことができない講演でした。

【双方所属・その他の所属】

事業の役割がわかった・つながり（2人　合計12件）

地域との関わりについて整理できた。
社会の中の人間関係の持ち方、またその位置づけについて興味深く聞けた。

わかりやすい（1人　合計8件）

非常にわかりやすかった。

★上記②の設問に3）普通　と回答された方の自由記述より

【行政関係者】

時間が短い（2人　合計2件）

急ぎ足の講演でポイントがつかめなかった。
時間が足りなかった。

要望（1人　合計2件）

何かしかけのようなお話がほしかった。

【双方所属・その他の所属】

事業の役割がわかった・つながり（2人　合計12件）

人とのつながりの根本を理論的に学習できた。
甲斐=他人とのつながり など、なるほどと思わされる話だった。

講義スタイルについて（1人　合計3件）

タイトルとはややずれを感じた。

★上記②の設問に4）あまりよくなかった、5）非常によくなかった　と回答された方の自由記述より

【行政関係者】

講義スタイルについて（2人　合計3件）

今般はテーマのピントとボリュームが不適。
私も講演会の企画をするが、どのような講師であれ、必ず事前に打ち合わせ、演習さえ行う。時間配分や内容も丸投げとはしない。

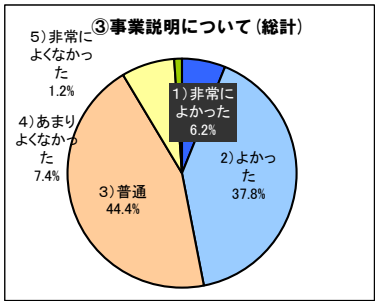
【教室関係者】

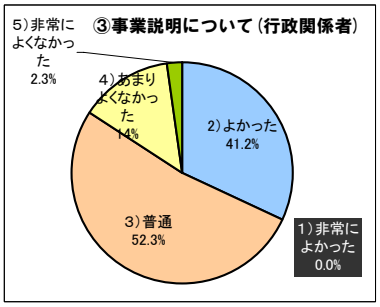
要望（1人　合計3件）

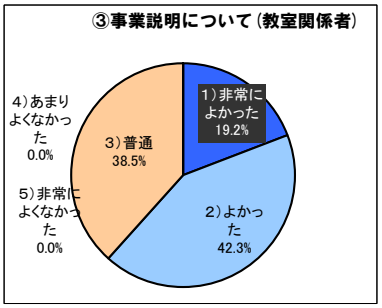
具体的事例に基づく具体的な育成、研修の方法（ありかた）を期待していたから。

③ 事業説明について

	行政関係者		教室関係者		双方所属		不明		総計	
	人	%	人	%	人	%	人	%	人	%
1）非常によかった	0	0.0%	5	19.2%	0	0.0%	0	0.0%	5	6.2%
2）よかった	14	31.8%	11	42.3%	1	100.0%	7	70.0%	33	40.7%
3）普通	23	52.3%	10	38.5%	0	0.0%	3	30.0%	36	44.4%
4）あまりよくなかった	6	13.6%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	6	7.4%
5）非常によくなかった	1	2.3%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	1	1.2%
総計	44	100.0%	26	100.0%	1	100.0%	10	100.0%	81	100.0%
無記入、欠席	1		0		0		0		1	







［自由記述件数］　（単位：人）

	行政関係者	教室関係者	双方/行政教室以外	総計
要望	8	2	1	11
説明は不要・既に知っている情報だった	7	2	0	9
実態がわかった	3	2	2	7
わかりやすかった	1	1	0	2
意欲	0	1	0	1
参考になった	1	0	0	1

★上記③の設問に1）非常によかった、2）よかった　と回答された方の自由記述より

【行政関係者】

実態がわかった（2人　合計7件）

改めて～地域子ども教室～放課後子ども教室になったまでの経過を伺うことができた。
実態がよく理解できた。

要望（1人　合計11件）

次年度においても予算案が先日送られてきた。キャリア教育も含まれたリーフレットの説明も聞けたら良かったと思います。

わかりやすかった（1人　合計2件）

わかりやすかった

参考になった（1人　合計1件）

県の説明会のヒントを得た。

【教室関係者】

実態がわかった（2人　合計7件）

全国的な把握、理解ができた。
事業説明で、政府の事業仕分けの対象ではと心配していたが、安心して事業が進められます。

意欲（1人　合計1件）

自分たちの子ども教室の新たな運営方法、目標が見えてきた。

【双方所属・その他の所属】

実態がわかった（2人　合計7件）

教室の全体像がわかった。
事業仕分けの話、平成22年度以降の情報が得られてよかった。

★上記③の設問に3）普通　と回答された方の自由記述より

【行政関係者】

要望（4人　合計11件）

データは貴重な情報でよかったが、現在の関心事は22年度予算だったので。
今後の取り組み、国の方針、補助の動向、現状等の説明がなかった。
事業化分で今後どうなるのか、自治体に早急なる情報の開示を。
来年度の状況についての説明を含めて行うべきだった。

説明は不要・既に知っている情報だった（3人　合計9件）

既に知っている情報ばかりだった。
経過の説明にとどまっていた。
資料説明なので不要では？

実態がわかった（1人　合計7件）

現在の状況を知ることができた。

【教室関係者】

要望（2人　合計11件）

来年度の取り組みを具体化してほしかった。
22年度以降、今後どうなるか、現在の段階での見直しを話して頂きたかった。

説明は不要・既に知っている情報だった（2人　合計9件）

書類だけでもよかったと思う。
説明が「普通」といった感じでした。工夫が必要。

わかりやすかった（1人　合計2件）

現在の状況を知ることができた。

【双方所属・その他の所属】

要望（1人　合計11件）

今後の方向性がもう少し知りたかった。

★上記③の設問に4）あまりよくなかった、5）非常によくなかった　と回答された方の自由記述より

【行政関係者】

説明は不要・既に知っている情報だった（4人　合計9件）

資料で充分
事業主旨の説明は不要だった。
単なる説明にもなっていない。
放課後子ども教室に携わっている者に対して、事業内容については必要ない。

要望（3人　合計11件）

これからの見通しなどの話が聞きたかった。
これからの見通し等が出されていなかった。
文科省と厚労省の一体化に向けての今後の動きや、今後の補助金等について本質的なものについての話を聞きたかった。

★上記③の設問に無記入　と回答された方の自由記述より

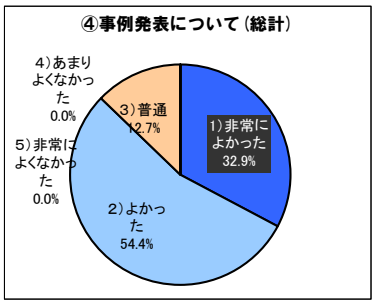
【行政関係者】

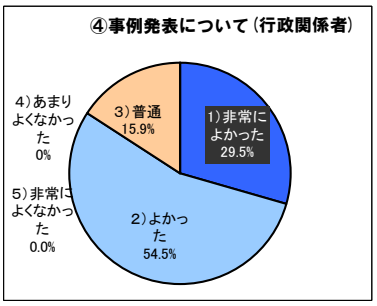
要望（1人　合計11件）

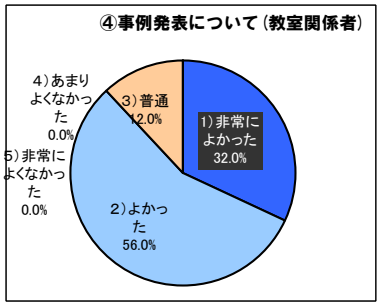
来年度の状況についての説明を含めて行うべきだった。

④ 事例発表について

	行政関係者		教室関係者		双方所属		不明		総計	
	人	%	人	%	人	%	人	%	人	%
1）非常によかった	13	29.5%	8	32.0%	1	100.0%	4	44.4%	26	32.9%
2）よかった	24	54.5%	14	56.0%	0	0.0%	5	55.6%	43	54.4%
3）普通	7	15.9%	3	12.0%	0	0.0%	0	0.0%	10	12.7%
4）あまりよくなかった	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
5）非常によくなかった	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
総計	44	100.0%	25	100.0%	1	100.0%	9	100.0%	79	100.0%
無記入、欠席	1		1		0		1		3	







［自由記述件数］　　（単位：人）

	行政関係者	教室関係者	双方/行政教室以外	総計
参考になった	10	7	4	21
特定の事例について	6	5	1	12
具体的でよかった	1	1	1	3
その他	2	0	1	3
認識	1	1	0	2
要望	2	0	0	2
活用したい	0	1	0	1

★上記④の設問に1）非常によかった、2）よかった　と回答された方の自由記述より

【行政関係者】

参考になった（9人　合計21件）

各市の事例を聞くことができて参考になった。
これは大変よかった。
全国の特色ある事例は本県の教室の推進にいかせる。
山間部、市、大都市と3種類の例が学習できてよかった。
自分の地域でも活用できそうな事例もあり、大変参考になった。
先進的、模範的事例だった。
様々な取り組みを教えてもらった。
各地の事例、勉強になりました。取り入れられることから一歩ずつ。
各地の実際がよくわかった。

特定の事例について（5人　合計12件）

教育支援協会の調査研究が非常に興味深かった。
宝塚市の取り組みは大変参考になりました。
宝塚市→子どもたちの本来持っている遊びの力を十分発揮できる取り組みが紹介されていた。
宝塚市の取り組み、考え等が参考とすべき点が多かった。
特に宝塚市の事例が住民主体の動きがよくわかって参考になった。

認識（1人　合計2件）

子どもの自主性の育成等について再認識させられた。

要望（1人　合計2件）

もう少し時間を多く割き、詳しく聞きたかった。

具体的でよかった（1人　合計3件）

具体的でかつ方針や主旨が明確な事例ばかりでとてもよかった。

その他（2人　合計3件）

立ちあげの際に必要があるから立ち上げた結果、うまくいっている。
熱い思いを伝えることの大切さを感じた。

【教室関係者】

参考になった（7人　合計21件）

大変参考になった。
全部ではないが参考になった事例も聞けた。
たくさんのアイデアを思いつくことができました。
優れた実践の実態とその方法を知ることができた。
内容が充実している。
各地でいろいろ実施されていることがよく理解することができた。
他の学校の状態をとてもわかりやすく見れた。

特定の事例について（5人　合計12件）

加計小→午後6時まで実施。学校の理解がないとできない。
仁川小→遊ぼう会、子どもたちは塾、部活と多忙の中、子どもの遊ぶ場を作ったのはすごい。
教育支援協会→子ども教室のノウハウを学びたい。
現場の実践報告は参考になるが、NPO等の話はあまり理屈っぽくて参考にならない。
教育支援協会の事例が参考になりました。

具体的でよかった（1人　合計3件）

具体的なことなのでよかった。

認識（1人　合計2件）

自由、指定の二運営方式

活用したい（1人　合計1件）

いろんな方向を教えて頂いた。地元でできないか考えていきたい。

【双方所属・その他の所属】

参考になった（4人　合計21件）

それぞれの特色が出ていて参考になった。
3つの事情が異なる教室からヒントをたくさん頂きました。
本県の教室、運営方法におおいに参考になった。
いろいろな事業の取り組み方があり興味深い。

特定の事例について（1人　合計12件）

仁川市遊ぼう屋の取り組みが参考になった。

具体的でよかった（1人　合計3件）

具体的な取り組みが聞けた。

その他（2人　合計3件）

いろいろな地域の紹介

★上記③の設問に3）普通　と回答された方の自由記述より

【行政関係者】

参考になった（1人　合計21件）

それぞれの立場で取り組んでいる事例がわかった。

特定の事例について（1人　合計12件）

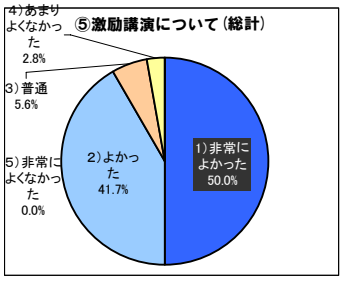
NPOの方の発言の中に、人権意識について改めて考えさせられた部分があった。

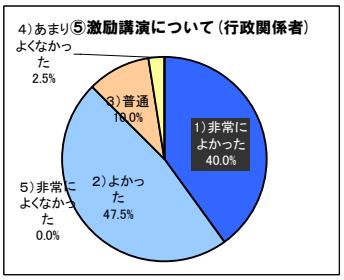
要望（1人　合計2件）

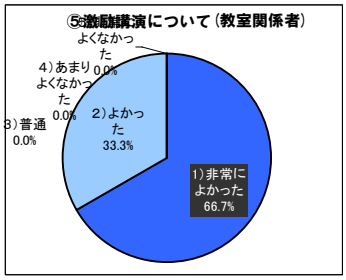
2つでよい

⑤ 激励講演について

	行政関係者		教室関係者		双方所属		不明		総計	
	人	%	人	%	人	%	人	%	人	%
1）非常によかった	16	40.0%	14	66.7%	1	100.0%	5	50.0%	36	50.0%
2）よかった	19	47.5%	7	33.3%	0	0.0%	4	40.0%	30	41.7%
3）普通	4	10.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	4	5.6%
4）あまりよくなかった	1	2.5%	0	0.0%	0	0.0%	1	10.0%	2	2.8%
5）非常によくなかった	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
総計	40	100.0%	21	100.0%	1	100.0%	10	100.0%	72	100.0%
無記入、欠席	0		3		0		0		3	







［自由記述件数］　（単位：人）

	行政関係者	教室関係者	双方/行政教室以外	総計
もう少し聞きたい・時間が短い	8	2	2	12
わかりやすい・ためになった	5	3	1	9
元気をもらった・パワフル	4	3	2	9
印象に残った内容	1	1	1	3
その他	0	0	1	1
疑問	1	0	0	1

★上記⑤の設問に1）非常によかった、2）よかった　と回答された方の自由記述より

【行政関係者】

もう少し聞きたい・時間が短い（5人　合計12件）

時間の関係もありますが、もう少し聞きたかったです。
もっと時間をとってほしかった。
話の内容は面白く、非常に参考になったが時間が短かった。
時間的に短かった。
もっとゆっくり話を聞きたかった。

わかりやすい・ためになった（5人　合計9件）

ポイントをわかりやすく話して頂いて理解できました。
具体的なプログラムと今後の目的について理解できた。
学校へのアプローチ等の手法や、開かれた学校について示唆を与えてくださった。
具体的な課題、解消等、コンパクトにまとめて説明頂いた。
わかりやすく理解することができた。

元気をもらった・パワフル（4人　合計9件）

大変パワフルでわかりやすかった。
元気が出ました。必要性についての思いが強くなりました。
激励公演の通り、エネルギーをもらったような気がする。
元気が出る内容だった。

印象に残った内容（1人　合計3件）

事業仕分けに実際に参加されたこと、和田中学校の事例を聞くことができた。

【教室関係者】

わかりやすい・ためになった（3人　合計9件）

2度目でしたが、あと3回は聞けるというくらいためになります。
考え方も新しく、ぜひ取り入れていきたいと考えています。
短い時間でしたが、とても素晴らしい講演が聞けたと思います。

元気をもらった・パワフル（3人　合計9件）

大変力を頂きました。
パワーを頂きました。
パワーを感じた。頑張ろうと思った。

もう少し聞きたい・時間が短い（2人　合計12件）

時間が少ない。
時間がなかったのが残念。

印象に残った内容（1人　合計3件）

学校と地域の交流の方法がよくわかりました。

【双方所属・その他の所属】

元気をもらった・パワフル（2人　合計9件）

何回聞いても藤原氏の話は励まされます。
話の勢いがあり内容も濃かった。

わかりやすい・ためになった（3人　合計9件）

短時間ではあったが十分理解できた。

もう少し聞きたい・時間が短い（1人　合計12件）

内容がよかったので、できればもう少し時間をとって聞きたかった。

印象に残った内容（1人　合計3件）

図書室の取り組みから展開される事例が大変興味深かった。

その他（1人　合計1件）

学校の教員にぜひ聞いてもらいたい内容である。

★上記⑤の設問に3）普通　と回答された方の自由記述より

【行政関係者】

もう少し聞きたい・時間が短い（2人　合計12件）

もう少し詳しく聞きたかった。
時間が短い。30分の枠に無理して詰め込んだという印象。

疑問（1人　合計1件）

図書室の改造は廃棄？開架、閉架という方式もある。ルターやナチの焚書みたい。

★上記⑤の設問に4）あまりよくなかった と回答された方の自由記述より

【行政関係者】

もう少し聞きたい・時間が短い（1人　合計12件）

先生の部会で今回は仕方がないと思うが、時間がなく、駆け足の講演。もったいなかった。

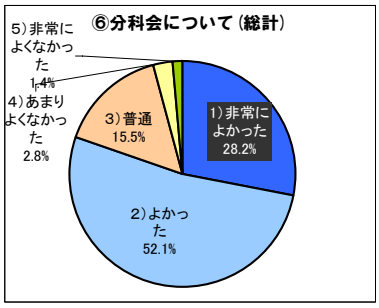
【双方所属・その他の所属】

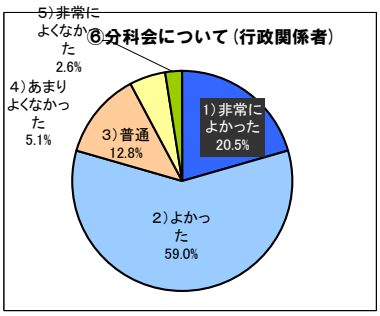
もう少し聞きたい・時間が短い（1人　合計12件）

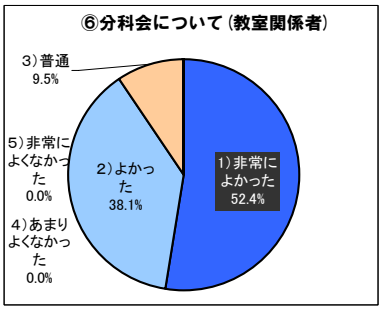
お忙しい方なので仕方ないとは思いますが、時間不足。

⑥ 分科会について

	行政関係者		教室関係者		双方所属		不明		総計	
	人	%	人	%	人	%	人	%	人	%
1）非常によかった	8	20.5%	11	52.4%	0	0.0%	1	10.0%	20	28.2%
2）よかった	23	59.0%	8	38.1%	1	100.0%	5	50.0%	37	52.1%
3）普通	5	12.8%	2	9.5%	0	0.0%	4	40.0%	11	15.5%
4）あまりよくなかった	2	5.1%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	2	2.8%
5）非常によくなかった	1	2.6%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	1	1.4%
総計	39	100.0%	21	100.0%	1	100.0%	10	100.0%	71	100.0%
無記入、欠席	1		3		0		0		4	





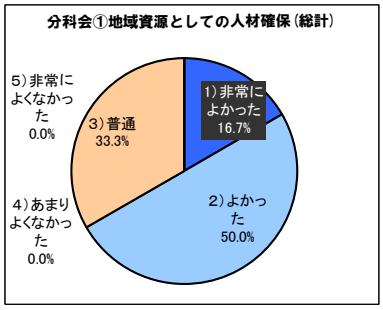


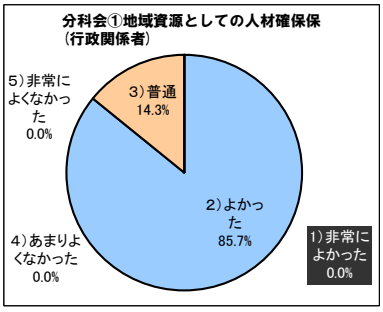
	行政関係者		教室関係者		双方所属		不明		総計	
講義タイトル	人	%	人	%	人	%	人	%	人	%
分科会① 地域資源としての人材確保について	7	21.9%	4	23.5%	0	0.0%	1	12.5%	12	20.7%
分科会② 人材の育成について	11	34.4%	2	11.8%	0	0.0%	0	0.0%	13	22.4%
分科会③ 活動場所の確保について	3	9.4%	4	23.5%	0	0.0%	4	50.0%	11	19.0%
分科会④ プログラムの充実について	11	34.4%	7	41.2%	1	100.0%	3	37.5%	22	37.9%
総計	32	100.0%	17	100.0%	1	100.0%	8	100.0%	58	100.0%
無記入、欠席	8		7		0		2		17	

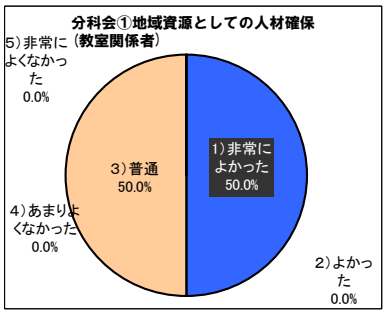
1．プログラム内容の満足度 ⑥分科会について

●分科会① 地域資源としての人材確保について

	行政関係者		教室関係者		双方所属		不明		総計	
	人	%	人	%	人	%	人	%	人	%
1）非常によかった	0	0.0%	2	50.0%	0	0.0%	0	0.0%	2	16.7%
2）よかった	6	85.7%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	6	50.0%
3）普通	1	14.3%	2	50.0%	0	0.0%	1	100.0%	4	33.3%
4）あまりよくなかった	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
5）非常によくなかった	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
総計	7	100.0%	4	100.0%	0	0.0%	1	100.0%	12	100.0%
無記入、欠席	0		0		0		0		0	

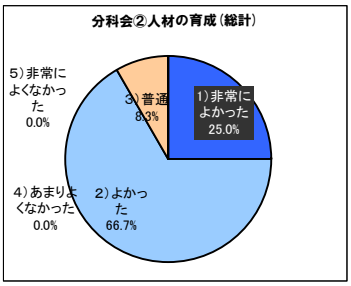


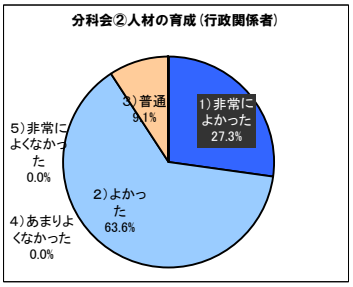


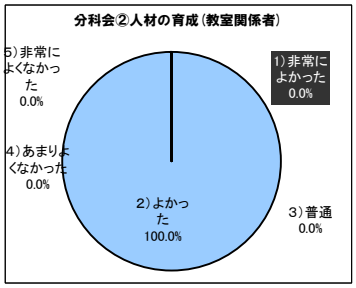


●分科会②　人材の育成について

	行政関係者		教室関係者		双方所属		不明		総計	
	人	%	人	%	人	%	人	%	人	%
1）非常によかった	3	27.3%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	3	25.0%
2）よかった	7	63.6%	1	100.0%	0	0.0%	0	0.0%	8	66.7%
3）普通	1	9.1%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	1	8.3%
4）あまりよくなかった	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
5）非常によくなかった	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
総計	11	100.0%	1	100.0%	0	0.0%	0	0.0%	12	100.0%
無記入、欠席	0		1		0		0		1	

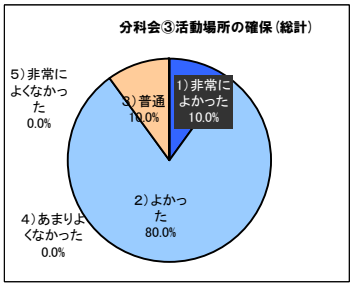


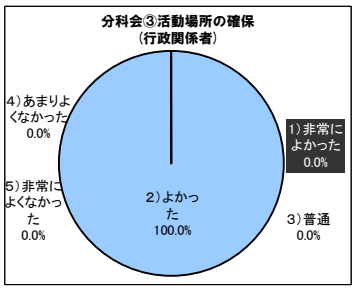


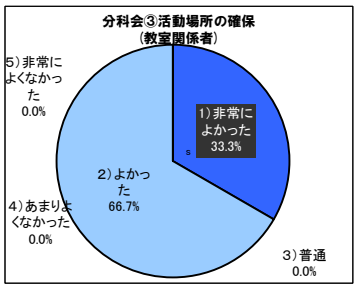


●分科会③　活動場所の確保について

	行政関係者		教室関係者		双方所属		不明		総計	
	人	%	人	%	人	%	人	%	人	%
1）非常によかった	0	0.0%	1	33.3%	0	0.0%	0	0.0%	1	10.0%
2）よかった	3	100.0%	2	66.7%	0	0.0%	3	75.0%	8	80.0%
3）普通	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	1	25.0%	1	10.0%
4）あまりよくなかった	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
5）非常によくなかった	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
総計	3	100.0%	3	100.0%	0	0.0%	4	100.0%	10	100.0%
無記入、欠席	0		1		0		0		1	

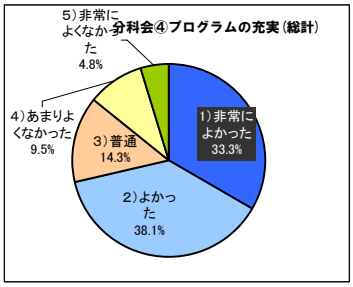


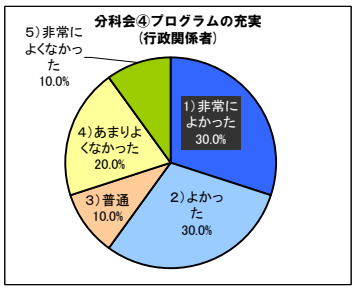


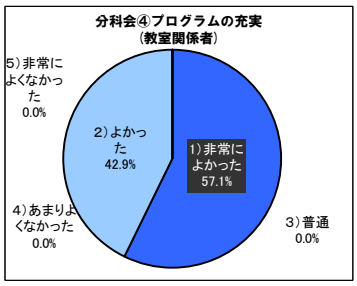


●分科会④　プログラムの充実について

	行政関係者		教室関係者		双方所属		不明		総計	
	人	%	人	%	人	%	人	%	人	%
1）非常によかった	3	30.0%	4	57.1%	0	0.0%	0	0.0%	7	33.3%
2）よかった	3	30.0%	3	42.9%	1	100.0%	1	33.3%	8	38.1%
3）普通	1	10.0%	0	0.0%	0	0.0%	2	66.7%	3	14.3%
4）あまりよくなかった	2	20.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	2	9.5%
5）非常によくなかった	1	10.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	1	4.8%
総計	10	100.0%	7	100.0%	1	100.0%	3	100.0%	21	100.0%
無記入、欠席	1		0		0		0		1	







●分科会①　地域資源としての人材確保について

［自由記述件数］　（単位：人）

	行政関係者	教室関係者	双方/行政教室以外	総計
情報が聞けた	3	1	0	4
意見交換できた	2	1	0	3
時間不足	2	1	0	3
要望	1	0	0	1
参考になった	0	0	1	1

★上記分科会①の設問に１)非常によかった、２)よかった　と回答された方の自由記述より

【行政関係者】

情報が聞けた（2人　合計4件）

他地区の情報が聞けてよかった。
様々な情報を得ることができた。

意見交換できた（2人　合計3件）

違う立場、地域の方と意見交換して課題の共有ができた。
じっくり話せた。

時間不足（2人　合計3件）

内容はよいが時間が足りない。
時間が短かった。

【教室関係者】

情報が聞けた（1人　合計4件）

いろいろな問題について他県のコーディネーターのお話が聞けた。

意見交換できた（1人　合計3件）

意見交換ができてとてもよかった。

【双方所属・その他の所属】

参考になった（1人　合計1件）

生重さんの話がとても参考になった。

★上記分科会①の設問に３)普通　と回答された方の自由記述より

【行政関係者】

情報が聞けた（1人　合計4件）

他市町村の取り組み、県レベルの考え等を聞けたことは参考になった。

要望（1人　合計1件）

県、市町村の現状等にあわせたグループ分けも必要ではなかったか。

【教室関係者】

時間不足（1人　合計3件）

時間がこまぎれのようで話し合いがしにくかった。

●分科会②　人材の育成について

［自由記述件数］　（単位：人）

	行政関係者	教室関係者	双方/行政教室以外	総計
意見交換できた	2	0	0	2
時間不足	2	0	0	2
情報が聞けた	1	0	0	1

★上記分科会②の設問に１)非常によかった、２)よかった　と回答された方の自由記述より

【行政関係者】

意見交換できた（2人　合計2件）

具体的な解決方法について話し合うと共に他の班の意見や考えも聞けて良かった。
他の人と話して共通理解、情報交換ができてよかった。

時間不足（2人　合計3件）

時間が短かった。
有意義な話し合いができたが、時間が短い。

情報が聞けた（1人　合計1件）

忙しかったが生の声が聞けて良かった。

●分科会③　活動場所の確保について

［自由記述件数］　（単位：人）

	行政関係者	教室関係者	双方/行政教室以外	総計
情報が聞けた	2	0	2	4
参考になった	1	1	0	2
時間不足	0	0	1	1
その他	1	0	0	1

★上記分科会③の設問に1）非常によかった、2）よかった　と回答された方の自由記述より

【行政関係者】

情報が聞けた（2人　合計4件）

各地の悩みを聞くことができた。
お互いの悩み等を聞けてよかった。

参考になった（1人　合計2件）

結論はよく見えなかったが目的意識を持てた。

その他（1人　合計1件）

市によって状況が違う。

【教室関係者】

参考になった（1人　合計2件）

力強いメッセージで現場での活動の参考に大変役立った。

【双方所属・その他の所属】

情報が聞けた（2人　合計4件）

各県の状況が聞けたこと。
課題が共有できた。

参考になった（1人　合計1件）

もう少し全体で協議する時間がほしかった。

●分科会④　プログラムの充実について

［自由記述件数］　（単位：人）

	行政関係者	教室関係者	双方/行政教室以外	総計
進行スタイルについて	7	0	1	8
情報が聞けた	1	3	0	4
時間不足	3	0	1	4
要望	2	0	1	3
意見交換できた	2	1	0	3
その他	2	0	0	2

★上記分科会④の設問に1）非常によかった、2）よかった　と回答された方の自由記述より

【行政関係者】

意見交換できた（2人　合計3件）

グループで話ができて、同じブロックの人同志だったので、深まりができてつながりもできた。
少人数で具体的な課題について本音で話し合えるから。

情報が聞けた（1人　合計4件）

関係者のいろいろな情報を聞くことができて今後に生かせる。

その他（1人　合計2件）

まとまりが悪く、あまり成果は感じられなかった。

【教室関係者】

情報が聞けた（1人　合計3件）

各場所で展開されている子ども教室の実例、悩みがあり、参考になりました。
いろいろな方々の生の意見、アドバイスを聞けてよかったです。
各地域の話が聞けてとても楽しく有意義でした。

意見交換できた（2人　合計3件）

具体的な内容まで入ってお話できてよかった。

【双方所属・その他の所属】

要望（1人　合計3件）

もう少し課題ありきではなく、各地の良いポイントなどを話し合いたかった。

★上記分科会④の設問に3）普通　と回答された方の自由記述より

【行政関係者】

時間不足（1人　合計4件）

時間が短い

【双方所属・その他の所属】

進行スタイルについて（1人　合計8件）

具体的な解決策を提示される場ではなかったのがやや残念。

時間不足（1人　合計4件）

短時間の中で多くのテーマ設定があるので、時間が足りなかった。

★上記分科会④の設問に4）あまりよくなかった、5）非常によくなかった　と回答された方の自由記述より

【行政関係者】

進行スタイルについて（3人　合計8件）

ファシリテーターがマイクを使って、1分、2分、もう少しファジーな運営が必要である。
KJ法ではなく、KJ法的な流れに工夫すべき。
時間が足りなければ運営に工夫。

時間不足（1人　合計4件）

時間が不十分

その他（1人　合計2件）

ワークショップは不要

★上記分科会④の設問に無記入　と回答された方の自由記述より

進行スタイルについて（4人　合計8件）

事前に課題や解決等についてとりまとめておけば短時間でも濃密な情報交換ができたのでは。
KJ法では評価が大事。
パワーポイントでの板書は聴講者が話に集中しなくなります。各自のメモが一番です。
同時タイピングは難しくて要経験。

要望（2人　合計3件）

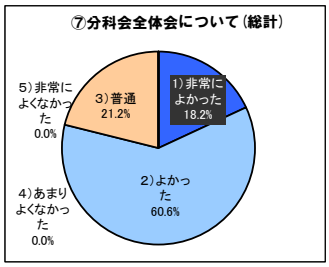
白林様はプログラムとカリキュラムが混同されているのでは。課程、科目を整理してお話して頂きたかった。
進行者、アドバイザーの氏名はちゃんと憶えてほしい。

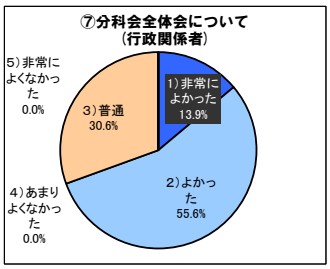
時間不足（1人　合計4件）

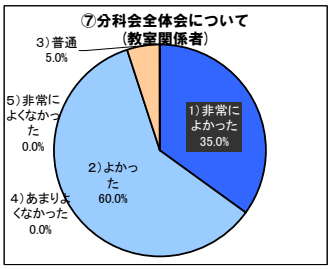
時間が短すぎる。

⑦ 分科会全体会について

	行政関係者		教室関係者		双方所属		不明		総計	
	人	%	人	%	人	%	人	%	人	%
1)非常によかった	5	13.9%	7	35.0%	0	0.0%	0	0.0%	12	18.2%
2)よかった	20	55.6%	12	60.0%	0	0.0%	8	88.9%	40	60.6%
3)普通	11	30.6%	1	5.0%	1	100.0%	1	11.1%	14	21.2%
4)あまりよくなかった	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
5)非常によくなかった	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
総計	36	100.0%	20	100.0%	1	100.0%	9	100.0%	66	100.0%
無記入、欠席	4		4		0		1		9	







［自由記述件数］ （単位：人）

	行政関係者	教室関係者	双方/行政教室以外	総計
他の分科会の情報を聞けた	4	4	2	10
進行スタイルについて	2	0	1	3
参考になった	1	1	0	2
時間不足	2	0	0	2
要望	1	1	0	2
交流できた	0	1	0	1

★上記⑦の設問に１)非常によかった、２)よかった と回答された方の自由記述より

【行政関係者】

他の分科会の情報を聞けた（4人 合計10件）

他の分科会で議論されたことを共有でき、共感できた。
他の分科会の内容を聞くことができた。
全体を把握でき、また運営について参考になった。
アドバイザーの方が大変よくまとめ、発表してくれたので他のグループの話し合い内容も理解できた。

進行スタイルについて（1人 合計3件）

アドバイザーの個人見解がやや多かったかも。

参考になった（1人 合計2件）

どのテーマも重要であり参考になった。

時間不足（1人 合計2件）

内容はよいが時間が足りない。

【教室関係者】

他の分科会の情報を聞けた（4人 合計10件）

他グループの意見を知り、子ども教室のありかたが全体で見え、共通理解できてよかった。
全体の結果がわかりよかった。
他の分科会のこともよく理解できた。
いろいろな方々の生の意見、アドバイスを聞けてよかった。

参考になった（1人 合計2件）

問題点などがよくわかった。

要望（1人 合計2件）

できればもっと現場のコーディネーター、安全管理員等の参加が良いと思います。各市町村の現場も盛り上がるのでは？

交流できた（1人 合計1件）

本来の自分の悩みなど、話ができた。

【双方所属・その他の所属】

他の分科会の情報を聞けた（2人 合計10件）

他の分科会においての内容が聞けたこと。
他の分科会の内容を伺うことができた。

進行スタイルについて（1人　合計3件）

司会の方のまとめ、スクリーンの提示がわかりやすかった。

★上記⑦の設問に3）普通　と回答された方の自由記述より

【行政関係者】

進行スタイルについて（1人　合計3件）

メモを取るのに忙しく話を十分聞けなかった。

時間不足（1人　合計2件）

時間が少なかった。

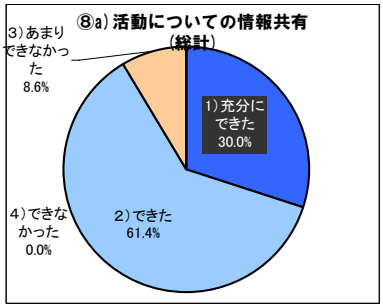
要望（1人　合計2件）

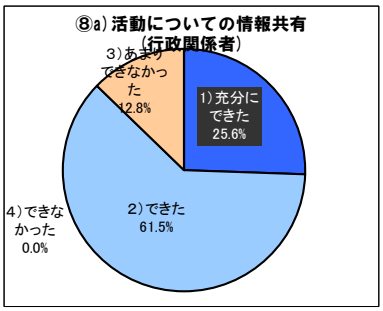
画面に表示したまとめを持ち出して配布してほしい。

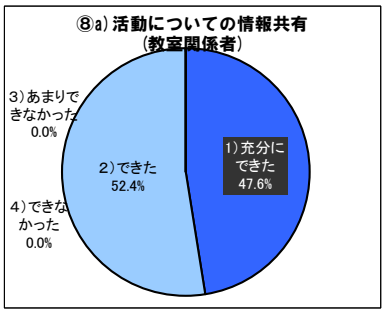
⑧ プログラム全体を通しての研究大会の成果について

a) 放課後子ども教室の活動についての情報共有（事例紹介、分科会）について

	行政関係者		教室関係者		双方所属		不明		総計	
	人	%	人	%	人	%	人	%	人	%
1）充分にできた	10	25.6%	10	47.6%	0	0.0%	1	11.1%	21	30.0%
2）できた	24	61.5%	11	52.4%	1	100.0%	7	77.8%	43	61.4%
3）あまりできなかった	5	12.8%	0	0.0%	0	0.0%	1	11.1%	6	8.6%
4）できなかった	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
総計	39	100.0%	21	100.0%	1	100.0%	9	100.0%	70	100.0%
無記入、欠席	1		3		0		1		5	







［自由記述件数］　　（単位：人）

	行政関係者	教室関係者	双方/行政教室以外	総計
情報を聞けた	4	1	2	7
時間不足	4	0	2	6
意欲	1	2	0	3
要望	2	0	0	2
交流できた	1	0	0	1
現状	0	1	0	1

★上記⑧aの設問に1）充分にできた、2）できた　と回答された方の自由記述より

【行政関係者】

情報を聞けた（4人　合計7件）

多くの情報を頂き感謝します。
共有まではいかないが収集できて参考になった。
子ども教室ほど校区によって異なる事業はないので、情報共有の意味は大きい。
新しい情報を得ることができた。

時間不足（2人　合計6件）

検討の場を持ったことはよいが、もう少し時間をかけたい。
分科会の時間が足りない。

要望（2人　合計2件）

参加者名簿があれば良いと思ったが無理ですか。
課題はいろいろあろうが、市町村としては児童クラブ（学童）との一体化、連携などが一番なのではないかと思う。できていない自治体にとっては連携、一体化して取り組んでいる自治体の例など、厚労省と連携しながら本研修会もすすめて欲しいと思う。

意欲（1人　合計3件）

これから企画する講座にも有益でした。得た情報、知識、人脈は必ず帰ってから教室スタッフや職場、何よりも子どもたちに還元します！

交流できた（1人　合計11件）

分科会の同じテーブルの方々とのつながりができた。

【教室関係者】

意欲（2人　合計3件）

自分（コーディネーター）のやる気が出た。
地域、また現在している教室の足りない面がわかり、改善点がわかったので、解決に向けて動けると思う。

情報を聞けた（1人　合計7件）

すごく勉強になりました。

現状（1人　合計1件）

未だ苦労している市町村も多い中で、我々は意外と順調に取り組んでいる。

【双方所属・その他の所属】

情報を聞けた（2人　合計7件）

現在地域で抱えている課題にせまるヒントを得ることができた。
他県の現状や課題を伺うことができた。

時間不足（2人　合計6件）

あと1日欲しい。
時間が足りない

★上記⑧aの設問に3）あまりできなかった　と回答された方の自由記述より

【行政関係者】

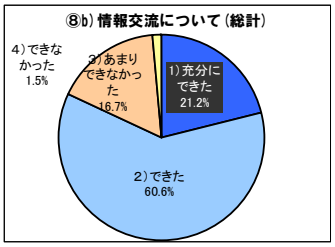
時間不足（2人　合計6件）

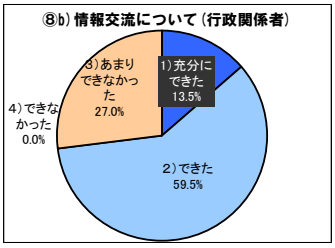
時間が少なかった。
時間が少なすぎた。

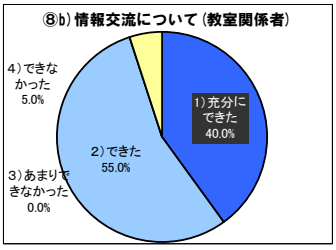
⑧ プログラム全体を通しての研究大会の成果について

b) 放課後子ども教室事業の課題解決の方策検討のための情報交流について

	行政関係者		教室関係者		双方所属		不明		総計	
	人	%	人	%	人	%	人	%	人	%
1）充分にできた	5	13.5%	8	40.0%	0	0.0%	1	12.5%	14	21.2%
2）できた	22	59.5%	11	55.0%	1	100.0%	6	75.0%	40	60.6%
3）あまりできなかった	10	27.0%	0	0.0%	0	0.0%	1	12.5%	11	16.7%
4）できなかった	0	0.0%	1	5.0%	0	0.0%	0	0.0%	1	1.5%
総計	37	100.0%	20	100.0%	1	100.0%	8	100.0%	66	100.0%
無記入、欠席	3		4		0		2		9	







［自由記述件数］　　（単位：人）

	行政関係者	教室関係者	双方/行政教室以外	総計
参考になった・ためになった	3	0	2	5
時間不足	4	0	1	5
交流できた	1	2	0	3
要望	1	1	0	2
認識	1	0	0	1
励みになった	0	1	0	1

★上記⑧bの設問に１)充分にできた、２)できた　と回答された方の自由記述より

【行政関係者】

参考になった・ためになった（3人　合計5件）

短い時間の中で充実した内容でした。
日常では改めて振り返ることがなかなかできないので、そういう意味で貴重だった。
ある程度理解が進んだ。

時間不足（1人　合計5件）

時間が必要

交流できた（1人　合計3件）

他自治体の方との情報交換、子ども教室運営者の悩みなど、交流を通して知ることができた。

認識（1人　合計1件）

課題解決は目的ではなく、目指すべき方向性であることをよく意見した。

【教室関係者】

交流できた（2人　合計3件）

メンバーの方が非常に協力的だった。
自分の課題に対し多くの意見をもらい良かった。

要望（1人　合計2件）

昨夜の交流会は市教委等、担当課職員が多すぎる。もう少し現場の安全管理員の交流がしたい。

励みになった（1人　合計1件）

すぐに解決はできないかもしれないが、他の方々もがんばっていると励みになった。

【双方所属・その他の所属】

参考になった・ためになった（2人　合計5件）

現場に生かしていきたい。
現在地域で抱えている課題にせまるヒントを得ることができた。

★上記⑧bの設問に３)あまりできなかった　と回答された方の自由記述より

【行政関係者】

時間不足（3人　合計5件）

時間が少なく、突っ込んで議論できなかった。
時間が短く、あまりたくさんの方とお話できなかった。
時間が足りない。

要望（1人　合計2件）

事例紹介を講義の柱にしないと前日の報告が活きない。

【双方所属・その他の所属】

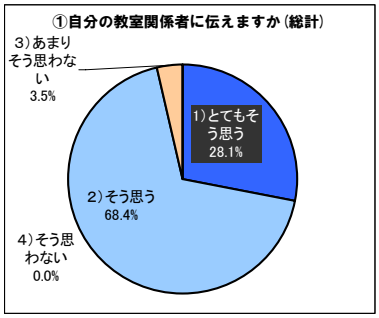
時間不足（1人　合計5件）

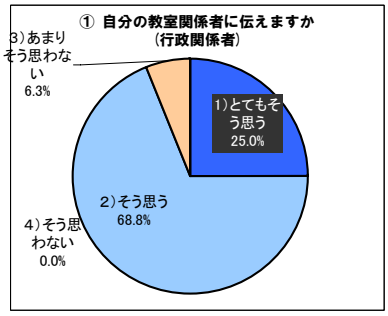
分科会を含め時間が足りなかった。

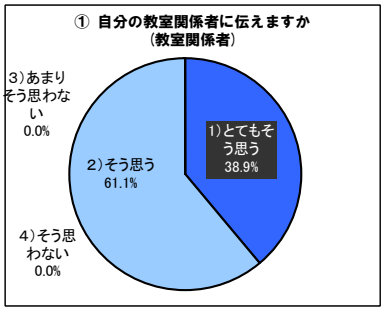
3. 研究大会での情報をご自身の教室でどのように活用できると思いますか？

① 研究大会で取り上げられた全国の状況や事例、分科会の内容について、自分の教室関係者に伝えますか？

	行政関係者		教室関係者		双方所属		不明		総計	
	人	%	人	%	人	%	人	%	人	%
1)とてもそう思う	8	25.0%	7	38.9%	0	0.0%	1	16.7%	16	28.1%
2)そう思う	22	68.8%	11	61.1%	1	100.0%	5	83.3%	39	68.4%
3)あまりそう思わない	2	6.3%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	2	3.5%
4)そう思わない	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
総計	32	100.0%	18	100.0%	1	100.0%	6	100.0%	57	100.0%
無記入、欠席	8		6		0		4		18	







[自由記述件数] （単位：人）

※複数回答あり	行政関係者	教室関係者	双方/行政教室以外	総計
検討してから伝えたい	4	0	1	5
伝えたい	2	2	1	5
研修について	3	0	1	4
活用したい	0	2	1	3
その他	2	0	0	2
課題	1	1	0	2

★上記①の設問に1)とてもそう思う、2)そう思う と回答された方の自由記述より

【行政関係者】

検討してから伝えたい（3人 合計5件）

県担当として今回の内容をどう生かすか、よく考え市町村へ何らかの形で下していきたいと強く思っています。
自分の地域でも活用できるかどうか検討する会を持ちたい。
県の研修会等でとりあげていきたい。

研修について（3人 合計4件）

教育に関することに特効的な解決策はないので、このような研修でできることは自分の考え、課題の再確認ができる。
貴重な参加の機会を得た。
他教室の取り組み等を知ることができた。

伝えたい（2人 合計5件）

どんどん情報を提供したい。
基調講演の、人とのつながりの大切を視点に置いた子ども教室の重要性をしっかり伝えたい。

その他（1人 合計2件）

解答選択肢がなんだか変（私だけ？）設問も良く考えるとやっぱりヘン。しっかりかんで飲み込んでフィードバックします。

【教室関係者】

伝えたい（2人　合計5件）

子どものためにそうしたい。
1つの意見に固まらず、いろんな方向性があることを伝えていきたい。

活用したい（2人　合計3件）

非常に有意義で、今後に活用致します。
活用できそうな事例は今後の運営にいかしていきたいと思います。

課題（1人　合計2件）

現代は安全で安心な居場所づくりに一生懸命ですが、他の校区の事例を参考にして、活動のマンネリ化のないように工夫も必要。

【双方所属・その他の所属】

検討してから伝えたい（1人　合計5件）

研修会などにおいて報告ができるようにしたい。

研修について（1人　合計4件）

たくさん研修も取り組みたい。

伝えたい（1人　合計5件）

市町への事業説明会や関係者を集めた研修会等で紹介していける内容だった。

活用したい（1人　合計3件）

研修会などの場を通してフィードバックを図っていきたい。

★上記①の設問に3）あまりそう思わない　と回答された方の自由記述より

【行政関係者】

検討してから伝えたい（1人　合計5件）

市が再度見つめ直す必要あり。

課題（1人　合計2件）

地域に伝えるヒントにはなるが、そのままの情報ではなくいくつかの話題の一つとすることしか深められなかった。

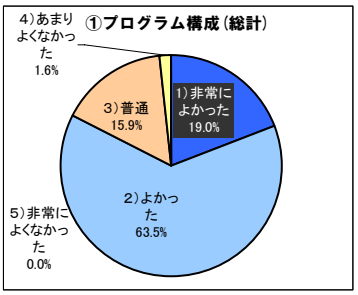
その他（1人　合計2件）

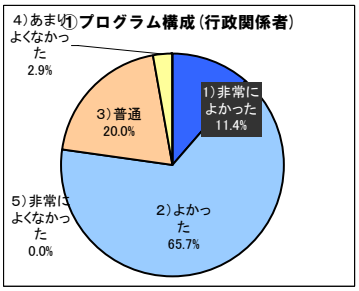
当市の現在のスタイルが違う。

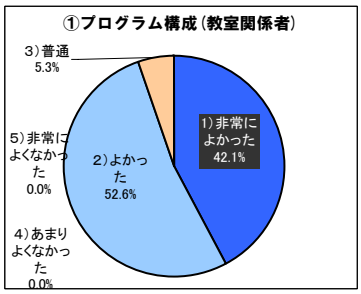
4. 研究大会の開催形態はいかがでしたか？

①プログラム構成について

	行政関係者		教室関係者		双方所属		不明		総計	
	人	%	人	%	人	%	人	%	人	%
1）非常によかった	4	11.4%	8	42.1%	0	0.0%	0	0.0%	12	19.0%
2）よかった	23	65.7%	10	52.6%	1	100.0%	6	75.0%	40	63.5%
3）普通	7	20.0%	1	5.3%	0	0.0%	2	25.0%	10	15.9%
4）あまりよくなかった	1	2.9%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	1	1.6%
5）非常によくなかった	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
総計	35	100.0%	19	100.0%	1	100.0%	8	100.0%	63	100.0%
無記入、欠席	10		7		0		2		19	

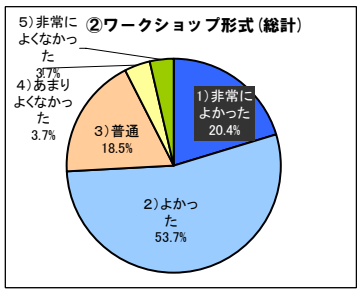


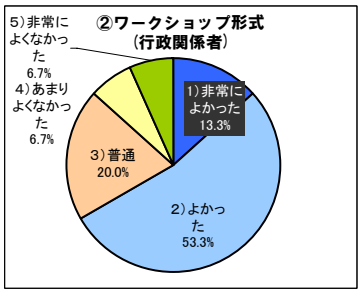


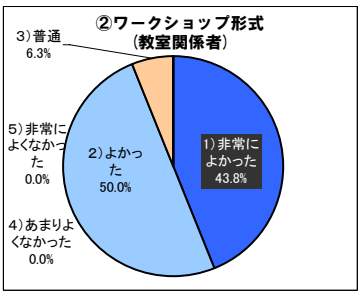


②ワークショップ形式について

	行政関係者		教室関係者		双方所属		不明		総計	
	人	%	人	%	人	%	人	%	人	%
1）非常によかった	4	13.3%	7	43.8%	0	0.0%	0	0.0%	11	20.4%
2）よかった	16	53.3%	8	50.0%	1	100.0%	4	57.1%	29	53.7%
3）普通	6	20.0%	1	6.3%	0	0.0%	3	42.9%	10	18.5%
4）あまりよくなかった	2	6.7%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	2	3.7%
5）非常によくなかった	2	6.7%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	2	3.7%
総計	30	100.0%	16	100.0%	1	100.0%	7	100.0%	54	100.0%
無記入、欠席	10		8		0		3		21	

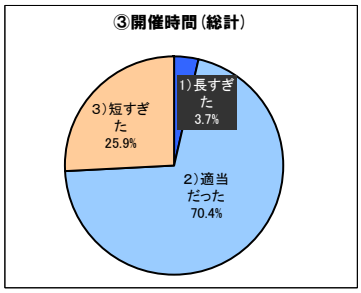


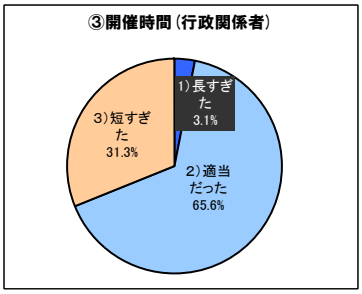


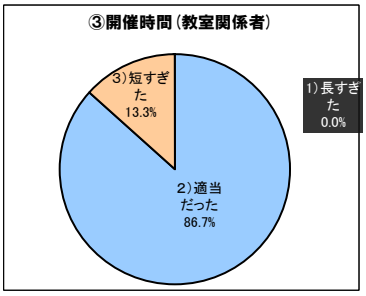


③開催時間について

	行政関係者		教室関係者		双方所属		不明		総計	
	人	%	人	%	人	%	人	%	人	%
1）長すぎた	1	3.1%	0	0.0%	0	0.0%	1	16.7%	2	3.7%
2）適当だった	21	65.6%	13	86.7%	0	0.0%	4	66.7%	38	70.4%
3）短すぎた	10	31.3%	2	13.3%	1	100.0%	1	16.7%	14	25.9%
総計	32	100.0%	15	100.0%	1	100.0%	6	100.0%	54	100.0%
無記入、欠席	13		11		0		4		28	

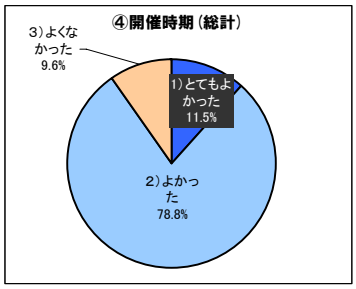


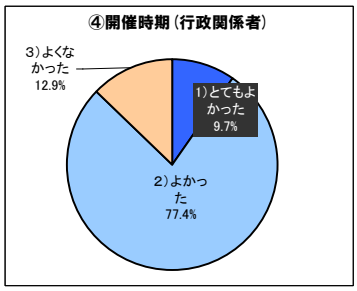


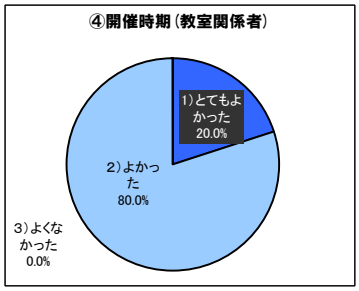


④開催時期について

	行政関係者		教室関係者		双方所属		不明		総計	
	人	%	人	%	人	%	人	%	人	%
1)とてもよかった	3	9.7%	3	20.0%	0	0.0%	0	0.0%	6	11.5%
2)よかった	24	77.4%	12	80.0%	0	0.0%	5	100.0%	41	78.8%
3)よくなかった	4	12.9%	0	0.0%	1	100.0%	0	0.0%	5	9.6%
総計	31	100.0%	15	100.0%	1	100.0%	5	100.0%	52	100.0%
無記入、欠席	14		11		0		5		30	







★上記④の設問に1)とてもよかった、2)よかった と回答された方の希望時期

【双方所属・その他の所属】

10月頃

★上記④の設問に3)よくなかった と回答された方の希望時期

【行政関係者】

予算時期は避けてほしい（2人）

予算の時期はきつい
予算時期は避けてほしい

年度前半（2人）

夏
春

その他（1人）

1月頃

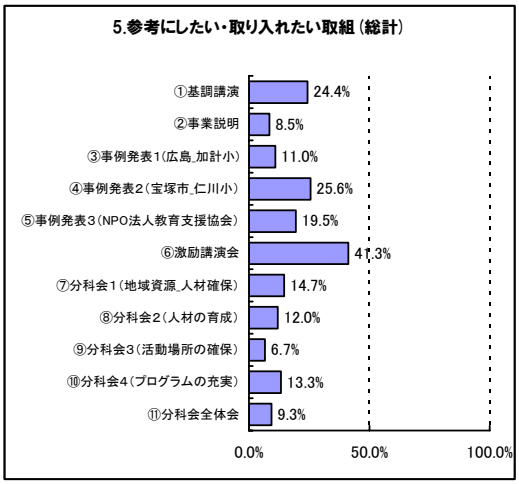
【双方所属・その他の所属】

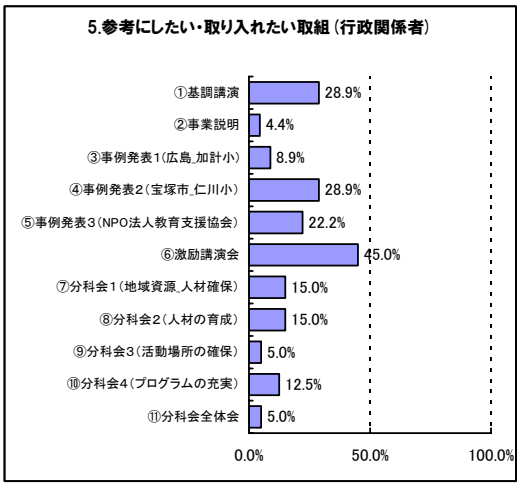
予算時期はつらい

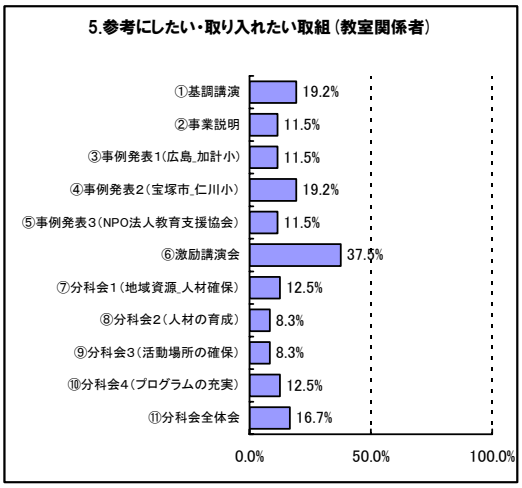
5. 本研究大会のなかで参考にしたい取組又は研修に取り入れたい（取り入れて欲しい）プログラムはありましたか？※複数回答あり

※有効回答数に対する%

	行政関係者		教室関係者		双方所属		不明		総計	
	人	%	人	%	人	%	人	%	人	%
①基調講演	13	28.9%	5	19.2%	0	0.0%	2	20.0%	20	24.4%
②事業説明	2	4.4%	3	11.5%	0	0.0%	2	20.0%	7	8.5%
③事例発表1（広島県安芸太田町　加計小学校の事例）	4	8.9%	3	11.5%	1	100.0%	1	10.0%	9	11.0%
④事例発表2（兵庫県宝塚市　仁川小学校の事例）	13	28.9%	5	19.2%	1	100.0%	2	20.0%	21	25.6%
⑤事例発表3（特定非営利活動法人　教育支援協会の事例）	10	22.2%	3	11.5%	1	100.0%	2	20.0%	16	19.5%
⑥激励講演会	18	45.0%	9	37.5%	1	100.0%	3	30.0%	31	41.3%
⑦分科会1（地域資源としての人材確保について）	6	15.0%	3	12.5%	0	0.0%	2	20.0%	11	14.7%
⑧分科会2（人材の育成について）	6	15.0%	2	8.3%	0	0.0%	1	10.0%	9	12.0%
⑨分科会3（活動場所の確保について）	2	5.0%	2	8.3%	0	0.0%	1	10.0%	5	6.7%
⑩分科会4（プログラムの充実について）	5	12.5%	3	12.5%	1	100.0%	1	10.0%	10	13.3%
⑪分科会全体会	2	5.0%	4	16.7%	0	0.0%	1	10.0%	7	9.3%
総計	81		42		5		18		146	







★上記5の設問に回答された方の自由記述より

【行政関係者】

もう少し時間をとって詳しく話を聞きたいし、質疑応答などまであるとよい。
やっぱり現場の声は貴重でした。
改めて本来の事業主旨を見つめ直すきっかけとしたい。
教育支援協会の事例は、NPO自体の活動をもっと知りたいと感じた。
仁川小の事例発表は、プレイパークの考え方を伝えるためには格好の良素材。
放課後子ども教室と学童の一体化までは連携して取り組んでいる自治体の実践例の紹介もお願いしたい。
放課後子ども教室推進アドバイザーを生かしたい。

【教室関係者】

全て私の力になり、これが子どもたちに届くように頑張りたい。

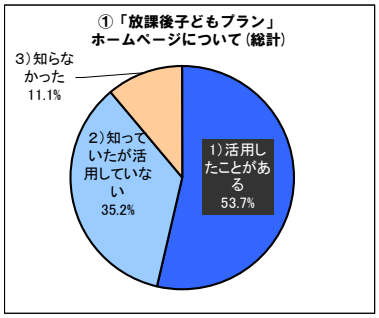
【双方所属・その他の所属】

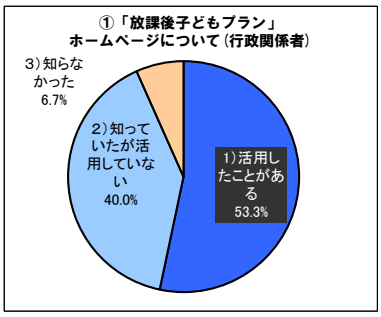
子ども主体で運営することについて再認識できた。

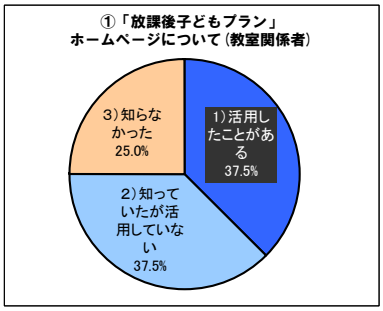
6. 本研究大会でも紹介された文部科学省の施策等を活用したことがありますか。

①「放課後子どもプラン」ホームページについて

	行政関係者		教室関係者		双方所属		不明		総計	
	人	%	人	%	人	%	人	%	人	%
1）活用したことがある	16	53.3%	6	37.5%	1	100.0%	6	85.7%	29	53.7%
2）知っていたが活用していない	12	40.0%	6	37.5%	0	0.0%	1	14.3%	19	35.2%
3）知らなかった	2	6.7%	4	25.0%	0	0.0%	0	0.0%	6	11.1%
総計	30	100.0%	16	100.0%	1	100.0%	7	100.0%	54	100.0%
無記入、欠席	15		10		0		3		28	







★上記①の設問に1）活用したことがある　と回答された方の自由記述より

【行政関係者】

見たことはある。
事例紹介は静的な活動の状況ではなく、そこに至るまでに誰がどのように関わって、どのような苦労があったかまで掘り下げてほしい。
子ども教室のガイドラインや過去のQ&Aなどを載せてほしい。
基礎的資料としてほぼ全てのページに参照している。

【教室関係者】

もう少し一般の方が見てもわかるような内容だと、保護者の方にも伝えやすいと思います。

【双方所属・その他の所属】

各都道府県の市町単位での実施割合。
放課後児童クラブの小学校区における実施割合。
文書、資料が整理されて公表されているのは非常に役立つ。

★上記①の設問に2）知っていたが活用していない　と回答された方の自由記述より

【行政関係者】

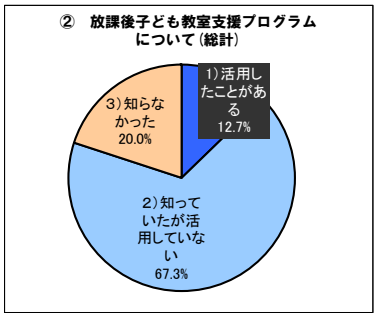
持ち回りで具体的活動内容を紹介するコンテンツを入れてほしい。
アップデートもまめにしなくちゃ。

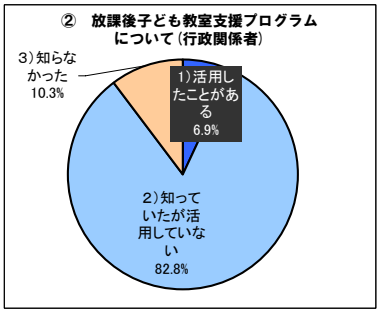
【教室関係者】

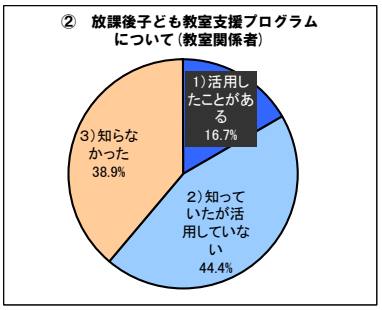
活用してみます。

② 放課後子ども教室支援プログラムについて

	行政関係者		教室関係者		双方所属		不明		総計	
	人	%	人	%	人	%	人	%	人	%
1）活用したことがある	2	6.9%	3	16.7%	0	0.0%	2	28.6%	7	12.7%
2）知っていたが活用していない	24	82.8%	8	44.4%	1	100.0%	4	57.1%	37	67.3%
3）知らなかった	3	10.3%	7	38.9%	0	0.0%	1	14.3%	11	20.0%
総計	29	100.0%	18	100.0%	1	100.0%	7	100.0%	55	100.0%
無記入、欠席	16		8		0		3		27	

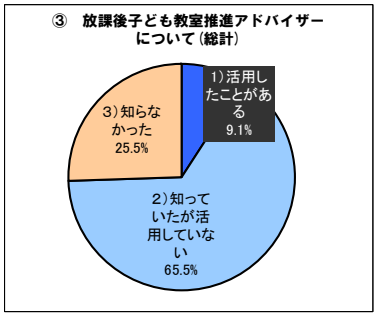


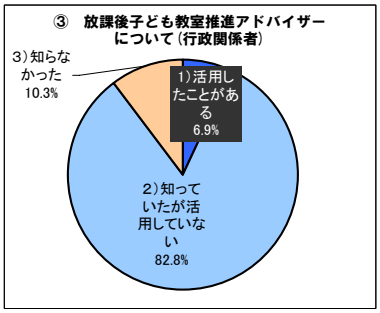


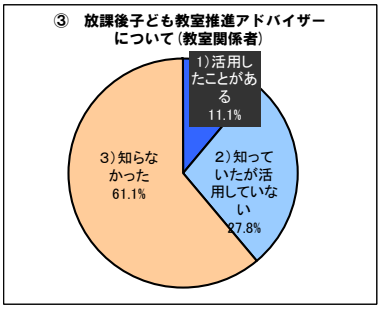


③ 放課後子ども教室推進アドバイザーについて

	行政関係者		教室関係者		双方所属		不明		総計	
	人	%	人	%	人	%	人	%	人	%
1）活用したことがある	2	6.9%	2	11.1%	0	0.0%	1	14.3%	5	9.1%
2）知っていたが活用していない	24	82.8%	5	27.8%	1	100.0%	6	85.7%	36	65.5%
3）知らなかった	3	10.3%	11	61.1%	0	0.0%	0	0.0%	14	25.5%
総計	29	100.0%	18	100.0%	1	100.0%	7	100.0%	55	100.0%
無記入、欠席	16		8		0		3		27	







7. 今後、放課後子ども教室の更なる充実に向けて、ご意見・ご要望等ありましたらご自由にお書きください。

［自由記述件数］ （単位：人）

	行政関係者	教室関係者	双方/行政教室以外	総計
要望（制度について）	14	3	5	22
研究会について	5	2	1	8
意欲・感想	0	6	0	6
課題	3	0	0	3

【行政関係者】

要望（制度について）（14人　合計22件）

NHKなどで例えば体操のひろみちお兄さんあたりをモデルに、特番で制作、PRしてほしい。おつかれさまでした。
コーディネーターの職員化
学校への理解促進
学校への理解促進
国として末長く継続した事業としてもらいたい。
国の広報の充実
制度の内容が十分学校現場に理解されていないのではないか。生涯学習局からの情報発信という点で、県や市町村でも小中学校関係課、係に書類等が生き届いていないのではないか。もっと学校現場によく主旨を理解してもらうことが大切。そのためには、国からの文書も初等中等局と連名で文書を通達していくことが大切だと思う。
都道府県は単なる中継ぎ役。文科省が手間を省くために中継ぎ役を置いているだけとしか考えられない。市町村と直接やり取りをすれば、委託調査などしなくても自然と情報は集まる。
都道府県担当者は現場のことをほとんど知らない。現場をよく知っている市町村とやり取りして頂くことを希望する。
保険制度の確立
補助制度
放課後子ども教室支援プログラム、推進アドバイザーを活用していきたい。
予算の確保は必須条件。このような大会が行われ、参加できる環境整備を。
理論まで抽象化することのできる基本的事項が全国どこでも共通するものとして存在するので、そのあたりの理論形成と共有はもっとなされて良い。

研究会について（5人　合計8件）

アンケートの量が多い。
とてもよい研修でした。勉強になりました。ありがとうございました。
ひとつひとつのスパンが短く、時間に追われる。もう少し内容を減らしてゆとりを持たせたほうがよいかも。
学校を借りるという姿勢ではなく、win-winとなっている事例の紹介
今後も継続してほしい。情報収集の場として必要である。

課題（3人　合計3件）

「人材」というコトバ、ダブルミーニング→コーディネーターや基調となる人材。活動に色を添えるメニューの多様化の資源。
開催日数の違いによる教室ごとのベクトルの違い。
県、市町、現場のコーディネーター、地域住民、学校教員の関係主体が一般的にどういうことを担うのか、どこがネックとなっているのか。

【教室関係者】

意欲・感想（6人　合計6件）

ありがとうございました。
できるだけ教室の安全安心な居場所の確保、自由にのびのびと遊ばせる。1～6年の上下関係を大切にして、体力づくりとルールを守る、整理整頓を身につける、けじめをつけられる、知識力とは違う社会性を育むことではないでしょうか。
子どもの自主性を深く考える。人材の確保を考える。学習予習について、取り組みをしていきたい。
地域の子どもは地域で育てよう。子どもたちが生きる力を育み、こころ豊かに育つには、地域の多くの人々の力が必要です。
忍耐力をもって子供に向き合い、子どもたちと共に学びあって、豊かな場、コミュニティを育む場に一生懸命頑張ります。
放課後の居場所は大切であり、大変ありがたいプランです。ぜひ続けていきましょう。ありがとうございました。

要望（制度について）（3人　合計22件）

国の動きに左右され、市町村の子ども教室の今後が変わっていくので、しっかりとした予算をおさえてもらいたい。
市町村では子ども教室の認知度はまだまだ低いと思います。児童クラブとの共存のありかたに双方が納得できるような国民への伝達が必要だと思います。 コーディネーターを正規の職員としてつけると継続できるので、その予算も頂きたい！
全体的な人員不足をすごく感じます。人員配置ができる予算、内容を今後多く望みたいです。

研究会について（2人　合計8件）

全国レベルだと時間はとりにくいかもしれませんが、どれも短い時間で、もう少しゆっくりお話を聞かせて頂きたかった。
同じ思いを持つ人たちが全国にたくさんいらしゃるということは心強いです。

【双方所属・その他の所属】

要望（制度について）（5人　合計22件）

学校関係者の理解促進
教育課程への追加（必修）
備品、賃金、広報
予算（補助）の充実
学校教育関係者への理解促進（余裕教室の開放、教室開催への理解）

研究会について（1人　合計8件）

研究大会で作成されていたまとめ資料や各種資料について、後日配布頂けるとありがたい。

平成２１年度　文部科学省委託事業

総合的な放課後対策推進のための調査研究

受託者：株式会社キャリアリンク

〒542-0083　大阪市中央区東心斎橋 1-14-15

TEL：06-6251-6001

http://www.lab-warp.ne.jp/